

静岡発 福祉文化の創造軌跡30年
草創期からご近所福祉検証期を辿る

静岡福祉文化を考える会

静岡発 福祉文化の創造軌跡30年 草創期からご近所福祉検証期を辿る 目 次

はじめに 本会の原点「静岡発 福祉文化の創造」30年を視る	2
第1章 「静岡発 福祉文化の創造」の原点を辿る	3
1 「福祉文化」が語られる社会の動きの中で 「第11回日本福祉文化学会現場セミナー」開催が本会結成につながる	
2 結成当時の「会員対象アンケート」を繙く	
3 本会結成時のネットワークを活かし「第18回日本福祉文化学会現場セミナー」開催実現	
第2章 県内各地で学んだ「現場セミナー」から福祉文化を発信	26
1 「結婚」「共働き」「地域」「父親」「障害児者理解」論議	
2 「大人と青年」から、再び「地域」「ボランティア」論議	
第3章 協働で取り組んだ「第13回日本福祉文化学会全国大会 IN 静岡」	41
1 福祉文化は地域にあり、「地域福祉と福祉文化」をもとに	
2 「協働」による福祉文化実践の場	
3 「静岡県福祉文化研究セミナー」の誕生	
第4章 静岡県委託事業「一人でも安心して暮らせる地域づくり事業」7年間	68
1 全国的に大きな社会問題となっていた「高齢者の孤立・孤独」を防ぐには	
2 「静岡県委託事業」は、福祉文化実践をもとに展開	
3 「調査研究事業」「実践地区検証事業」「啓発事業」の3つの柱立による検証	
4 「若者発居場所あり方研究会」立ち上げ	
第5章 高齢者からの学びで浮き彫りになった「ご近所福祉」	86
1 「劇団ほのお」大石さきさんとの出会い	
2 若者が「ご近所福祉」を学ぶ「高齢者宅訪問型研修プログラム」の意義	
3 高齢者に学んだ若者が捉えた「ご近所福祉」	
第6章 「ご近所福祉こそ福祉文化」を切り拓く	103
1 「若者発 ご近所福祉かるた」誕生の経緯と10年のプロセス	
2 “見える化”“わかる化”の地域福祉教育教材として「福祉文化」を発信	
第7章 機関誌「OUR LIFE」から「静岡発 福祉文化の創造」を視る	135
第8章 30年間の「調査研究活動」で福祉文化を発信	164
第9章 「焼津福祉文化共創研究会」との協働による7年の歩み	227
展 望 更なる「静岡発 福祉文化の創造」これからの課題を探る	243
資料編	245
1 静岡福祉文化を考える会30年の歩み	
2 令和7年度 静岡福祉文化を考える会活動計画	
3 静岡福祉文化を考える会規約	

は じ め に

本会の原点「静岡発 福祉文化の創造」30年を視る

「静岡福祉文化を考える会」は、結成以来、その節目ごとに「記念誌」を発行し、常に、地域社会に「静岡発(地域発)福祉文化の創造」を発信してきました。そして、ここに、30年の節目を「静岡発 福祉文化の創造軌跡 30年—草創期からご近所福祉検証期を辿る—」と題して、「30年誌」を発行しました。

これまでは「記念誌」として、

●10周年記念誌(H19.10.20発行)「静岡発 福祉文化の実践と推進 結成10年を振り返って」

本会結成準備から結成後、福祉文化実践活動に熱い思いを寄せてこられました家本豊氏が、「とにかく10年間の活動を形にしよう」と、なんと1年半かけて「調査」「機関誌 OUR LIFE」「新聞掲載記事」等の資料整理や、会員からの声を取りよせるなど精力的に活動をまとめて完成しました。

●20周年記念誌(H28.3.31発行)「静岡発 福祉文化の創造20年 これまでとこれから」

20年の活動のプロセスをなんとか、まとめなければと、「10周年記念誌」をひもどきながら、「静岡福祉文化を考える会20年の歩み(年表)」を作成しました。特に、平成20年度から平成26年度まで7年間取り組んだ「静岡県委託事業:一人でも安心して暮らせる地域づくり事業(高齢者等の孤立死孤独死防止事業)」から、尊い地域づくりのあり方を「調査」「実践検証」「地域総合型研修検証」に区分しながら考察し、社会の大きな流れの中で、本会のこれまでの歩みを「草創期」「協働期」「実践融合期」「共創社会実現期」に区分してまとめるとともに、「本会機関誌 OUR LIFE」「この20年間にマスコミが取り上げた福祉文化掲載記事」を基に発行しました。

●25周年記念誌(R3.2.14発行)は「25年の歩みと調査活動の意義」をまとめる

「25周年記念誌」は、特に、「記念誌」としての発行ではなく、令和2年度(2020年度)調査研究事業「つながるご近所の再構築 決め手は一体何か ご近所福祉その意識と実態検証報告書」の中に、本会活動の主要活動である「調査研究活動」と関連付けて、「25年の歩みと調査研究活動の意義」を章立てし、その中で、「25年の歩み(年表)」の掲載と「ご近所福祉検証期」を加え、これまでの尊い、「若者の長寿者から学んだご近所福祉」から誕生した「若者発 ご近所福祉かるた」を紹介しました。

このように、各節目の「記念誌」は、表面的に積み上げてきた活動記録をもとに、まとめてきた経緯があります。

このたび発行しました「30年誌」は、これまでの各節目の記念誌を更にひもどきながら、阪神淡路大震災1年後、「災害と福祉文化」を議論して誕生した本会の原点、そして、永遠の課題「福祉文化とは何か」を問いつつ、「世代間交流で、身近な地域の現場に学ぶ福祉文化」「協働による、第13回日本福祉文化学会全国大会 IN 静岡開催の実現」、「30年間の調査研究活動から浮き彫りにした福祉文化」「ご近所福祉検証期と福祉文化」「長寿者に学ぶご近所福祉と福祉文化」「若者発 ご近所福祉かるた誕生のプロセスと福祉文化」「機関誌“OUR LIFE”から読み取る福祉文化」等の各領域から、静岡県域を対象に活動してきた本会30年間の取り組みが、果たして、全域域に「静岡発 福祉文化の創造」を発信してきたかを総括・検証する「30年検証誌」として発行いたしました。

関係機関・団体及び地域実践者の皆様方の、これまでのご支援に対しまして、厚くお礼申し上げます。

令和 8年 1月10日

静岡福祉文化を考える会
代表 平田 厚

【第1章】 「静岡発 福祉文化の創造」の原点を辿る

1 「福祉文化」が語られる社会の動きの中で、 「第11回日本福祉文化学会現場セミナー」開催が本会結成につながる

これまで、10年、20年、25年の各節目で本会をまとめた「記念誌」は、結成を原点にしたプロセスを綴ってきた。30年の節目では、当時の地域社会の動きを振り返り、改めて、なぜ「静岡発 福祉文化の創造」かを明らかにしていくことにした。

平成元年（1989年）7月16日に「福祉文化学会」（現 日本福祉文化学会）が発会されたこと、学会は、異業種交流的集団で、誰でも、気軽に福祉あれこれを和やかに語り合える学びの場、発会と同時に、新潟県内の学会会員が「新潟福祉文化を考える会」を結成されたこと等を本県の福祉教育の推進事業に多大なご教授をいただいた、阪野貢氏（当時、宝仙学園短期大学助教授）から知ることが出来た。昭和の時代から平成の時代に入り、大きく社会福祉の仕組みが変わり、制度や資格で社会の問題を解決する動きの中で、これまで培われてきた「共助」をいかに維持できるか、世代や領域を超えて、豊かに暮らし合うことを、身近な地域社会で学習できる機会を大いに期待していた。少しずつ、福祉への関心が高まってきたとはいえ、まだまだ、当時、特定の人々の関心にとどまっているようにも感じていた。

静岡県の地域特性をもとに、住民一人一人が、実践し、体験しながら学習（理論化）する、また理論を実践することを「福祉文化」と読み取りながら、そこには「専門性と市民性の融合」による地域づくりをかすかに期待をしていた。

学会発会4年後の平成4年（1992年）には、静岡県内でも、関心のある有志が、日本福祉文化学会に加入するとともに、機会あるときに、学会全国大会に参加し、学会会員相互の情報交換をもつように努力を続けた。

学会は、主な事業として、全国各地で「現場セミナー」を開催していることを知った。

当時、学会の「現場セミナー」は、関連記録から、主に福祉施設において開催されているように感じた。平成5年（1993年）4月4日には、静岡県内の先進的取り組みをされていた福祉施設において「第5回福祉文化現場セミナー」が開催された記録がある。

学会が、1992年（平成4年）3月30日に発行した「福祉文化研究V0I.1」に、初代学会会長一番ヶ瀬康子先生が巻頭言で、「福祉文化」を次のように述べられていた。

「福祉文化」とは何か

“福祉文化”という語は、“福祉”と“文化”が合わさった言葉である。最近の、いわば、造語といえようか。しかし、一つの言葉が生まれるには、それなりの背景と実体がある。

また、必要があったのである。

一体、“福祉文化”という語は、どのような背景と実体または必要によって生まれたのであろうか。まず、“福祉”という言葉は、広義にとらえれば、幸福、しあわせと同義である。

だが、狭義に、そして、厳密にとらえるならば、E. エンゲルによると、「日常生活要求の充足努力」ということである。つまり英語で言えば、“Happy”よりも“Wellbeing”に近い言葉である。したがって、人々の日常生活さらに国民生活自体が変化をすれば、当然そこでの要求は異なり、また変化をすると考えられる。ことに、日本においては、その国民生活が1960年代の高度成長期以降、急速に変化してきた。その中で、“福祉”の内容も変ってきたのである。

そして、とくに80年代から90年代にかけての生活の質の向上への要求が、国民生活の基本的な志向としてとらえられはじめた。そのころから“福祉”においても、その質を問う努力が、いろいろな場面で出現してきたのである。

一方で、文化自体に対するとらえ方も、同様な傾向が生じたと思える。とくに、1960年代以降の急速なテレビの普及にとともない、日本の文化自体が視聴覚的な素材を媒介とし、また情報によって、急速に大衆化した。国民のほとんどの需要を、均質化したといえよう。

さらに、文化行政、文化政策の興隆によって、各種の文化財の分配が、より拡大していった。

そのもとで、社会福祉施設や機関においても、テレビなど視聴覚の機材が日常化し、その他の文化財の活用も活発化していったのである。

以上のような状況のなかで、福祉の質を高めるための“福祉”の文化化と、ノーマライゼーションの理念を媒介とし、さらに高齢化社会の到来にとともなう生涯学習への需要を契機として、“文化の福祉化”が注目されていった。

そして、それらが統合化された概念として、“福祉文化”として実っていったのである。

しかし、この言葉の意義は、もっと深くとらえることが重要である。この言葉をより本質的にとらえるならば、きわめて深い、そして人間の文化創造の原動力にせまる視角があるからである。というのは、“福祉”自体が、単に生存を認めるだけのものから、人間らしい生活を保障するものになり、さらに一人々々のその人の自己実現の援助へと焦点が高まってきている今日、一人々々の真の自己実現こそは、新たな文化創造につながるものがあるからである。つまり文化遺産を受け身で楽しむだけでは、文化とはいえない。

文化とは、創り出すという側面が重要である。その点からいうならば、新たな社会の価値観、人間観が、その根底にあることが不可欠となろう。したがって、いかなる時代においても、文化を生み出したものは、決してその社会に、また、その社会の人間観に安住している層ではなく、むしろその社会で差別され、逆境のなかから人生の苦悩を感じ、新たにその社会をこえて真・善・美の普遍性を求めて模索をつづけた人々であった。音楽の歴史でいうならば、例えば西洋音楽のルーツのグレゴリオ聖歌は、当時の孤児院の子どもたちを多く混じえた合唱団によって、より洗練され発達をしたのである。おそらく、子どもたちの純真で切なるその祈りが実ったのであろう。わが国の文化でも平家琵琶の名曲やあるいは箏曲の進歩など、とくに琴の多くの名曲を生み出した宮城道雄の例にみられるように、視覚障害の人の力が大きかった。日本文化の粹といわれる歌舞伎も、出雲の阿国をはじめ、かつて“河原乞食”といわれていた人々によってきり拓かれた。いずれにしても真の福祉、真の文化というものを目指したときに、“福祉文化”という造語は、“福祉”“文化”それぞれの在り方を問い、人間としての本質にせまる表現となる。また、その本質にせまる道筋のなかでの“福祉”“文化”それぞれの向上を目指すにあたっての中間概念でもある。しかし、以上のことは、言葉や説明だけで終わってよいもので

はない。福祉を切実に必要とするいわば“被差別”“弱者”“逆境”の人々あるいはその痛みを知る人こそ、真の文化を生み出すという視点を明確にしながら、実践のあらゆる場面から証明し、手ごたえあるものにしていく必要がある。そして、そのエネルギーを結集していくことが重要である。もしかしたら、“福祉文化”の実践こそが、今の荒れはてた日本社会を変え、そこから脱する視点と力を、生み出すかもしれない。おぼろげながら、しかし熱い想いで、そう思っている人々によって、この言葉は、確立され実体化しつつあるのである。

学会発会以前、1962年代から“福祉文化”を発信していることが関連文献から読み取れる。

*1962年代 灘生活協同組合における、組合員の相互扶助活動における福祉文化事業

*1970年代 奈良たんぼぼの会のわたぼうしコンサート事業

(知的障害の方々の作詞・作曲・自演の取り組み)

*1981年代 「福祉は文化なり」を発現された、ねむの木学園 宮城まり子園長様をはじめ、群馬県内の福祉施設内に「福祉文化研究所」設置等が紹介されている。

1997年代に発行された「福祉文化論」(有斐閣発行)は、各領域における内容をまとめているが、“文化”をラテン語で「耕す」と説明されていることに関心を持った経緯がある。

こうした、地域社会の動きの中で、平成5年(1993年)の学会役員会において、平成7年度(1995年)静岡県で「第11回現場セミナー」開催の要請があった。

果たして、静岡の特性をもとに、「福祉文化」を学び合う現場セミナーを開催することが出来るか、多少の不安を抱きながら、「現場セミナー」実現に向けた道程を大切に、県内各地の地域活動実践者等に広く協力を呼び掛けることにした。

当時を振り返ると、まず、福祉文化を学び合う「第11回学会現場セミナー」開催に向けた議論の最中、平成7年(1995年)1月17日に「阪神淡路大震災」が発生した。

これまで、静岡県では「東海地震」を意識した議論が続けられていた。

改めて、「阪神淡路大震災」の生々しい教訓をもとに、「災害」をより身近に議論を展開して、「東海地震」への備えを強固にしていこうと「阪神淡路大震災に学ぶ—災害と福祉文化—」をプログラムに加えることにした。有志約70名が、当日に向けて「実行委員会」を積み重ねながら、関係方面への文書発送をはじめ、当日の資料作成等、当時、主に高校生が中心となって、精力的に取り組み、改めて、地域学習とは、関係者だけの努力ではなく、世代を超えて、地域の共通課題を共有し、それぞれの立場で課題解決に向けた取り組みをすることを認識した貴重なプロセスであった。

高校生は、大人集団と学び合うことで、地域参加活動に向けて大きな自信につながったと意見を述べた。企業市民の立場で参加された方々からは、企業感覚により、効率よく福祉活動を展開するノウハウを提供できることを確認できたと語っていた。

「静岡発(地域発)福祉文化の創造」のこだわりを持ちながら、当時、阪神淡路大震災政府復興委員の立場から、学会会長 一番ヶ瀬康子先生の基調講演は、「21世紀に向けて 福祉文化を拓く—阪神淡路大震災の体験をとおして—」を語っていただくことになった。

かすかに“福祉文化”につなげることが出来る「キーワード」として、介護保険制度導入により、制度や資格の公助による福祉課題解決が水面下で浸透している状況にあって、一方では、住民相互の支え合いを大切にしたいと、「共助社会の維持」を組み入れることを確認し合った。

改めて、この時代は、静岡県内各地において、静岡県教育委員会、静岡県ボランティア協会、県・

市町村社会福祉協議会が連携し、福祉・ボランティア学習（活動）の推進により、高校生の地域福祉実践活動の動きが盛んな時期でもあったため、大いに、運営を円滑にすることが出来た。

静岡県民へ、この機会に“福祉文化”発信するには、住民が暮らし合う身近な地域社会において学び合う場を検討しようと、県民レベルの幅広い実行委員会を設ける努力をし、若い層（高校生）から先輩市民の実践者 70 名が賛同し、開催実現に向けた議論を重ねた。

議論を進めていく過程で、この時代に精力的に「施設の社会化」を目指し地域福祉の拠点とした役割を果たしている、浜松市・浜松こども園の「福祉施設の実践発表」をプログラムにした現場セミナーにすることが必要との多くの意見をもとに、2 日間の「第 11 回学会現場セミナー」の開催が実現できた。セミナー当日の運営には、開催地元浜松市近隣の高校生・専門学校学生がボランティアとして参加され、当初の計画では、参加者 140 名がなんと全国各地から 2 日間で、延べ 460 名余の参加者が“福祉文化”を学び合った。

こうした一面から、「若者と福祉文化」を浮き彫りにしたセミナーであったとも強調出来る。

新たに「災害と福祉文化」を組み入れて、「第 11 回日本福祉文化学会 現場セミナー」は、次の開催要項に基づき、意義ある福祉文化実践議論を深める「学会現場セミナー」となった。

第 11 回日本福祉文化学会現場セミナー IN 静岡開催要項 メインテーマ 『静岡発 みんなで語ろう福祉文化を 21 世紀の礎に』

身近な地域社会で、暮らし合う知恵と工夫を出し合いながら、いま大切な一人一人の豊かさの創造をめざして、静岡の特性をもとに、暮らしの質を高める地域活動の検証をそれぞれの立場で研究協議をする目的で開催する。

- 主 催 日本福祉文化学会
- 共 催 ハートフルクリエイションスクール
- 後 援 静岡県 浜松市 静岡県教育委員会 浜松市教育委員会 静岡県社会福祉協議会
浜松市社会福祉協議会 静岡県ボランティア協会 毎日新聞社 読売新聞社
朝日新聞社 産経新聞社 静岡新聞社 中日新聞社 NHK静岡放送局 テレビ
静岡 S B S 静岡放送 静岡第一テレビ 静岡朝日テレビ K-M I X
- 協 力 NHK 学園ネットワーク
- 開催時期 平成 8 年 3 月 30 日（土）13:30～16:30 31 日（日）10:00～16:30
- 開催会場 3/30 浜松市米津町「浜松こども園」
3/31 浜松市旭町「プレスタワー17 階ホール」
- 参加対象/定員/参加費
*福祉・ボランティアに関心のある方・福祉施設・団体関係者・教育関係者等
*3/30 40 名 無料 3/31 100 名 2,000 円(資料・弁当代)
- プログラム
 - ◇第 1 日 13:30 開 会
 - (3/30) 14:00 基調報告「国際音楽都市におけるもう一つの文化運動
— 自立と共生の 21 世紀へ —
(財) 浜松こども園 園長 荒岡 憲正 先生
 - 14:30 療育指導現場研修
 - 15:00 事例発表 (1)「療育施設のおもちゃ図書館」 発表 袴田 英未 先生
(2)「わいわい青年学級の誕生」 発表 植平 喜宣 先生
(3)「心を織り継ぐ人たち」 発表 伊熊さわ江 先生
(4)「大手百貨店内に自立の店 “あした松菱店”」

- 16:00 全体会 (総括)
- 16:30 閉 会
- ◇第2日 (3/31) 10:00 開 会 オープニング・アトラクション [浜松こども園 米津太鼓]
- 10:30 基調講演「21世紀に向けて 福祉文化を拓く
ー 阪神淡路大震災の体験をとおしてー」
講師 日本福祉文化学会 会長 一番ヶ瀬康子 先生
- 12:00 昼 食
- 13:00 分科会 *第一分科会 「災害と福祉文化」
- ・コーディネーター 神戸大学 助教授 小林 博 氏
 - ・事例提供者
 - ① 神戸・ロサンゼルス of 災害をとおしての福祉文化
和光国際高等学校 馬場 清 氏
 - ② 「福祉の視点から考える防災とは」
静岡県ボランティア協会 清水慈子 氏
- *第二分科会 「働く人たちと福祉文化」
- ・コーディネーター 愛知みずほ大学 教授 河畠 修 氏
 - ・事例提供者
 - ① 「不況期の企業ボランティアの検証」
しずぎん「ユーフォニア」事務局長 木村幸男 氏
 - ② 「企業市民としての社会参加とボランティア活動」
メンズボランティア共生会 水沼 孝 氏
- *第三分科会 「環境と福祉文化」
- ・コーディネーター 一橋大学 講 師 安藤 聡彦 氏
 - ・事例提供者
 - ① 「地球を救う小さな一歩」
高校生ボランティアグループ「ワーキングフォージアース」
 - ② 「トンボ一匹から何を学ぶか」
桶ヶ谷沼を考える会 岡本 康哉 氏
- *第四分科会 「高齢者・障害者と余暇文化」
- ・コーディネーター ジャーナリスト 来栖 琴子 氏
 - ・事例提供者
 - ① 「ニュースポーツの発案と高齢者の余暇活動支援」
ハートフルレクリエーションスクール代表 和久田一夫 氏
 - ② 「障害者の余暇生活を拓きつづけて20年」
(財) 浜松こども園 園長 荒岡 憲正 氏
- 15:30 全体会
- 16:30 閉 会

□会場内ロビー「福祉文化関連パネル展示」「福祉文化関連図書紹介」各コーナー開設

「第11回学会現場セミナー」実現から、その後の本会の活動に、多大なご支援をいただいた、ジャーナリスト 来栖琴子氏から「折角、こうした尊い活動でつながった方々を、決して使い捨てにしてはいけない。いかにして、日常的な地域活動につなげていくかです。そして、人生は、自分主役のドラマですよ。」

浜松こども園 園長 荒岡憲正氏からは、「与えられる福祉というものに、決して満足することなく、常に、実践的体験的な活動に取り組みながら、それぞれの立場で、お互いにアイデアを出しながら“創る福祉”に努めることこそ大切です。」と、いただいた尊い言葉は、その後の「福祉文化活動の礎」とも読み取れた。



●3月30日（第1日目）「浜松子ども園における現場セミナー」当日の運営関係者による打ち合わせ



●浜松子ども園における現場セミナーに130名参加

●3月31日（第2日目）「プレスタワーにおけるセミナー」
学会会長 一番ヶ瀬康子先生による「基調講演」



●「第11回日本福祉文化学会現場セミナー I N静岡」を総括した全体会は、大いに盛り上がった

「第11回日本福祉文化学会現場セミナー I N静岡」参加者からのアンケート抜粋

参加者のうち、230名（65.7%）からアンケートをいただいた。参加者の「福祉文化」のイメージの回答内容は次の通りであった。

◇プラスイメージ（抽象的）：明るい（8） 明るく楽しい（4） 希望 豊かさの尺度 ごくごく最近のもの 余暇 ノーマライゼーション 生活の豊かさ 柔らかいイメージで広い位置づけを感じる 創造と未来 みんなが必要とするもの レクリエーション 本当の豊かさ 耳新しい 優しさ 希望 理想とする姿で明るい将来が展望される

◇マイナスイメージ：一般的には硬さを感じる 重苦しい 文字から最初は硬い感じがした 少し固い 果たして定着するか 貧乏・底辺・左翼

『障害者を主人公に』

浜松こども園で 取り組み紹介



障害を持つ者が主人公となる企画を——と話した荒岡憲正園長—浜松市米津町の浜松こども園で

これからの福祉文化を考
える福祉文化学会(会長・
一ツ橋大学東洋大教授)の
静岡現場セミナーが二十
日、浜松市米津町の浜松こ
ども園で開かれた。荒岡憲
正園長と指導員が、障害者
が主人公になる企画の取り
組み例を発表、県内外から
の参加者約百人に紹介し
た。三十一日には了了R浜松
駅前ビルで公開セミ
ナーが開かれる。

福祉文化学会は、真の福
祉を考えようとして八年前に発
足。福祉関係者、学者を中
心として現在四百二十人の会員

がいて、現場セミナーは、
施設と地域が一体となつて
取り組んでいる事例を検証
し、これからの地域づくり
を考える場。荒岡園長が
「国際音楽都市におけるも
う一つの文化運動—自立と
共生の二十一世紀へ—」と
題して講演、「イベント文
化は暮らしの文化と距離が
ありすぎる。障害のある者
には、暮らしていく力をど
うつけるかが必要。彼らが

「自立と共生」など学ぶ

浜松 福祉文化セミナー始まる

「福祉文化」を研究するこども園で始まった。初日は、「福祉文化学会」(事務局は、市内外の約百人が、同・東京)の「福祉文化セミナー」(静岡新聞社・SBS静岡放送など後援)に参加した。三十一日は、小児療育センター「浜松こども園」が開かれ、また文化を福祉に反

「福祉文化」とは、福祉の向上のための「福祉の文化化」を意味し、福祉をより身近なものとしてとらえるのが狙い。同学会は、

主人公になる文化活動をし
ていかなうといけない」と
述べた。

これに続いて指導員四人
が事例を発表。県内第一号
の「おもちゃ図書館」、義
務教育を修了した人たちの
交流の場「わいわい青年学
校」、手織りを続けて十年
の「ひくまの工房」、一昨
年、浜松市の百貨店にオー
プンした「自立の店あし
た」の取り組みを紹介し
た。三十一日は午前十時か
ら一ツ橋大校舎長の講演や分
科会が行われる。

平成8年(1996年)3月31日 (日曜日)



福祉における文化活動が報告された「現場セミナー」—浜松市米津町の「浜松こども園」

力自身に費やすのに必要」
などと文化活動の狙いなど
を話した。

事例報告では、同園の職
員が、おもちゃの貸し出し
を行っている「おもちゃ図
書館」や、障害児が健常者
と集団活動する「浜松わい
わい青年学校」などの活動
を紹介した。

浜松こども園での「現場
セミナー」では、荒岡憲正
園長が「国際音楽都市にお
けるもう一つの文化活動—
自立と共生の21世紀活動
へ—」と題して講演した。能
楽舞会会長の障害児を対象
とした文化活動を展開させ
ている荒岡園長は、「子供
たちが暮らしていくための

福祉文化、広い視点で

「4分科会」で詰め閉幕

浜松セミナー

三十日に開幕した「福祉文化セミナー」(福祉文化学会主催、県、県教委、浜松市、静岡新聞社・SBS静岡放送が後援)は三十一日、浜松市旭町のプレスタワーなどで、同学会長の一番ヶ瀬康子東洋大教授の基調講演と、「災害と福祉文化」など四つの分科会を行い、同日閉会した。県内外から福祉関係者ら約二百五十人が参加し、さまざまな切り口から「福祉文化」

「その社会福祉の充実をその真の防災につながる」などと訴えた。

引き続き、「災害と福祉文化」「働く人たちと福祉文化」「環境と福祉文化」「高齢者・障害者と福祉文化」の四分科会が開かれた。県ボランティア協会の清水恵子さん、高校生理環境グループ「ワーキング・フォー・シ・アース」の畑田善君ら八人が事例発表した。



さまざまな切り口から考えた「福祉文化セミナー」＝浜松市旭町のプレスタワー

福 祉 新 聞

高校生 40人が運営に参加

福祉文化・静岡公開セミナーに450人

【早田厚道通信】静岡発、みんなで築こう福祉文化を21世紀の時代に生かすテーマ。第10回福祉文化・静岡公開セミナーが、三月三十・三十一両日、浜松市のプレスタワーなどを会場に延べ四百五十人が参加して開かれた。福祉文化学会の主催。

一日目は、障害者施設「浜松」(とち)を会場に高校生から社会人まで約百三十人が参加した。現場セミナーが、二日目は、「21世紀に向けて福祉文化を聞く」(阪神大震災の体験をおしえて)と題し

た一番ヶ瀬康子、同学会会長との講演と、(1)民間(2)働く人(3)企業(4)福祉文化・静岡公開セミナーが、三月三十・三十一両日、浜松市のプレスタワーなどを会場に延べ四百五十人が参加して開かれた。

今回のセミナーは、高校生や社会人など約四百人が運営に参加するなど、住民参加による手作りで行われたが、現在と違ったメンバーなどが中心となって、静岡福祉文化を「考える会」を結成させ、さまざまな活動などを学びながら、「福祉文化」を築こうとする動きが始まっている。

1996年(平成8年)4月22日



福祉文化・静岡公開セミナーで講演する一番ヶ瀬会長(壇上)

福祉文化通信

1996年7月1日 No.18

福祉文化学会の活動の記録

静岡発

みんなで語ろう福祉文化を 二十一世紀の礎にテーマに

福祉文化・静岡セミナーで地域を掘り起こし
地域の組織化、実践活動化へのアプローチ

平成七年度の福祉文化学会活動事業として、予て関係者から大きな期待が寄せられていた、「現場セミナー（春のセミナー）」が、去る三月三十・三十一日の両日にわたって、静岡県浜松市を会場に開催された。当日までの取り組みとともに、静岡県の地域性をもとに、身近な地域で語る「福祉文化」の試みの第一歩を紹介。
（静岡県社会福祉協議会・福祉人材センター
平田厚 当会地区評議員）

●取り組みの経緯

人的ネットワークで立ち上げ
平成七年度前期評議委員会において、静岡県内での現場セミナー計画は打ち出されていた。果たして伝統ある学会の事業を、静岡の特性を生かして取り組むことが出来るのか、一抹の不安があった。
「福祉文化」いま真剣に語るには、関係者だけの研修に終わらせたくない思いとともに、静岡発の福祉文化とは何かを呼びかけながら5月日は過ぎ、いよいよ開催時期までにあと三ヶ月となった。
高校生、企業市民、先輩市民、

●協力者のパワー全開 関わりを学習化していく

週末になると、主には高校生の労作があり、関係方面への文書の発送や、当日にむけた資料作成は、大いに成果をあげた。
地域学習とは、世代を越えて、共通の課題を学びあうことから、地域のさまざまな課題解決に相互理解が生まれる。

出会いもあり、将来への希望とともに、共感・信頼関係が深まる。講師と事例提供者との電話及びファックスでの連絡調整をはじめ、関係機関・団体からの側面的な援助により、関係者の意気込みも強く感じられた。高校生からは、企画、準備そして運営のありかたなど、これからの地域参加活動への大きな自信につながったという意見が出た。

企業市民の立場で参画されている方々は、企業感覚で、効率よく運営の甘さを軌道修正していただくことしばしばだった。

●「静岡発」のこだわり
セミナープログラムの視点は「現場セミナー」の参加者は延べ百三十名の参加。そして「公開セミナー」には延べ三百三十名。

当初計画をした段階では、学会事務局と百名の参加を目標とした。しかし、こうしていまセミナーを振り返ってみると、参加する福祉としての、一人一人の身近な「福祉」を学びあうことを期待されていたようにも思う。

さて、会合では当日のプログラム企画について、いろいろと論議された。静岡県ならではの研修テーマはなにか。それぞれの関わりの中から、「福祉文化」を語り合うための、テーマ探しが続いた。このことは、今後の「福祉文化」を幅広い視点から、研究していく出発点でもあると考える。

「環境教育」「福祉教育」「余暇文化」「社会貢献」「まったりと



公開セミナーは子どもたちの太鼓で始まった。

福祉文化学会の活動の記録



公開セミナーの全大会

「コミュニティ」「観光都市」「高校生」「青少年」「ボランティア教育」など、数々のキーワードが示された。

結局、会場、運営上の制約などにより、前述の4つのテーマをもとに、阪神大震災からの教訓をいままあらためて考えていき、日頃の生活の豊かさをどう創りあげていくかを当日の研修の柱とした。

「現場セミナー」では、福祉施設の20年の歩みとともに、さまざまな障害者の余暇文化活動に取り組み、地域と共生の社会づくり成果をあげられている「浜松こども園」の実践活動事例に学ぶプログラムにより、大きな感銘を与えていただいた。

●「福祉文化」とは、県内外から延べ四百数十名が参加協力者の連携により順調に進行

「現場セミナー」は台風を思わせるような悪天候。案内係りにあたる高校生は、約2キロほどの道程を参加者一人一人を会場に案内し、会場となった「浜松こども園」では、施設見学等の一部変更をせざるをえない日程の変更調整をし、高校生や企業人など協力者30名は、メイン会場の設置や表示などに集中し、開会に間に合わせた。

「国楽音楽都市におけるもうひとつの文化運動」と題した基調報告は、この20年間常に身近な地域社会とともに障害者の社会参加に取り組んでこられたあゆみをビデオなどの視聴覚教材を併用されて報告。そのあと「療育施設におけるおもちゃ図書館（静岡県内ではじめて開設されたおもちゃ図書館）」「わいわい青年学級（地域の青少年とともに共育する学習の場）」「心を織り縫ぐ人達」「大手百貨店内に自立の店。あした松葉店」の実践活動事例を職員が報告され、参加者に大きな感動を与えた。

さて、「二日目の「公開セミナー」は心配した天候も晴天下、

早朝から県内各地から協力者50名が会場となったプレスタワーホールに集まり開会までに会場までの案内（地元専門高校生、高校生、愛知みずほ大学生や分科会の打ち合わせなどあわただしくも制約された時間の中で手際よく進化した。基調講演は、「二十一世紀にむけて福祉文化を拓く―阪神大震災の体験をとおして―」をテーマに福祉文化学会会長・一番ヶ瀬康子先生が話された。その後前述の4つの分科会でそれぞれ静岡県内からの事例を中心に参加者が意見を出しあった。

そして、全体会は、多田千尋福祉文化学会事務局長がコーディネーターとなり、一番ヶ瀬会長、来栖琴子氏、河島修氏、安藤聡彦氏、小林博氏（学会員）の各分科会コーディネーターが「人間らしい豊かさを目指して、文化としての福祉を語るをまとめとして閉会した。

協力者からも、今後にむけた課題をふくめた意見提出をお願いし、参加者からのアンケートとともに、4月29日に総括の会合をもった。

●「静岡福祉文化を考える会」へのつなぎとして

参加者からのアンケートを分析すると、参加動機は、「講演」30%、「分科会」15%、「福祉文化

を勉強したい」42%。今回の企画について「とてもよい」71%、「まあまあよい」25%。今回の出来具合を点数評価していただいたところ、なんと87.95点と高い点数に関係者は驚く。参加者のうち男性30%、女性70%と意外と男性の参加が目立った。年代層では、「40代」の26%であった。「10代」から「60代」まで平均して17%前後と平均化していた。

今後「静岡福祉文化を考える会」への賛同者が50名程の方々がセミナー当日に申し出ている。

年代を越えた実践活動や事例研究をしていく場として、決して縦割りのな運営にしない

- ・福祉文化をさまざまな切り口で学びあっていく
- ・福祉文化をできる限りわかりやすい内容としてとらえたい
- ・専門家集団ではなく、だれもが積極的に意見をのべあう場としていく。そして、堅いイメージをなくしていく
- ・会員相互の事例提供により学習していく
- ・積極的な参画を心掛けていく

などをもとに、地域での活動としての「福祉文化」を切り開く第一歩が「静岡セミナー」によって始動した。

「第11回学会現場セミナー」の開催実現後、実行委員として関わった方々に、今後に向けた課題を含め「意見」の提出を求めた。そして、70名の実行委員のうち20名が出席して、総括実行委員会を開催し、セミナー参加者のアンケートの集計結果報告とともに、「福祉文化」をどう学び合ったかそれぞれの立場で意見を述べ合った。会の終了直前に、高校生から「学び合った“福祉文化”を更に、静岡県の地域性をもとに、継続的に意見を交わす活動の場」の立ち上げが提案された。

出席した委員は全く異論はなく、とりあえず「検討していこう」をもとに「静岡福祉文化を考える会」（仮称）を結成する方向で、さらに、具体的な協議の場を早々にもつことを確認して閉会した。

その後の動きは、

- *平成8年5月1日 第11回学会現場セミナーの事後処理作業終了
- *平成8年5月6日 学会事務局に、第11回学会現場セミナーの報告と、静岡県内の動きを報告
- *平成8年5月14日 関係者による意見交換を始める（その後随時実施）
関係者の正式同意を確認し、会員名簿の作成作業開始
- *平成8年6月1日 賛同者50名から、11名が結成世話人代表者となり、今後の打ち合わせの日程調整実施
- *平成8年8月1日 第1回世話人代表者打ち合わせ会開催
- *平成8年8月6日 静岡県内の動きを学会事務局に経過報告
- *平成8年8月17日 第2回世話人代表者打ち合わせ会開催（9月1日設立総会開催決定）
- *平成8年8月24日 会員名簿の整理と設立総会の案内及び出席者のとりまとめ
- *平成8年8月25日～30日 設立総会の関係資料作成作業
- *平成8年9月1日 設立総会及び第1回公開型研修会開催

ここに、「静岡福祉文化を考える会」が誕生した。改めて、世代や領域を超えて福祉・ボランティア活動を学び合い、改めて、一人一人が災害に対する意識を高め、安心して暮らし合う地域社会を創ることに関心を持ち実践をしていくことや領域を確認し合った。今後、「静岡福祉文化を考える会」の「考える」から、いかに発展する「名称」に変えることが出来るか、将来的な大きな課題も確認しあった。

> 静岡福祉文化を考える会の目的

さまざまな福祉・ボランティア活動に携わる人と市民がいっしょに、地域が抱える生活全般のさまざまな問題を考えその改善のために努力していくことを目的とします。

> 活動基調 その2

会員だけが求心的・閉鎖的に集うのではなく、広く市民に拓かれた活動をめざします。



> 活動基調 その1

さまざまな分野で活動する人たちが、専門分野と世代を超えて交流を図ります。



> 活動基調 その3

既存の福祉組織の活動から取り残された問題や新しく発生してきた問題を大切に、つねに市民生活に密着した活動をめざします。



第2章 目的・事業・活動基調

第3条（目的）この会は、さまざまな福祉・ボランティア活動に携わる人と市民がいっしょに、地域が抱える生活全般のさまざまな問題を考えその改善のために努力していくことを目的とします。

第4条（事業）この会は、前条の目的を達成するため、つぎの事業をおこないます。

- ① 情報交換活動
- ② 啓発・広報活動
- ③ 人的交流
- ④ 研究会・講演会・セミナーなどの開催
- ⑤ その他、この会の目的を達成するために必要な事業

第5条（活動基調）この会の活動は、つぎのような基調を守っていくこととします。

- ① さまざまな分野で活動する人たちが、専門分野と世代を超えて交流を図ります。
- ② 会員だけが求心的・閉鎖的に集うのではなく、広く市民に開かれた活動をめざします。
- ③ 既存の福祉組織の活動から取り残された問題や新しく発生してきた問題を大切にし、つねに市民生活に密着した活動をめざします。

第3章 会 員

第6条（会員の資格）この会の目的に賛同し協力をする個人。

原則として国籍・年齢・職業等を問いません。

第7条（入会）会員になろうとする人は、所定の申し込み用紙によって手続きをすることとします。

第8条（会費）会員は、規約により会費を納入しなければなりません。

2. 既納の会費は返済しません。

第9条（退会）会員は、いつでも役員会に通告し、退会することができます。

2. 会費を1年以上滞納した人は、委員会において退会したものとして、みなすことができます。

第4章 機 関

第10条（役員）この会の役員は、代表1名、副代表3名以内、事務局長1名、事務局次長1名、委員、監事とします。

第 11 条（役員を選任）代表、副代表、事務局長、事務局次長、委員、監事は、会員の中から互選し、会員全体会の承認を受けます。

第 12 条（役員の仕事）代表は、この会を代表して会務を総括します。

2. 副代表は代表を補佐し、代表に支障が生じた場合には、その職務を代行します。

3. 委員は、事業・研究・広報・会計・事務局事務などの会務を執行します。

第 13 条（役員を補充）役員が任期の途中で退任した場合には、委員会で補欠を選任することができます。

第 14 条（会員全体会）代表は、年 1 回は会員の全体会を招集しなければなりません。

2. 代表は、委員会が必要と認めたとき、または、会員の 3 分の 1 以上の請求があったときは、会員全体会を招集しなければなりません。

第 15 条（委員会）代表は、年 4 回程度、委員会を招集しなければなりません。

第 16 条（議決）会員全体会の議事は、出席会員の過半数をもって決することとします。

第 5 章 会 計

第 17 条（経費）この会の経費は、会費・寄付金・その他の収入をもってあてます。

第 18 条（会費）この会の会費は、「社会人 年間 3000 円」、「大学生以下年間 1000 円」とし、原則として 1 回払いとします。

第 19 条（決算）この会の決算は、委員会の議決を経たあと、会員全体会の承認を得てこれを決定します。

第 20 条（会計年度）この会の会計年度は毎年 4 月 1 日に始まり 3 月 31 日をもって終わるものとします。

第 6 章 規約の改正

第 21 条（規約改正）この規約の改正は、会員全体会において出席会員の 3 分の 2 以上の賛成をえなければなりません。

附 則 1996 年（平成 8 年）9 月 1 日施行

2 結成当時の「会員対象アンケート」を繙く

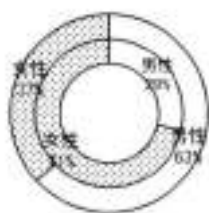
本会の結成当時を、日本福祉文化学会の1999年（平成11年）4月20日発行の「福祉文化研究Vol.18」（学術刊行物）の「特集 福祉文化と地域」で、「静岡福祉文化を考える会の実践からの一考察」を取り上げていただいた。

「福祉文化活動と地域組織化の取り組み」の寄稿内容の部分ここに掲載する。

地域コミュニティ活動などを推進していく上で、一番課題になるのが、いかに会員一人ひとりが会の運営や活動に参画していくかである。私たちの活動目的は、単に個人レベルの資質向上ではなく、地域性を世代や領域を乗り越えて相互理解していくことにより、自ら実践の場で実証していくことにある。ここで、会発足直後当時の会員対象（発足時、男性49名、女性29名 計78名）に実施した「アンケート」結果を「静岡県におけるボランティア活動実態調査」結果（1994年実施）と比較して紹介する。

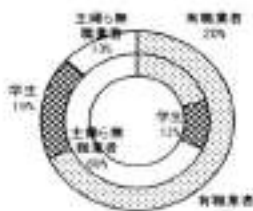
*図表の外側は本会データ、内側は静岡県ボランティア実態調査データ

(1) 男女別



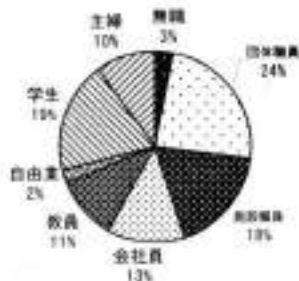
- ・本会の男性が占める割合は63%、女性は37%である。
静岡県のボランティア実態調査では、男性29%。女性71%で全体的に、女性7割、男性3割の状態であるが、本会においては、男性6割、女性4割と福祉文化活動への関心は、意外と男性の関心が高い状況にある。

(2) 職業別



- ・本会の会員は、有職者68%と全体の2/3以上を占めている。
静岡県のボランティア実態調査では、主婦・無職者が全体の68%と大きな開きがある。本会の学生層は19%で、県の12%より多い状況である。

(3) 職業内訳（本会会員のみ）



- ・本会会員の職業別内訳を詳しく見ると、社会福祉協議会等団体職員24%、学生19%、福祉施設職員18%、会社員13%、教員11%、主婦10%、無職3%、自由業2%と福祉分野以外の会員が6割と多彩な、幅広い世代・領域から構成している。

以上のように、結成当初における会員（発足時、男性49名、女性29名 計78名）は、2/3は男性で有職者が多く、地域社会を凝縮した領域構成であった。

(4) 「自由な意見 一本会に期待すること」

- *幅広い分野の様々な年代の人が、積極的に参加できるような会の運営を望む。
- *まったく、福祉について、実務的な経験のない素人が、自由に意見交換できるように願う。

- *決まった内容を話し合うことなく、なんでも自由に語り合える仲間の集まりを期待したい。
- *対等に、若い人と活発に本音で語り合えるような会の運営を望む。
- *小さなことでも、多角的な話題を積極的に語れるようにしてほしい。
- *一方向からだけでなく、さまざまな分野から語り合いたい。
- *県内各地で実践活動を学べるフィールドを開拓していきたい。
- *一人一人が、主体的に参加できるようにしたい。
- *小グループの話し合いの場を持っていただくと話しやすい。
- *他団体といい関係で運営をしていくことを望む。
- *肩の凝らない地域実践活動をしていきたい。

1998年(平成10年)3月6日 金曜日

家月 日 曜日

むすびあう

静岡の草の根ネットワーク

福祉やボランティア活動に携わる人々、活動に熱心を持つ人たちが集まって、一九九六年九月に発足した。一カ月ごとに特別講演を企画し、身体障害者施設を訪問したり、討論会を開いたりして、福祉のあり方や主婦が共働きできる社会づくりについて考える活動が続けられている。

九六年三月に静岡市で開かれた日本福祉文化学会主催の「福祉文化セミナー」が、きっかけだった。

「一番アキラ・岡本委員の話を聞いた福祉文化学会主催の会の平田厚さん(以下略)が、「豊かな暮らしについて考える会をやるか」とを議題で呼びかけたところ、多くの人が賛同。設立趣意は、県内各地から会社員や公務員、主婦、高校生などが参加した。

最初の夏の合宿では、体験型を主として、福祉のあり方や福利について語り合った。清水市の施設で、学生男子

静岡福祉文化を考える会 願い実現できる社会へ

「学生は、自分が身体障害者だとなら福祉に関心を持ちたい」と、文化担当「アキラ」の企画した研修会に、二十名ほど参加した。

男子高生は、「福祉とは何か」と語り、福祉のあり方について語り合った。いじめや虐待、障害者差別などについて語り合った。いじめや虐待、障害者差別などについて語り合った。

「福祉とは何か」と語り、福祉のあり方について語り合った。いじめや虐待、障害者差別などについて語り合った。



公開セミナーの打ち合わせをするメンバーたち＝静岡市内で

1998年8月、県内の福祉施設職員などを中心に54人で発足した。現在の会員は18歳から定年までで、78人。1年1回の総会と、月1回の増任委員会。2カ月に1回の研修やセミナーなどが主な活動。2カ月ごとに機関誌「OUR LIFE」を発行し、活動報告をしている。年会費は3000円、高校生以下は1000円。問い合わせは家光さん(054・248・1488)へ。

3 本会結成時のネットワークを活かし「第18回学会現場セミナー」開催実現

振り返ると、平成8年9月本会発足以降3年間、年間活動計画に基づき、県内各地で、関係団体・福祉施設の全面的な協力により、精力的に、小さな試みとして「公開型研修会」を開催してきた。

そのたびに、本会会員加入申し込みがあり、平成11年度には、県内外から90名の会員に達した経緯がある。もちろん、学生の変動や異動による退会届も多くあった。

こうした本会の動きの中で、平成11年7月の日本福祉文化学会役員会において、1981年代「福祉

は文化なり」を発現された、ねむの木学園の宮城まり子園長先生に学ぶ「第18回静岡現場セミナー」を学会と共催で開催してほしい旨の要請があった。

本会の結成につながった「第11回学会現場セミナー」開催実現の時とは、根本的に異なる取り組みをしていかなければならない。つまり、「静岡福祉文化を考える会」組織自体をもって、県内関係機関・団体に協力を呼び掛け「協働」による「静岡発（地域発）福祉文化の創造」による開催を実現しなければならぬ大きな課題があった。本会定例委員会で、本会自体のもつ能力で、果たして「第18回現場セミナー」に取り組むことが出来るか協議を重ねた。

本会結成4年の実績をもとに、更に、この機会を大いに活かして、「静岡発（地域発）福祉文化の創造」に全力投球していこうと、要請を受け入れる回答を学会事務局にし、5カ月後のセミナー開催に向けて、本格的な準備に取り掛かった。

まず、本会自身が、ねむの木学園 園長 宮城まり子先生のこれまでの尊い福祉活動の取り組みの理解に努めることが求められ、いろいろな文献をもとに、事前に定例委員会で研修の機会をもった。

1958年（昭和33年）に、「婦人公論」の「まり子の社会見学」の取材で知的障害の子を知り、その後、宝塚劇場で脳性麻痺の子ども役を演じ、どのような子どもも学ぶ権利があり、義務があることを痛切に感じ、こうした子どもたちの教育と生活の場づくりに全力投球され、1965年（昭和40年）当時の静岡県浜岡町に土地を求め、1968年（昭和43年）「ねむの木学園」が誕生、その後、数々の福祉活動に取り組み、1999年（平成11年）「ねむの木村」（掛川市）が開村されたことなどを資料から学ぶことが出来た。

「第18回学会現場セミナー」開催実現に向けて、主に、下記の各協議を具体化した。

- (1) ねむの木学園 園長 宮城まり子先生 ➡ 開催内容のご理解と協議、会場提供の有無等
- (2) 開催地元掛川市社会福祉協議会 ➡ 開催内容の協議、参加者の送迎方法の協議
広報啓発宿泊手続きに関する協議依頼
- (3) 東海福祉専門学校 ➡ 当日の案内誘導等学生の協力協議
- (4) 掛川グランドホテル ➡ 県外参加者の宿泊受け入れ協議（割引交渉）
- (5) 日本福祉文化学会 ➡ 全般連絡調整

そして、学会事務局との最終協議により、下記の「開催要項」が出来上がった。

第18回（平成11年度）日本福祉文化学会 現場セミナー開催要項 ねむの木学園/宮城まり子さんと福祉文化を学ぶ

1. 開催趣旨

1958年（昭和33年）に、「婦人公論」の「まり子の社会見学」の取材で知的障害の子を知り、その後、宝塚劇場で脳性麻痺の子ども役を演じ、どのような子どもも学ぶ権利があり、義務があることを痛切に感じられ、こうした子どもたちの教育と生活の場づくりに全力投球され、1965年（昭和40年）当時の静岡県浜岡町に土地を求め、1968年（昭和43年）「ねむの木学園」が誕生、その後、数々の福祉活動に取り組み、1999年（平成11年）「ねむの木村」が開村されました。今回の「現場セミナー」は、長年にわたり取り組んでこられた宮城まり子さんの福祉文化活動に学ぶ一日とします。

「本当は、村じゃなくて、街づくりをめざしたい」と、そんな宮城まり子さんの福祉文化のまちづくりへの思いをお聞きできる研修会です。

2. 主 催 日本福祉文化学会
3. 共 催 静岡福祉文化を考える会
4. 後 援 掛川市社会福祉協議会

5. 協力 社会福祉法人 ねむの木福祉会 東海福祉専門学校
6. 開催日時 平成12年 1月16日(日) 10:00 ~ 16:00
7. 開催会場 〒436-0221 静岡県掛川市上垂木3011 「ねむの木学園」 tel 0537-26-3905
8. 交通機関 JR東海 掛川駅下車(北口) 東海道新幹線 新掛川駅下車(北口)
*会場までは、マイクロバス運行予定 細部は、「参加票」とともに、会場までの案内図を同封します。
9. 参加費 一般3,000円(会員、非会員とも同額) 学生1,500円 *昼食代含む
10. 参加定員 80名
11. 参加申し込み 平成12年1月10日(月)までに別紙参加申込書に必要事項を記入の上、下記各事務局までFAXまたは郵送で申し込みをして下さい。
定員になり次第締め切ります。
- *日本福祉文化学会事務局 〒171-0014 東京都豊島区池袋3-26-13 tel&fax03-5950-3308
*静岡福祉文化を考える会事務局 〒420-0841 静岡市上足洗3-7-15-5 tel&fax054-246-1486
12. プログラム
- 09:30 受付
10:00 開会
*セミナー開会にあたり 静岡福祉文化を考える会 代表 平田 厚
*はじめに 日本福祉文化学会 会長 一番ヶ瀬康子先生
*歓迎の挨拶 ねむの木学園 園長 宮城まり子先生
*オリエンテーション
- 10:30 第1部「ねむの木村」見学
12:00 昼食・休憩
13:00 第2部 公開対談「宮城まり子さんと福祉文化を学ぶ」
ねむの木学園 園長 宮城まり子先生
日本福祉文化学会 会長 一番ヶ瀬康子先生
- 15:00 第3部 ねむの木学園の皆さんとともに
16:00 閉会
13. その他
*宿泊希望者は、下記に直接申し込みをして下さい。
今回の趣旨に賛同していただき、格安の料金となっています。
申し込みの際に「日本福祉文化学会/現場セミナー参加者」と申し出てください。
◇「掛川グランドホテル」〒436-0028 掛川市亀の甲 1-3-1 Tel 0537-23-3333 fax 0537-23-2290

宮城まり子先生とは、開催に向けて、その都度協議に出向き、当日に向けた経過報告をする中で大きな課題が生じた。当時の研修内容を、大きくマスコミが全国的に情報提供されたこともあって、定員80名としたところ、予想をはるかに上回る350名の参加申し込みになったことであった。

静岡県内はもちろん、東京都、千葉県、神奈川県、愛媛県、滋賀県等、県外から大きな関心が寄せられ、問い合わせと共に多数の参加申し込みとなった。

宮城まり子先生は、関心を持たれ福祉文化を学ぼうと参加を申し込まれた方々を断る必要はない、当日の運営に知恵を出し、広く福祉文化を学び合う環境を提供していくべきと厳しくもありがたい励ましをいただき、開催実現に向けて、宮城まり子先生の適格な助言をいただき、総力あげて取り組んだことは、本会のその後の活動に大きな指針をいただいた。

当時、会員90名のうち、当日は30名がひたすら汗と知恵をフルに出し合い運営にあたりとともに、地元掛川市社会福祉協議会の全面的な支援により、宿泊先の特別な交渉をはじめ、掛川駅と会場までの送迎用車両の手配をしていただくことが出来た。また、東海福祉専門学校のご理解のもと、多くの学生がボランティア活動の一環として、掛川駅周辺の案内をはじめ、ねむの木学園会場内の案内役を

一手に引き受けていただき、会場内の混乱も生じることなく、参加者からは好感が持てる声が数多く寄せられスムーズな進行が出来た。ねむの木学園関係者には、終始運営全般にわたり、最大限に会場雰囲気を盛り上げていただき、参加者全員が和やかに交代で昼食が取れるように調理献立の工夫など、多大なるご支援をいただき、予想以上の成果を上げることが出来た。

セミナー終了後、参加者からいただいたアンケート（意見）には、「フットワークの良さ」「機転のきいた運営手腕」「多彩なアイデアの創出」「異業種交流集団の連携の良さ」「世代を超えた運営参加こそ福祉文化」等プラスの評価をいただいた。本会結成以来4年間、常に、「福祉文化とは何か」を問い質してきたが、こうして、真の福祉文化実践を発揮していくプロセスこそが、本会が究極的に求めていく『静岡発（地域発）福祉文化の創造』ではないかを実感した一日であった。

ここで、当日のプログラムから、主な内容を、当時の記録をもとに紹介する。

● 宮城まり子先生自ら、「ねむの木村」を案内

プログラム「第1部 “ねむの木村” 見学」では、宮城まり子先生自ら参加者がバスで到着するたびに、学園の正面玄関前で歓迎の挨拶をされ、学園内のセミナー全体会場へと案内された。参加者が全員そろったところで、「ねむの木村」の隅々まで、そして園生の生活エリアでは、ご自身の思いをもとに、約2時間丁寧に案内し、参加者からの質問にも、わかりやすく応じていただいた。



● 公開型対談 「宮城まり子さんと福祉文化を学ぶ」

第2部のメインプログラム「一番ヶ瀬康子学会会長と宮城まり子さんとの対談」で、福祉の現状と福祉文化のこれからを語っていただいた。当時の「OUR LIFE 第22号 2000年3月30日発行」から抜粋して一部を紹介する。

□ 一番ヶ瀬会長

宮城まり子さんとの出会いは、靴磨きの役の時から知っていたが、本当に知ったのは映画「ねむの木」を見て、NHK番組がきっかけだった。

福祉は文化、与えられるものではなく自ら創り上



げ、その中に芸術性を発揮されている。
今や、社会福祉は、国家資格が入り、面白くなくなつた。それがきっかけで「福祉文化学会」を立ち上げた。“福祉文化”…よく使われているが、宮城まり子さんが創られた言葉で、宮城まり子さんが使えば広がる。

□宮城まり子さん

「ガード下の靴磨き」の歌は、日が経つと重い歌のような気がする。あの歌は若い、かわいい頃にももらった歌で、机の上に置いてあつた「捨てられていた歌」だったが、自分で拾い上げた。優しい福祉の心で書かれているのに、あの歌は捨てられていた。

捨ててしまうにはもったいないと思ひ歌わしてもらつた。8月にレコードをだし、その年の紅白に出ちゃつた。自分の感情を爆発させている。

気持ちを出し切っている。

□一番ヶ瀬会長

宮城まり子さんの福祉の原点は？

□宮城まり子さん

色々な役を演じているが、障害をもつた人の役は、今の仕事そのもので、子どもの側にもなれるし、大人の側にもなれるが大人は難しい。

□一番ヶ瀬会長

同じ立場になることは一番大切なこと。まり子さんは、子どもたちの可能性を信じている。福祉に対して偏見がある。福祉とは、幸せになりたいという、ごくごく普通のことだが、哀れみにか感じてもらえない。制度も、養護施設 親が育てない、療護施設 身体にハンディがなければだめ。まり子さんは、この両方を対象とした施設づくりに取り組まれた。社会福祉は、制度としかとらわれやすいが、「誰もが幸せに」が目的。

□宮城まり子さん

現状の制度にはない、現状の障害問題を解決するために、生活と教育を主張して実現した。

第3部「ねむの木学園の皆さんとともに」では、350名の参加者が一体となり、宮城まり子さんの指揮で、滝廉太郎作曲の「花」を大合唱して、楽しいふれあいの現場セミナーの幕を閉じた。

ねむの木学園の現場に学ぶセミナーの実現は、思いを形にし、本音で語れる環境こそ「福祉文化」と、改めて、これからの本会の活動につながつた。



■「第18回学会現場セミナー」参加者アンケート回答とこれからの活動の課題(概要)

- * 今回のセミナー開催を、新聞記事から知った回答 47%と圧倒的に多い。
次に、学会及び本会からの案内(チラシ)15%、知人からの誘い 13%の順。
特に、セミナー開催告知が新聞に掲載後参加申し込みが急増した。今後、より多くの県民に向けた「福祉文化」を発信し、「福祉文化」を広く学び合う場の提供が出来るように、更に努力をしていく課題とともに、日常的に、あらゆる情報提供の方法を心掛けていく努力を継続していきたい。
- * 県内参加者が8割。県外参加者は、学会及び本会からの情報発信で、東京都、千葉県、神奈川県、愛知県、滋賀県等から2割。参加者層から、社会の動きの中で、浮き彫りになっている地域の課題をもとに、「福祉文化」の視点で学び合うことが受け入れられる状況にある。
- * 男女別では、女性が8割と多く、男性は2割であった。
年代別では、50代~60代層の参加48%が中心で、30代~20代26%、10代~20代23%、70代3%であった。「福祉文化」は、世代を超えた学び合いが十分できるテーマである。
- * 職業別では、学校関係者22%、福祉関係者18%、学生14%、企業人13%、公務員10%。
「福祉文化」の学びの場は、異業種交流の環境を創り出す。
- * セミナーの満足度は、「運営全般」「施設見学」「公開型対談」「ねむの木学園の皆さんとの交流」の全て85%を上回った。これまでのプロセスを重視し、積み上げてこそ成果が出る。
- * 運営では、「フットワークが良い」「機転のきいた運営」「プログラムが多彩でアイデアあり」「世代を超え、異業種集団の運営を感じた」等プラス評価をいただいたが、定員を大幅に超えた受け入れに対するマイナス評価もあった。
宮城まり子さんの思いと本会の「福祉文化」を広く発信したいという思いが先行した結果であった。

平成12年(2000年)1月17日 (月曜日)

「福祉は文化です」



「福祉は文化」の視点で持てる「福祉文化」の発信者として、宮城まり子さんとねむの木学園の皆さんが、宮城まり子さんとねむの木学園の皆さんと対談した。

**ねむの木学園
で公開対談**

「芸術村構想」も披露

「福祉文化」の視点で持てる「福祉文化」の発信者として、宮城まり子さんとねむの木学園の皆さんと対談した。

宮城園長と一番ヶ瀬さん「日本介護福祉学会」熱っぽく

掛川市と藤木の牧師不自由児療養院「ねむの木学園」で17日、日本福祉文化学会の一番ヶ瀬さんと、長崎県心天養院、日本介護福祉学会長、同院院長の宮城園長と宮城まり子さんが公開対談した。「福祉文化」との視点で、宮城園長が手掛けている福祉教育と芸術活動への実践活動、宮城まり子さんが手掛けている県内外から三、四百人が集まった。

2000年(平成12年)1月17日(月曜日)

『人間らしい豊かさを』

「ねむの木学園」 県内外350人聴講

「ねむの木学園」の創立者である宮城まり子さんが、1月17日、日本福祉文化学会(以下「日本福祉文化学会」と略す)の会場で、県内外350人の聴衆を集めて講演した。講演の題目は『人間らしい豊かさを』。講演は、宮城さんが自身の経験から、福祉文化の創造の原点を辿るという内容で、聴衆の心を捉えた。

先ほどの講演から約四十分、五十分、二つの講演会が続き、聴衆は、一生懸命に聴き入った。講演中、宮城さんは、福祉文化の創造の原点を辿るという内容で、聴衆の心を捉えた。講演は、宮城さんが自身の経験から、福祉文化の創造の原点を辿るという内容で、聴衆の心を捉えた。



講演者・宮城まり子さん

講演は、宮城さんが自身の経験から、福祉文化の創造の原点を辿るという内容で、聴衆の心を捉えた。講演は、宮城さんが自身の経験から、福祉文化の創造の原点を辿るという内容で、聴衆の心を捉えた。

平成12年(2000年)1月18日(火曜日)

大自在

「ねむの木学園」の創立者である宮城まり子さんが、1月18日、日本福祉文化学会(以下「日本福祉文化学会」と略す)の会場で、県内外350人の聴衆を集めて講演した。講演の題目は『大自在』。講演は、宮城さんが自身の経験から、福祉文化の創造の原点を辿るという内容で、聴衆の心を捉えた。

講演は、宮城さんが自身の経験から、福祉文化の創造の原点を辿るという内容で、聴衆の心を捉えた。講演は、宮城さんが自身の経験から、福祉文化の創造の原点を辿るという内容で、聴衆の心を捉えた。

平成12年(2000年)1月17日(月曜日)

「福祉は文化です」

ねむの木学園で公開対談

宮城園長と一番ヶ瀬さん「日本介護熱っぽく」



講演者・宮城まり子さん

「芸術村構想」も披露

「ねむの木学園」の創立者である宮城まり子さんと、日本福祉文化学会の代表理事である一番ヶ瀬康子さんが、1月17日、日本福祉文化学会(以下「日本福祉文化学会」と略す)の会場で、公開対談を行った。対談の題目は『福祉は文化です』。対談は、宮城さんと一番ヶ瀬さんが自身の経験から、福祉文化の創造の原点を辿るという内容で、聴衆の心を捉えた。

「福祉」という言葉 嫌いです

宮城まり子さんと一番ヶ瀬康子さん

「福祉」という言葉 嫌いです…

宮城まり子さんと一番ヶ瀬康子さん

掛川市上垂木のねむの木学園 対談の場で一番ヶ瀬さんは、
で十六日、静岡福祉文化を考へ 宮城さんの「福祉」という言葉が
る会と日本福祉文化学会の共催 嫌い」という気持ちを分析「社
による、同学園長宮城まり子さ 会福祉は本来、互いに幸せであ
んと同学会長一番ヶ瀬康子・長 るために一緒に努力しようとい
崎純心大学教授の公開対談「福 うことなのに、法律の制度だと

ねむの木学園で公開対談 掛川

祉を語る」があった。
宮城さんは昨年十一月から、 錯覚している人が多い」と指
学園で市民講座の「ねむの木大 摘。制度などにとらわれず、国
学」を開いている。講師に一番 には福祉のあり方を働きかけてき
ヶ瀬さんと呼ぶ計画があり、講 た学園の活動をたたえた。宮城
座と連携し、約三百五十人が公 さんはとっついてもうれい」と答
開対談を聴いた。 え、「ねむの木村」にベンション
を建設する夢などを語った。



公開で対談する宮城まり子さん（左）と一番ヶ瀬康子さん＝掛川市上垂木のねむの木学園で

【第2章】 県内各地で学んだ「現場セミナー」から福祉文化を発信

本会は、「さまざまな福祉・ボランティア活動に携わる人と市民がいっしょに、地域が抱える生活全般のさまざまな問題を考え、その改善のために努力する。」を活動目標に平成8年9月スタートした。

そして、[3つの活動基調]

- (1) さまざまな分野で活動する人が、専門分野と世代を超えて交流を図る。
 - * 「市民性と専門性」「理論と実践」を『融合』する努力
- (2) 会員だけが求心的・閉鎖的に集うのではなく、広く市民に拓かれた活動をする。
 - * 「公開型研修会」で市民性を高める努力
- (3) 既存の福祉組織活動から取り残された問題や新しく発生した問題を大切に、常に市民生活に密着した活動をする。

具体的な活動「3つの柱立て」

- (1) 調査研究活動
県民の協力により、一貫して、その時代の地域社会の問題をテーマに、調査活動に取り組み、その結果を県民とともに地域総合型学習において、課題解決の議論を深める。
- (2) 啓発学習活動
県内各地のさまざまな実践活動を「静岡発 福祉文化の創造」の視点で学び合う。
- (3) 実践地区活動
県内各地の実践活動事例を共有し合い、それぞれの地域性を「地域診断」し合う。

この30年間、大きな福祉文化の流れの中で活動を振り返り、次の5期にまとめた。

◇「第1期 草創期」 本会結成から実践活動6年間

この期間は、精力的に無我夢中で活動を展開した。平成8年度結成当時、若い世代層が多い会員であったため、出来るだけ身近な活動テーマに取り組んだ。具体的には、「結婚」をもとに「おいしい結婚、まずい結婚」論議を展開。その後、家庭を持った生活環境下で「共働き」を検証。「地域にどう溶け込めるか」「私たちにとって、地域とは何か」と活動をつなげた。

「家族・家庭の機能」の希薄化を感じ、「私たちにとって家族とはなにか」の議論を深めた。その家族のあり方を議論する中で、父親不在ではないか、父親の復権こそ必要と、「父親とは何か」につなげた。そして、平成13年度(2001年)「ボランティア国際年」を迎え、「真のボランティア活動とはなにか」を活動テーマに掲げた。

◇「第2期 協働期」 日本福祉文化学会全国大会静岡大会(平成14年)から6年間

平成12年度に「平成14年度・第13回日本福祉文化学会全国大会静岡大会」開催決定を受け、改めて、「静岡発 福祉文化の創造」を基盤に参集した70名の同士とともに議論を重ね、「富士山麓 いのちと暮らしによりそう福祉文化の創造」を大会テーマに、県内外から約650名が参加し、さらに「静岡発 福祉文化の創造」の議論を深めた。こうした取り組みから、県内の関係機関・団体、学校との協働による活動の更なる展開に努力した。「協働期」6年間の議論では「大人と青年の生きがいと就労」「地域社会を誰が担うか」「子どもを取り巻く地域環境を問う」「団塊の世代の役割は何か」等、常に地域の身近な課題を活動テーマとした。

◇「第3期 実践融合期」 平成20年度から27年度まで、静岡県委託事業「一人でも安心して暮らせる地域づくり事業（長寿者の孤立・孤独防止）」に取り組んだ7年間

本会は、7年間の静岡県委託事業においては、「高齢者」の用語を使用せず、一貫して「長寿者」と表現して取り組んだ。

「長寿者の生きがい・自立」「長寿者への情報提供のあり方を問う、日常生活と福祉情報」「長寿社会を問う」「生活圏域における支え合いとはなにか本音に迫る」「地域と私の居場所」「真の居場所を正す、家族とは何か」「家庭・家族機能」「長寿者をつながる ホットするご近所づくり」「豊かに暮らせる地域づくり」などを検証しながら、一人一人が豊かに暮らし合う地域づくりは、一体誰が担うのかを問い質した。一方、県委託事業に取り組んだこの期間、県内各地域・福祉施設において「ご近所福祉の集い」や、「共生社会を学ぶ集い」の活動が活発に展開された。

◇「第4期 共創社会実現期」 平成27年度から令和元年度までの5年間

新たな地域づくりに向け、共助社会の再構築を期待し、「生活圏域の地域づくり」「ご近所の助け合い」「若者の地域参加」「ご近所福祉の現状を検証」「居場所とは何か」「子どもを育む地域づくり」「ご近所福祉の再構築」「子ども発 地域づくり」「地域ぐるみの支え合いの仕組み」等を活動テーマに取り組んだ。

◇「第5期 ご近所福祉検証期」 令和2年度から現在までの6年間

これまでのプロセスから、令和2年度は「つながるご近所の再構築—ご近所福祉の復活—」を活動テーマに掲げた。翌令和3年度は、「地域を家庭化する支え合いの検証」、令和4年度「ホットする豊かな地域づくりを拓く—共生社会実現を探る—」、令和5年度「世代や領域を超えた、つながる“ご近所福祉”」に取り組んだ。そして、令和6年度「見える・わかる“ご近所福祉”こそ福祉文化」、令和7年度「静岡発 福祉文化の創造 30年の軌跡を検証」を掲げ、ここまで30年間「静岡発 福祉文化の創造」を発信して取り組んできた「福祉文化実践活動」は今、ここに「“ご近所福祉”こそ福祉文化」にたどり着いた。

第2章では、結成後、無我夢中で取り組んだ「草創期」（平成8年度～平成13年度）の6年間と「協働期」（平成14年度～平成19年度）の6年間を中心に振り返りながら、[具体的な活動・3つの柱立て]の[(2)啓発学習活動：県内各地のさまざまな実践活動を静岡発 福祉文化の創造の視点で学び合う] [(3)実践地区活動：県内各地の実践活動事例を共有し合い、それぞれの地域性を地域診断し合う]から、大いに県内外に「静岡発（地域発）福祉文化の創造」の発信に努めた福祉文化実践活動を振り返る。この時期は、学校教育領域と地域福祉領域における両領域において、ボランティア・福祉教育の推進が積極的に取り組まれていた時期であることや、介護保険制度の導入による、福祉人材育成事業を重点に社会が動いていた時期でもあり、若い世代層の福祉領域への関心が高まり、本会の事業に多くの若者層が参加した。特に、「協働期」（平成14年度～平成19年度）の6年間は、「青年の生きがい」や「地域のあり方」「子どもを取り巻く地域環境」「団塊世代」等、身近な地域の課題に学ぶ福祉文化実践の取り組みを展開した。

1 「結婚」「共働き」「地域」「父親」「障害児者理解」論議

- 「鈴木君なぜ結婚したの？ 杉山さんなぜ結婚しないの？」の学びに140名参加

若者層の会員が多かった本会結成当時は、自由に議論が出来るテーマを掲げた研修に心掛けた。

平成9年(1997年)2月9日静岡市内で「鈴木君なぜ結婚したの? 杉山さんなぜ結婚しないの?」公開型研修会には、遠くは、広島県、奈良県、東京都、埼玉県等県外参加者を含めて140名を超える参加申し込みとなった。

福祉文化の視点で“結婚”をテーマにした研修会を、全国的にマスコミが告知をしていただいた結果であった。県内外の結婚相談員をはじめ、40歳前後の子どもを持つ親等予想外の参加者の受け入れに、急きょ会場を変更しての開催となった。

本会では、あとにも先にもない、タイトル「結婚」の選定により、多数の参加者を受け入れた運営面での貴重な研修会の実現であった。

日本福祉文化学会に講師の相談をし、生活評論家 金谷千都子先生を紹介していただき、「結婚」について、身近な話題から社会や個人の問題、意識や制度の問題を多くの人に考えていただく研修の趣旨に快く賛同していただいた。その後、研修会直前まで講師と事前の協議を重ねた。

第一部・基調講演「おいしい結婚、まずい結婚 — 今、結婚から何が見えるか」では、今や、結婚するのに努力と勇気がいる時代、結婚のための手続きや慣習に左右されやすい。

結婚式場やどこまで親戚・ご近所を招くか、家制度の名残・・・等、また結婚できない男性、男性と女性の結婚観のズレ、家庭・家族を築くという基本的概念のズレ・・・等、鋭い分析や具体的な事例を基にした参加者を飽きさせない金谷先生の魅力ある率直な意見は、「男性も女性も、そして老いも若きもしっかりしてほしい」と力を込めて語られた。基調講演の盛り上がりそのまま受け継ぎ、第二部・公開座談会につなげた。未婚者と既婚者それぞれ男女一名づつが登壇し、現代人にとって「結婚とは」「家庭とは」を等身大で議論しながら、金谷先生のコメントと会場の参加者からの意見も加わり、文字通り会場が一体化し、福祉文化の視点から“結婚”を学び合う有意義な場となった。こうした、身近な話題をもとに、豊かに暮らし合うことの意義をそれぞれの年代において自由に意見交換する環境こそ必要であることを確認し合った。

本会の活動は、「結婚」後の議論から、「共働き」へとつなげていった。



*「おいしい結婚まずい結婚」研修会場には参加者が入りきれず、当日開会直前になって、会場を変更しての開会となった。講師の金谷先生は、研修会後の懇親会にも出席され、若い世代の方々と、「結婚論議」は延々と続いた。



「共働き」から「家庭」をもつ中で、「地域」をどのように捉えればよいか、活動は、「家庭と地域と施設を語る」研修テーマを掲げた。ここに「施設」が加わったのは、福祉施設に従事する会員がいたことや、これから福祉の担い手をめざす会員がいて、あえて「施設」を特化した経緯がある。

各年代・領域層の発言者から、さまざまな地域社会の現状の意見を述べられ、その後、参加型ミーティング「私たちにとって、地域とはなにか」で大いに語り合った。日々の暮らしの中で、若い時から、身近な地域社会に目を向けていくことがいかに大切かを確認しあった。こうした地域社会を議論し、更に、福祉施設で生活をされている高齢者は、地域社会をどのように受け止めておられるかを学ぶ提案があり、2回にわたり福祉施設現場に学ぶ活動につながった。



「家族・家庭」の論議では、家族の中の「父親の復権」が浮かび上がった。

●「私たちにとって父親とはなにか」の活動テーマは大きな反響があった

毎日新聞

2001年(平成13年)3月3日(土曜日)

お父さん怖くなると理解もされず

11日に静岡で 公開セミナー

子供とよく話し、休日はある程度、怖くなく、子供からはあまり生き方を理解されていない。市民グループ「静岡福祉文化を考える会」(平田厚代表)が県民1320人に父親に関してアンケートしたところ、こんな「いままでのお父さん」像が浮かんた。会は「友達感覚になり、生き方が子供に十分に伝わっていないようだ」と指摘している。この結果を参考に父親をテーマにした公開セミナーを静岡

県民1320人アンケート

市で11日に開く。調査は昨年10、11月に実施。結果は、全体の結果と、半生537人分を「若者」とみなして比較した。「子供時代に父親と話をしたか」で、「よく話した」の回答は、若者男性が45%、全体32%、若者女性が59%(同45%)で、いまの父親の方が子供とよく話をしている。「父親が休日にご飯を一緒に食べてくれる」とのトップは、若者男女が「こる寝」を挙げ、ともに4分の1。全体で見ると男性は「仕事」、女性は「趣味」になった。

子供の進路に意見希薄

「父親は怖い存在か」には、若者では男女ともに4割余りが「怖くなかった」と答えた。また、「体調を受けたか」との問いに、全体の男女の4割の問いに、全体の男女の4割程度が「よくあった」と答え、たのに対し、若者男女では5割未満で、体調が疲れてきていた状況がうかがえる。「進学や就職で強い意見があった」との回答では、全体の男性が19%、女性が15%だったが、若者は男女ともに平田代表は「父親は厳しい

「父親は怖い存在か」には、若者では男女ともに4割余りが「怖くなかった」と答えた。また、「体調を受けたか」との問いに、全体の男女の4割程度が「よくあった」と答え、たのに対し、若者男女では5割未満で、体調が疲れてきていた状況がうかがえる。「進学や就職で強い意見があった」との回答では、全体の男性が19%、女性が15%だったが、若者は男女ともに平田代表は「父親は厳しい

労働条件で懸命に働いているのに感服がなくなっている。父親の存在感を示そうと努力しても、子供の心に映らなくなっている」と分析している。考える会は県内外の学生や会社員、福祉関係者、主婦らで1996年に発足。これまで、「共働き」「地域」「家族」の三つのテーマで県民アンケートを行ってきた。11日のセミナーは、県総合社会福祉会館で「私たちにとって父親とはなにか」をテーマに会場も取り入れて行う。参加費500円(資料代)。問い合わせは同会事務局(054・246・1488)。

【遠藤 和行】

若年層による犯罪、児童虐待などが社会問題化するなか「静岡福祉文化を考える会」(平田厚代表)はこのほど、「親子」や「夫婦」「家族」の実態を探るべく九百九十六人の県民に意識調査を行った。その結果、父権の弱体化や一家だんらんの減少などが浮き彫りとなった。平田代表は「家族の形が変わりつつある今、家族の主体である大人や親たちが家族とどうかわるのか、真剣に考える必要がある」と提言している。

頼りになるのはお母さんか?

調査によると、約四割の人が「いざというとき頼りになる人は母親」と答え、「父親」の約二割を大きく上回った。また、母親を尊敬していると答えた人(七二・五%)が、父親を尊敬するとした人(六一・五%)よりも多いなど、「一家の大黒柱も傾き気味」。

家族社会学に詳しい県立大短大部の山田美津子教授は、今回の調査結果につ

静岡県民調査

いて「女性の社会進出が予測された。進み、男性は仕事、女性は家事という役割分担の形が崩れたため」と分析。人は「七割にとどまり、朝食を全員で取る家庭はわずかに三八・二%、食事時にテレビをつけている家庭が五九%を数える」など、だんらんの風潮が変わりつつあることを印象付けた。

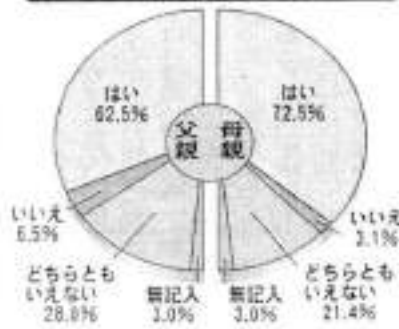
同会の木村幸男副代表は「個人のための時間を優先して、家族一人ひとりの社

会関係は以前よりも広がった。『子どもから信頼されていられる』とした人が七割にも満たないことから、大人や親たちが家族の個人化に自信を失っている様子も浮かがる。山田教授は「これからは自立した個人の生き方を尊重し、互いに支え合う家庭が求められるだろう」と語っている。

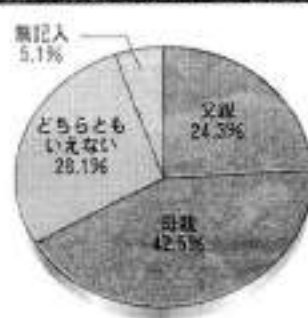
父権弱体化 浮き彫り

だんらんも減少 「支え合う家庭を」

父親、母親を尊敬していますか



両親のどちらが頼りになりますか



社説

ともに悩む姿勢が大切

親と子の関係

いま、父親の在り方が問われている。静岡県内の市民グループが実施した父親に関するアンケート調査で、存在感の乏しさが浮き彫りになった。さらに、静岡県警がまとめた女子の性非行実態調査でも、家庭での父親の姿勢が子どもとの問題行動につながるという分析もなされている。

「頑固おやじ」「地震、雷、火事、おやじ」という言葉に象徴されるように、かつての父親は家族にとって怖い存在だった。ところが、市民グループのアンケートによって薄かんだいまどきの父親像は、畏(い)敬の念を抱くには程遠く、子どもたちが友だち的感覚でとらえているというものだった。

子どもたちは、よく遊んでくれ

る父親を歓迎しているのだらうか。遊びの主役になってしまい、遊びを押しつけているとしたら、一緒に行動することは子どもに苦痛を感じさせることさえある。わが子の心を読めない、自分本位の父親が増えているという。

「よく話をするが、進路などについて助言はなかった」「本気で話を聞いてくれない」。子どもたちへのこんな声も気になる。

会話は欠かせないし、親子間の語らいは楽しい。時には友だちのような感覚で、会話を楽しむのもいい。ただ、子どもが悩み、相談を持ちかけた時は、親としての役割を果たさなければならぬ。

例えば、子どもがいじめに直面した時、あるいは進路問題で岐路に立った時、一緒に悩み、問題解決に立ち向かう姿勢が必要になる。ものわりのいい父親を演じることはない。

県警が行った女子の性非行実態調査でも、父親と子どもとの希薄な関係が表面化した。県家庭教育学会長の福永博文浜松短大教授は、父親との関係の中で尊敬できる男性像はごくまれなことが、性非行につながる一と指摘する。

家族の一員であるという実感がなく、子どもとの心は家庭から離れていく、非行に走った少女たちが家庭に不満がないと言っているのを受け、福永教授は不満がないというのは心が家庭に存在しないからと分析している。

福永教授の分析は、父親の姿勢が子育てにいかに関与を及ぼすか、を的確に指摘している。自己の子育てに照らし合わせ、父親としての在り方を自らに問うた時、心に響く指摘である。

子どもは親の背中を見て育つといわれてきた。だが、全身での受け止めは、時として背中以上にものをいうこともあるはずだ。

焦点

父親にもっと積極的に子供の教育にかかわってもらおうと、県教委が「父子教育手帳」の作製を進めている。来年2月をめどに、県内の高校生以下の子供を持つすべての保護者に配布する予定で、子供の年齢に応じて「幼児期編」「児童期編(小学生)」「青年期編(中、高生)」の三種類を作る。

具体的な構成や内容は、県教委各課の担当職員らで作るワーキンググループの原案(骨子)をもとに現在、編集委員会(委員長・西田ひろ子県立大教授)が検討を進めている。編集委員会は教育関係

者や使う側の立場のPTAの代表、有識者ら二十人がメンバー。細部はまだ詰まっていないが、ワーキンググループは骨子で、子供の発達段階(年齢)別の発達課題や基本的な生活習慣、社会の礼儀やルール、善悪のけじめのしつけの実践例などを、教育学や発達

等について「課題」に指し、学校や行政機関にも父親の参加を促すための情報提供や啓発に乗り出すことを要望していた。十一年度に提言書を手どめた県の有識者会議「人づくり百年の計委員会」も、具体的な方策を提言して

きた父親のどちらが頼りになるか。「両親のどちらを尊敬するか」の問いに、いずれも「母親」との回答が「父親」を上回った。子供たちの視界に映る父親の影が薄くなっていることは認めざるを得ない現実だろう。

を加えていることにも、そんな狙いが込められている。ただ問題は、「父親は子供のために、もっと子供に関心を払うべきだ」との立場に立つた時、父親の自覚を促すだけ果たして解決の道が開けるのかということだ。編集委員会の論議では「企業が父親を家庭に帰していない。父親は教育にかかわりたくても(物理的に)かかわれない状況がある」との率直な発言もあった。先の社会教育委員会の提言にも、社会制度の課題を指摘し、企業にも配慮を望む内容の記述が盛り込まれている。父子手帳に込めるメッセージを、父親だけでなく社会全体で受け止めてもらう。取り組みにあたって県教委が最も考慮しなければならないのは、その点ではないだろうか。

子供の教育

父親の参加促進へ

「父子教育手帳」を作製

県教委が来年2月をめどに

心理学、大脳生理学などの研究成果に基づいて記述、紹介する方針を示している。

これらの提言を受けた対応で、唐突に出てきた発想ではない。

この小道具としてとらえ、単に配布して読んでもらうことを意図するだけでなく、配布の機会を通じて学校教育関係者と父親とが話し合う場を設けたら、社会教育の現場でテキスト的に使用してもらおうことも視野に入れている。編集委員に学校教育関係者のほか、市民団体や公民館関係者

社会教育の一端とは言え、県教委が父親の姿勢にまで踏み込んで口を出すことには異論も予想される。だが、父親の教育参加については県社会教育委員会が平成十年夏に提出した「家庭教育の充実方策

こんな調査結果がある。市民の立場から「親子」「夫婦」「家族」の現状を操っている「静岡福祉文化を考える会」「平田厚代表」が約千人の県民を対象に昨年実施したアンケートでは、「いざ」とい

か、市民団体や公民館関係者

政治経済しずあか

●「世代や領域を超えて、朝まで生福祉を語る合宿セミナー」が実現

福祉への関心がさらに深まり、高校生・大学生等若い世代の会員から、時間を気にしないじっくりと本音で語れる場をつくろうと積極的な提案があり、早くも、結成2年目の平成9年（1997年）8月9日・10日に「朝まで生福祉 世代や領域を超え、福祉文化を語る合宿セミナー」が実現した。

男性12名、女性5名、高校生2名、大学生3名、社会人12名の17名が参加した。

今では見られなくなった、若者と大人社会が向き合い、自由に語れる環境を創出した。

どのようなプログラムを展開したか、当時の記録から振り返ると、

*パネルディスカッション「私の経験・私の課題」

高校生から社会人まで、世代や領域を超えた参加者であったため、まずは、「他人」から「他者」へと、参加者それぞれが相互理解し合う「アイスブレイク」から始まった。

それぞれの会員のこれまでの経験を聞きあいながら、質問し、また反論しながらも、自分を発見する雰囲気となった。高齢社会の現状への不安と市民が努力しなければならない課題を浮き彫りにしたり、同世代とのコミュニケーションはまあまあだが、大人社会と向き合うことが難しいことに対するアドバイス、施設体験をしたが、施設職員の考え方に疑問を感じたこと（実兄が障害者である会員）、学ぶことは自分自身が変わることの気づき、学園祭で福祉に関するコーナーを企画実施したが、意外と反響がよくて満足したこと、高齢者に対する世代間ギャップが大きい・・・等々と論議が続いた。

*グループトーク「私もパネラー！」

参加者が4つのグループ（1グループ4名か5名）に分かれて、前半のパネルディスカッションを受けて、各グループが思い思いにフリートーク。

*フリープログラム「ここからが、朝まで、生福祉！」

各部屋割りメンバーによる自由交流。男性参加者は、一カ所に集まり延々と。

*全体プログラム「研修総括報告」

- ・老人（高齢者）を怖いと受けとめる世代もある。核家族化で、日常的に高齢者と交流する機会が少なくなっている。核家族化から「家族とは何か」が浮き彫りになった。子どもを家族が育むか、親の教育が問われている。
- ・施設体験しなければ、高齢者や障害者との交流が出来ない社会になりつつある。地域の教育力が弱くなっている。人々の関係づくりは大切である。現状の制度を知り、問題を提起していかなければならない。関係者による福祉の関わりから、もっと、広く市民福祉を自分のこととしてとらえることが必要である。
- ・福祉をハード面の整備優先からではなく、もっと、身近なことから考えることが望ましい。

子どもを取り巻く環境は、管理的制約から、もっと自由にのびのびとした環境の構築が必要である。改めて「ノー



マライゼーションとは何か」を問いたい。地域との繋がり的重要性を改めて考えさせられる。
・地域との繋がりをいかにしてつくるかの問題が浮かび上がった。地域に関する情報は、なかなか入ってこない。自主的な地域参加活動が課題である。

この「世代や領域を超えて、朝まで生福祉を語る合宿セミナー」を通じて、会員から寄せられた意見をまとめると、本会結成するときに、取りあえず「静岡福祉文化を考える会」としようとしたが、何時までも「考える会」ではだめで、夢を語り、福祉文化を創る会をめざす会とすべきであるとの提言や、関係者による専門家集団の福祉ではなく、働く人や若い世代等全ての市民が福祉を自分のこととしていく社会をめざそうと、参加者それぞれが今後託す思いをもった。

●精力的に、静岡県内各地で「現場セミナー」を開催して「福祉文化」を学び合った



*住民懇談会において地域課題を学ぶ（旧富士川町）



*伊豆地域のV連の協力で、世代を超えた宿泊研修



*地域ぐるみの居場所実践活動に学ぶ（袋井市）



*若者世代とともに、ホッと居場所を語る（旧清水市）

本会の「現場セミナー」は、公開型プログラムをもとに、県内各地に出向き「福祉文化セミナー」を開催し、地域の市民と共に共有できる学び合いを心掛けた。

県内各地で、生活している在日外国人との交流を通して多文化共生の学びも試みた。

また、障害児者問題にも、積極的に取り組んだ。



*おもちゃ図書館ってなに？を学び合った会場

●「おもちゃ図書館」活動から「福祉文化」に気づいた

当時、静岡県内では、「おもちゃ図書館活動」が、各地域で熱心に取り組まれていた。

「おもちゃ図書館ってなに？」・・・当時の資料から読み取ると、おもちゃをとおして、ハンディをもつ子、もたない子が、共にふれあい、交流する場、そして、ハンディをもつ子どもたちが、地域社会の中で孤立することなく楽しく遊び、多くの子どもたち、ボランティアの方々との温かい輪の中で育つ場と紹介されている。

障害児者理解をテーマに、関係者のご理解をいただき、会員以外に一般市民や、韮山・静岡・焼津・富士等県内のおもちゃ図書館活動に関わっている関係者も加わり、27名が「かけがわキューピーおもちゃ図書館」を訪問し、「おもちゃ図書館の一日」を学んだ。

参加者は、それぞれ思い思いに、自由に子どもたちと向き合いふれあい交流をしたり、「集団遊び」では、全体で歌を歌い、体を動かしたりして、世代を超えたふれあい交流をもとに、「おもちゃ図書館」のボランティア活動等貴重な体験をした。その後、「おもちゃ図書館」運営関係者と参加者との意見交換が活発に行われた。

草の根活動として取り組まれている「おもちゃ図書館」の運営上の課題、家族を取り巻く地域事情から、障害児者が地域社会で暮らし合う地域ぐるみの居場所の試みこそ「福祉文化」と感じ取った交流プログラムであったと振り返ることが出来た。

2 「大人と青年」から、再び「地域」「ボランティア」論議

●積極的な若者参加で、現場セミナー「大人の言い分、若者の言い分」で盛り上がる

本会結成以来、しばらくは、福祉に関心を持ち、積極的に地域参加しようとする若者の提案により、「現場セミナー」は、合宿型・公開型・参加型プログラムの展開が続いた。

結成2年目の平成9年(1997年)8月9日・10日に「朝まで生福祉 世代や領域を超え、福祉文化を語る合宿セミナー」開催(前述)から3年後、参加しやすい7月下旬に、10代の高校生から、大学生、会社員、教員、主婦、福祉関係者、年金生活者等25名が参加して、旧天竜市内で「大いに語ろう、大人の言い分、若者の言い分」をテーマに開催した。

延々と2日間で12時間もの議論を交わした「現場セミナー」から、「福祉文化」を参加者がどのように読み取れたかを振り返ってみる。

プログラムの概要は、第1日目は、まずは、世代や領域の違う参加者同士を知りあう「アイスブレイク」は、歌にゲームにレクリエーションダンスとあつという間に、



「他人」から「他者」へと、参加者全員が笑いあり会話ありで溶け込み、語れる環境も整い、仲間づくりが出来たようにも見えた。すでに、ここで「福祉文化」を参加者それぞれが読み取れたような雰囲気であった。その後、テーマに基づき、3グループに分かれて、前半・後半の2部制の「グループ討議」に入った。第2日目は、全体討議「グループ討議で何を語り合った？」で、大いに語り合ったグループ発表を聞きながら、さらに意見を交わした。

全体会報告の概要は、「お小遣いとアルバイト」「携帯使用の頻度と使用目的」「子供部屋の有無」「兄弟姉妹関係」「親子関係」「父親の存在」「テレビの使用」「学校教育と地域とのつながり」「親の叱り方の問題」「友人関係」等、家族・家庭のあり方や、地域と家庭とあり方をそれぞれの立場から語り合った。

2000年（平成12年）8月28日（月曜日） 中 日



福祉文化を考える会
合宿でじっくり討論
天竜 25人『親子』をテーマに

静岡福祉文化を考える会（事務局・静岡中）の合宿セミナーが二十七日まで二泊三日の日程で、天竜市に本部を置く社会福祉法人天竜厚生会の研修センター（浜北市於呂）で開催された。県内各地から高校生や会社員、教師、主婦ら二十五人が参加。家族構成の原点である親と子に焦点を合わせて討論を重ねながら、福祉文化の原点に迫った。

「親と子それぞれの言い分」をテーマに、参加者が親子関係などについて自身の体験を紹介しながら意見を発表し、問題を提起。親の世代からは「最近では父親の存在感が薄くなっていく。父親としての努力がもっと必要なのは」との声が上がり、ある高校生は「自分の親と同年代の人の意見を聞き、親の考えを知ることが参考になった」と感想を話した。

合宿セミナーでは、全体会やグループディスカッションの間にゲームなどのレクリエーションを交えて交流を深めた。天竜厚生会の福祉教育施設内も見学した。

セミナーで親と子の言い分をテーマに討論する参加者らー浜北市於呂の天竜厚生会研修センターで

●創る福祉を語り合う「現場セミナー」から、「福祉文化」を学ぶ

「地域発 福祉文化の創造」をもとに、身近な地域に学ぶ機会をもつことの必要性を常に議論してきた本会は、出来るだけ、県内の市町に出向き、その地域の皆さんと共に「地域とは何か」「福祉文化とはなにか」を語り合い、住みよい地域づくりについて、それぞれの地域性を活かして、英知を出し合い支え合いの仕組みの実践活動を学んできた。

「沼津市愛鷹地区ふれあい談話室ミニディサービスに学ぶ」をテーマに、平成9年6月14日沼津市愛鷹公民館で開催した「現場セミナー」を、日本福祉文化学会発行の「福祉文化研究Vol.8」に、「特集 福祉文化と地域性 —静岡福祉文化を考える会の実践からの一考察—」と題して寄稿した内容の一部を抜粋して紹介する。

日頃、本会の定例会の議論の中で、各地域の実践による福祉文化の検証が話題になる。

本会活動の究極的な到達目標は「静岡発（地域発）の福祉文化の創造」を探求することである。ここでは、「地域とは何か」「福祉文化とは何か」をもとに、このたび、関係者のご理解とご協力をいただき「沼津市愛鷹地区ふれあい談話室ミニディサービスに学ぶ」を研修テーマに実践活動を学ぶ機会をもった。

今回の沼津市愛鷹地区の「現場セミナー」の研修では、次の3つの視点を掲げた。

- (1) 身近な生活圏におけるボランティア活動の取り組み
- (2) これからの地域における地域・在宅福祉の取り組み
- (3) 社会教育施設を拠点とした福祉活動の取り組み

愛鷹地区は、沼津市の南西部に位置し、沼津と富士を結ぶ根方街道に沿った農村地域である。近年、沼津市のベッドタウンとして開発が進んでいる地域でもある。

人口は約15,000人、5,000世帯で、先代から何代も住み続けている住民と企業に勤務する他地域からの転入者とは生活の背景は違うけれども、歴史的には、商業、農業、工業などの地域によって形成され、このような地域特性が大きく地域活動の活性化に結びつき、混住し合いながら協働による地域づくりを展開している。この地域は、もともとコミュニティづくりへの関心が高く、この地区では、確たる地域組織体制をもち、各部門のリーダー関係者は、日常的に、それぞれの部門の具体的な地域課題解決に向けて活動を具体的に計画し、住民へは、「見える化・わかる化」して、積極的に参加呼びかけを心掛けている。



* 会員・一般参加者・愛鷹地区関係者約40名が一堂に集い、和やかなふれあい交流のひと時を過ごした



* 沼津市愛鷹地区の尊い実践活動を体験し、世代や領域を超えた参加者と有意義な意見交換会を終えて

地区全体のコミュニティづくり推進事業からも、住民自ら、積極的に高齢者や障害者問題を浮き彫りにし、その問題解決に向けた具体的な福祉活動に取り組んでいることが読み取れる。

ボランティア活動は、この地区だけで約 23 のグループ、324 名の地区住民が登録をしている。地区住民（大人）一人一人が、地域の福祉ニーズを把握し活動を通じて、児童生徒と向き合いながら相互学習も深めている。

今回の研修テーマにある「ふれあい談話室ミニサービス事業」は、本日の実践活動の取り組みからも十分理解できる。社会教育施設である「愛鷹公民館」は、確実に、この地区の住民主体の地域活動の拠点機能を持ち、総合的調整機能を持っていることも学んだ。

ボランティア活動では、個々のボランティア活動グループで完結することなく、実に、集団間調整の基に活動していることを学んだ。具体的には、「ミニディサービス活動」では、市当局の援助で管理栄養士の派遣を受け、「給食ボランティア」が会食（配食）に関わる活動に取り組み、「人力車ボランティア」は、参加する高齢者等の送迎に当たる。「中学生ボランティア」等は、当日の案内やレクリエーションプログラムの一端を担い、和やかな雰囲気を提供し、何とも羨ましいほどの世代を超えた地域活動である。

こうした、地域ぐるみの支え合い事業は、組織内で、常に調整機能を維持している。

当日午前中の実践活動を体験したのち、午後は、愛鷹地区活動推進者の皆さんとの意見交換会を開き、次のような貴重な意見をいただいた。

- * 住み慣れた身近な地域社会で、豊かに生活し合うには、地域全体で、これから先のことを見据えていくことが必要であること。
- * 地域が持つ課題を常に「見える化・わかる化」して、地域住民一人一人が、この地域で何が出るかを考え実践していく環境を創ること。
- * 一人一人が、生涯学習の視点で、意欲的に地域活動に参画すること。
- * 家族ぐるみで、地域活動に参画し、祖父母は利用者として、両親は給食ボランティアや送迎ボランティアとして、子どもは、会場の案内やレクリエーション担当としてそれぞれ参画し、帰宅後の家族の話題は、地域を語り合うことで、家族は地域を知り、支え合う地域に参加すること等、和やかに語り合った中に、このたびの学びには、「地域福祉と福祉文化」「児童生徒と福祉文化」「青年と福祉文化」「趣味・余暇と福祉文化」などの色合いが滲み出ている。

●真のボランティア活動を語り合う「現場セミナー」から、「福祉文化」を学ぶ

平成7年の阪神淡路大震災では、過去にない多くのボランティアが被災地に駆けつけた。

学生や社会人等、それまでボランティアの経験のなかった人が多数参加した。

ボランティアが行政を補完する重要な役割を果たしたことから、平成7年を「ボランティア元年」とも呼ばれている。本会は、その翌年に結成されたことも含めて、本会の活動目的には「ボランティア」をしっかりと捉えた位置づけをしている。一方、日本が平成9年（1997年）全世界に向けて提唱し、平成13年（2001年）に、国連が「ボランティア国際年」と定めている。こうした、社会の動きに合わせて、本会では当時、静岡市内をはじめ磐田市において「ボランティア」を考える「現場セミナー ボランティアはただ働きの代名詞か？」を開催し、若者や施設関係者、障害者の方々に登場していただき、地域社会に問題提起をした。

【第3章】 協働で取り組んだ「第13回日本福祉文化学会全国大会 IN 静岡」

1 福祉文化は地域にあり「地域福祉と福祉文化」をもとに

本会結成して4年が経過したこの時期は、無我夢中で県内各地で、身近な地域課題をもとに、誰もが自由に参加できる「公開型現場セミナー」を展開し、「地域に根ざした福祉文化」を共有しながら学び合う機会をもった。「草創期」として、「福祉文化とは何か」を問い質しながら「静岡発（地域発）福祉文化の創造」を発信していた時期でもあった。

東京・昭和女子大学において、1999年（平成11年）11月27日・28日「第10回日本福祉文化学会全国大会東京大会」が開催された。この時の役員会及び総会において、3年後の2002年（平成14年）「第13回全国大会」開催を静岡県できないか打診があった。

これまで、日本福祉文化学会関連の事業は、本会結成につながる「第11回学会現場セミナー」（1995平成7年）を県内の有志により開催したのち、本会結成3年後の1999年（平成11年）に「第18回学会現場セミナー」を開催した実績はあるが、全国レベル規模の大会開催の実績はない。

学会の大きな事業であり、静岡県内外の学会会員の結束を基盤として、本会が学会団体会員として、大会実現に向けて、総合的調整機能を持つことが求められる。

いずれにしても、これまで、県民に向けて発信してきた「静岡発（地域発）福祉文化の創造」の本会活動を、学会全国大会の開催実現により、更に、「福祉文化」を積極的に推進する機会になると考え、この打診を持ち帰り、開催実現に向けて検討をすることにした。

事前段階では、県内外学会会員や、学会事務局との連絡調整機能をもち、本会全会員が一丸となって取り組むことを呼び掛けるとともに、開催実現に向けて基本方針をもとに、当面は、本会運営機能の中で、取り組むことにした。

まずは、特に、交通機関の利便性の高い県内市町のどこで開催できるか、そして、具体的な開催会場をどこにするかの検討を始めた。これまでの「学会全国大会」の経緯を調べると、大学内の開催が比較的多い。本会は、開催地の検討課題については、まず、学会大会を通じて、広く県民に「福祉文化」を理解し合うことが出来ることを最優先に、県民の参加をもとに「地域福祉と福祉文化」を念頭に、学会大会は、地域の公共施設で開催実現したい思いを明確に打ち出した。

まずは、第一の大きな課題は、どこで開催できるかであった。

具体的には、開催趣旨を理解していただき、開催地域から福祉文化を発信できる環境と大会運営に全面的に協力いただき、円滑に進めていくことが出来るように、学会事務局と密接な連携を保持しながら、本会として、精力的に県内市町の関係機関・団体（市町社会福祉協議会）・施設と協議を続けた。

約半年間、県内市町との協議を重ねた結果、静岡県を象徴する「富士山」のもとで開催が可能な東部管内を中心にさらに協議を進めた。

そして、裾野市関係者から、全面的に会場提供を検討していただける回答をもとに、更に、長年、精力的に福祉文化的活動に取り組まれている社会福祉法人富岳会と裾野市社会福祉協議会から学会大会開催へのご理解と運営に協力いただける連絡をいただいた。

開催地を裾野市とし、会場は裾野市民文化センターを予定に、更に、開催実現にむけて、2001年1月14日以降、本会結成当初から毎月開催している「委員会」で具体的な協議をすることにした。

「第57回委員会」より、主議題を「第13回学会大会全国大会静岡大会」として、下記のように取り組んだ。そして、2001年(平成13年)11月29日「第1回学会全国大会実行委員会」開催につなげた。

時 期	具 体 的 な 展 開 内 容
2001(平成13年)	<ul style="list-style-type: none"> ・「第57回委員会」開催 (1)大会の基本的な展開について(2)学会事務局との連携(3)大会開催時期
1月14日	
2月3日	<ul style="list-style-type: none"> ・「第1回社会福祉法人富岳会との打ち合わせ会」開催
2月10日	<ul style="list-style-type: none"> ・「第58回委員会」開催 (1)大会基本計画について(2)学会中部東海ブロック会員への呼掛け
2月22日	<ul style="list-style-type: none"> ・静岡県内東部地区社会福祉協議会への学会大会協力呼びかけ
2月23日	<ul style="list-style-type: none"> ・旅行者との打ち合わせ実施
2月24日	<ul style="list-style-type: none"> ・学会会長来静(旧大須賀町講演会)の折、大会開催に向けた経過報告
2月25日	<ul style="list-style-type: none"> ・学会理事会において「第13回静岡大会開催」に向けた経過報告
3月11日	<ul style="list-style-type: none"> ・「第59回委員会」開催 (1)経過報告(2)実行委員会立ち上げについて
4月7日	<ul style="list-style-type: none"> ・「第60回委員会」開催 (1)経過報告(2)大会基本計画について(3)実行委員会の具体化(委員選出)
5月13日	<ul style="list-style-type: none"> ・平成13年度静岡福祉文化を考える会総会」開催 (1)学会大会開催説明(2)学会大会協力要請 ・「第61回委員会」開催 (1)経過報告(2)実行委員会の具体化(委員選出と開催時期)
5月20日	<ul style="list-style-type: none"> ・日本福祉文化学会理事会において、これまでの経過を報告する
6月2日	<ul style="list-style-type: none"> ・「第62回委員会」開催 (1)経過報告(2)実行委員会の組織化について
7月7日	<ul style="list-style-type: none"> ・「第63回委員会」開催 (1)経過報告(2)実行委員会の結成について
8月4日	<ul style="list-style-type: none"> ・「第64回委員会」開催 (1)経過報告(2)裾野市関係者との協議(3)プレ大会開催検討
8月30日	<ul style="list-style-type: none"> ・裾野市役所に出向き、裾野市長様及び関係者との協議(実行委員会結成)
9月8日	<ul style="list-style-type: none"> ・「第65回委員会」開催 (1)経過報告(2)裾野市関係者との協議報告(実行委員会結成) (3)プレ大会開催具体化
9月10日	<ul style="list-style-type: none"> ・日本福祉文化学会事務局へ経過報告(実行委員会・プレ大会開催)
9月24日	<ul style="list-style-type: none"> ・実行委員会委員承諾者に、実行委員会開催等の連絡
9月26日	<ul style="list-style-type: none"> ・イベントに関する関係機関・団体・法人等に共催/後援依頼文書発送
10月6日	<ul style="list-style-type: none"> ・「第66回委員会」開催 日本福祉文化学会事務局に経過報告 (1)経過報告(2)プレ大会開催具体化(3)実行委員会の具体化
10月9日	<ul style="list-style-type: none"> ・裾野市関係機関・団体・法人等とイベントに関する協議
10月30日	<ul style="list-style-type: none"> ・「第13回学会全国大会静岡大会」に関する裾野市関係者との協議
11月3/4日	<ul style="list-style-type: none"> ・「第12回学会全国大会高知大会(高知県・高知女子大)」において、次回開催県として経過報告実施
11月14日	<ul style="list-style-type: none"> ・学会会長来静の折、プレ大会の開催内容説明
11月29日	<ul style="list-style-type: none"> ・第1回実行委員会開催(裾野市) (1)経過報告(2)実行委員紹介(3)基本計画(4)開催要項(5)会場下見 ・「第13回学会全国大会静岡大会プレ大会」開催 *その後、本会委員会は毎回学会大会開催に向けた必要事項協議し、学会事務局に報告し指示を仰ぐ
2002(平成14年)	
3月24日	<ul style="list-style-type: none"> ・第13回大会ニュースフラッシュ通信第1号発行し、関係方面に発信 *その後、大会終了まで「第8号」(2002.12/25)発行継続した

5月11日	<ul style="list-style-type: none"> * 本会機関誌「OUR LIFE」は、2001年度（平成13年度）・2002年度（平成14年度）に発行した「第27号」～「第35号」まで、学会大会関連内容を掲載し、県内外に「福祉文化」広報啓発に努める。 ・ 第2回実行委員会開催（静岡市） (1) 経過報告 (2) 開催要項作成・配布 (3) 広報啓発 (4) 当日の運営検討
6月15日	<ul style="list-style-type: none"> ・ 開催要項配布・発送作業 県内各市町への情報提供実施
7月13日	<ul style="list-style-type: none"> ・ 研究発表者募集
7月13日	<ul style="list-style-type: none"> ・ 当日配布資料編集作業開始 ・ 当日の役割分担検討 ・ 研究発表者受付締切
8月10-11日	<ul style="list-style-type: none"> ・ 社会福祉法人富岳会において「宿泊研修会」開催（30名参加）
9月2日	<ul style="list-style-type: none"> ・ 第3回実行委員会開催（静岡市） (1) 経過報告 (2) 参加申し込み状況 (3) 研究発表者状況 (4) 当日の運営具体化
11月30日	<ul style="list-style-type: none"> ・ 第4回実行委員会開催（裾野市） (1) 経過報告 (2) 最終確認 (3) その他
11月30日-12月1日	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「第13回日本福祉文化学会全国大会静岡大会」及び「第1回静岡県福祉文化研究セミナー」開催
2003(平成15年) 1月26日	<ul style="list-style-type: none"> ・ 第5回実行委員会開催（静岡市） (1) 経過報告 (2) 大会総括(決算報告) (3) 今後に向けた課題 (4) その他

本会委員会を毎月1回以上開催し、実行委員会委員確認と実行委員会開催計画作成、細かな調整事項や当面の課題を、県内外の関係機関・団体・福祉施設・地域実践者と協議を頻繁に実施して「実行委員会」立ち上げにつなげた。

大会実行委員会には、44名の委員の承諾をいただき、実行委員会を下記のように開催した。

回	開催日時・会場	協議内容
第1回	平成13年11月29日(土) 14:00～16:00 裾野市民文化センター内 (プレ大会開催当日)	(1) 経過報告 (2) 実行委員紹介 (3) 基本計画(開催要項・会場図) (4) 会場下見
第2回	平成14年5月11日(土) 13:00～17:00 静岡県総合社会福祉会館	(1) 経過報告 (2) 開催要項・配布 (3) 広報啓発 (4) 当日の運営検討
第3回	平成14年9月2日(日) 13:00～17:00 静岡県総合社会福祉会館	(1) 経過報告 (2) 運営上の課題について(運営マニュアルで確認) (3) その他
第4回	平成14年11月30日(土) 09:00～10:00 裾野市民文化センター内 (大会当日会場内)	(1) 経過報告 (2) 最終確認 (3) その他
第5回	平成15年1月26日(日) 13:00～17:00 静岡県総合社会福祉会館	(1) 経過報告 (2) 大会総括(決算報告) (3) 各実行委員からの所見 (4) 今後に向けた課題等(各委員所見)



いよいよ、開催1年前となった2001年（平成13年）9月8日に、これまで、本会「委員会」内での協議の場として開催してきた「第65回委員会」において、裾野市関係者等との協議で、地元住民への更なる啓発をしていくために「プレ大会開催実現」を本会からの提案を了解いただいた報告をし、直ちに、日本福祉文化学会事務局に「プレ大会」開催と「実行委員会」立ち上げを報告すると共に、具体的な企画に入ることにした。

本会「委員会」で議論を積み上げ、いよいよ10月6日「第66回委員会」では、「プレ大会」開催の具体化と「学会大会第1回実行委員会」開催に向けて、最終確認をした。

これらの協議内容を踏まえて、10月9日と10月30日に裾野市に出向き、関係機関・団体・法人等と「第13回学会全国大会静岡大会プレ大会」の開催の具体化（会場手配、実行委員会体制）と「第13回学会全国大会静岡大会実行委員会」の立ち上げを報告した。

2001年（平成13年）11月3日・4日に高知県高知市・県立高知女子大学池キャンパスにおいて開催された「第12回日本福祉文化学会全国大会高知大会」に参加し、閉会式で、次回開催県として次のような挨拶をした。

「高知県から静岡県へ、いよいよ平成14年11月30日・12月1日、富士山・箱根外輪山を山裾にもつ、緑豊かな自然景勝地と自動車産業・非金属産業が交差する人口約5万人の静岡県裾野市・裾野市民文化センターを会場に、第13回日本福祉文化学会全国大会静岡大会を開催する。

振り返ると、1999年（平成11年）11月27日・28日「第10回日本福祉文化学会全国大会東京大会」の役員会及び総会において、静岡開催要請を受けて、「静岡福祉文化を考える会」を中心に今日まで開催実現に向けて協議をしてきた。

関係者の熱い思いをもとに、今年11月29日には、福祉文化を広く県民に発信し、啓発をしようと、

「第13回学会全国大会静岡大会プレ大会（テーマ：富士山麓 21世紀の福祉文化の今とこれから）」を開催するとともに、学会大会実行委員会は、44名の実行委員による5回の実行委員会を開催予定とし、全国各地からの参加者を迎えて、意義ある大会実現をめざす。大学キャンパスではなく、住民が生活する身近な地域社会での大会開催実現に向けて、静岡県をはじめ、開催地元裾野市等の関係機関・団体の協力をいただくように働きかけている。私たちが暮らし合う地域社会の中で、どのような福祉文化を創造できるか、性差・年代・領域を超えて、富士山を仰ぎ見ながら、高知県から引き継がれた大会の研究課題をもとに“地域福祉”“福祉教育”“住民参加”等住民に呼びかける幅広い研究協議が出来ることを期待したい。交通機関は、東京・新宿から小田急線（私鉄）御殿場線乗り入れ“あさぎり”裾野駅下車、東海道新幹線は、三島駅下車と比較的アクセス可能な会場である。中部東海ブロック学会会員の皆さんには、中部東海ブロック研修会を兼ねていく。静岡県民には、県内で“福祉文化”を継承して学ぶ出発点として、“第1回静岡県福祉文化研究セミナー”を掲げる。来年6月には、学会会員はじめ広く各方面に、開催要項・研究発表内容等の関係資料を発送する。多数の参加を期待したい。」と、これまで本会中心に議論して煮詰めてきた内容を説明し、案内を兼ねた挨拶をした。

「第12回高知大会」では、研究発表・実践報告部門において、「静岡福祉文化を考える会」の取り組み「地域ニーズの把握と福祉文化活動のプロセス」と題して、結成から5年間の取り組みを(1)静岡福祉文化を考える会の発足と活動目的 (2)調査研究活動と福祉文化の創造へのプロセス (3)これまでの実績とこれから を柱立てに発表し、「第13回静岡大会」につなげた。



*「第12回学会全国大会高知大会」は、和やかな雰囲気のもと、高知女子大学生の皆さんが親切な会場案内等をお手伝いしていた。これまでの本会の研究・実践を報告するとともに、閉会時に次回開催県として挨拶し理解を求めた。

●「学会大会」開催実現に向け、思いを形に「通信」発行「宿泊研修・プレ大会」開催

「本会委員会」で議論を積み重ね、「実行委員会」を正式に立ち上げようとした直前の本会「第66回委員会」において、本会機関誌「OUR LIFE」だけでは、学会大会をきめ細かく発信できない、「学会大会」実現のプロセスを記録に残すとともに、本会会員、実行委員をはじめ、今後、協力要請をする関係機関・団体等に、きめ細かく情報提供をしていくことが必要との意見をもとに、「第13回日本文化学会全国大会静岡大会 NEWS FLASH」（大会関係通信 A4 両面 100部 2002.3/24～2003.1/24 8回）の発行を「第1回実行委員会」で提案し発行につなげた。この通信発行は、大会の貴重な記録の一つになった。主な掲載内容は、「経過報告」「委員会協議事項」「課題提



起」「大会開催要項」「関連研修会報告」「参加申し込み状況・参加実績」「大会協力状況」「研究発表申し込み状況」「実行委員会で総括」である。

大会事務局を静岡県の中部・焼津市に置き、開催会場は、東部・裾野市とかなり距離間のある中で日々の連絡調整と大会開催まで、実務的な協議だけでは不十分だと判断し、会員をはじめ、当日運営協力をしていただく学生や開催地元関係者による「宿泊研修会」を計画し参加を呼び掛けた。

社会福祉法人富岳会の多大なご理解と全面的なご支援をいただき、思いを形にした「公開型合宿セミナー」を2002年(平成14年)8月10日・11日、社会福祉法人富岳会を地域交流室で開催した。

静岡福祉文化を考える会「公開型合宿セミナー」のご案内 「地域発の福祉文化とはなにか？ どうしたら福祉文化を創造できる？」

- ◇ 開催日 2002年(平成14年)8月10日・11日 受付10:00
- ◇ 開催会場 御殿場市神山 社会福祉法人富岳会本部「地域交流室」
- ◇ 定員 20名
- ◇ 参加費 大人3,500円 学生3,000円(宿泊・食事代含)
- ◇ 研修プログラム
 - *第1目 10:00 開会 *開会挨拶 *オリエンテーション
 - 10:40 公開トーク「地域に根ざした福祉活動の取り組み」
 - 12:30 昼食・休憩
 - 13:30 グループ学習「地域社会と福祉文化」
 - 17:30 交流夕食
 - 19:00 全体会「私なりの福祉文化」
 - 21:00 第1目終了
 - *第2目 08:30 社会福祉法人富岳会を学ぶ
 - 10:30 全体会「学会大会に向けて」
 - 12:30 昼食後解散

当時の記録の抜粋から概要を紹介すると、

○全体会「私なりの福祉文化」

*今日、家族や地域問題で、福祉施設への入所傾向が多い。特に、高齢者問題は、介護を必要とする前から、日常的な人間関係が重要であると思う。

*福祉を日頃から実践していくことが、いま私たちが求めている「福祉文化」と感じる。

*いま「あなたの地域は住みやすいですか？」と問われると、年代や居住年数、性別等によりまちまちな意見が出てくると思う。住みにくい意見では、交通機関の不便さ、地域が大きすぎてまとまらない、人間関係がバラバラ、学校が遠い、深い付き合いが出来ない、自然環境に恵まれていない、治安が良くない、合併問題が地域を二分している。

一方、住みやすい意見では、近隣との交流が日常的にできている、自然で、地理的条件が良い、こじんまりと地域がまとまっている。

○「公開型合宿セミナー」参加の感想

*世代を超えて意見を交わすことが出来た。

*自分なりに、身近な地域で人々をつながりを持ち、お互いに支え合うことを「福祉文化」と

受け止め努力をしたい。素晴らしい自然な環境で、学び得たことこそ「福祉文化」。

* 日々の地域実践活動を地域社会に根付かせる取り組みこそ「福祉文化」と感じた。

* 福祉施設を取り巻く様々な問題を考えるいい機会となった。問題の根底にあるのは「家族：家庭」「地域」と感じた。いかにして、日頃から、「福祉施設」と「家族・家庭」「地域」をつなげる努力が大切だと感じた。福祉を実践していく上で、「地域」を知ることだと学んだ。いろいろな人がいて当たり前な地域をしっかりと理解していきたい。

あと3カ月後に開催する学会大会を成功させるために「公開型合宿セミナー」を開催した。世代を超えて、テーマは「地域発の福祉文化とはなにか？ どうしたら福祉文化を創造できる？」



* 雄大な富士山が、大会当日もぜひと願いつつ



* セミナーは、アイスブレイク(自己紹介)から



* 3つのグループで、「地域社会と福祉文化」を語る



* 全体会「学会大会に向けて」経過報告



* 山内富岳会理事長様が2日間の合宿セミナーを総括



* 大いに語り合い、学会大会成功を願いつつ

平成14年(2002年)8月14日(水曜日)

福祉と地域を考える
御殿場でセミナー
県内外の大学生や福祉関係者でつくる「福祉文化を考える会」(代表、平田厚静)が、御殿場市神山の社会福祉法人「富岳会」で開かれた。会員のほか地元福祉関係者など延べ約三十人が参加し、福祉と地域のあるべき姿を探った。

マにトークを行い、介護保険制度の課題や同制度に対する市民の意識などを解説。参加者はグループ別に議論を深めた。二日目、参加者は富岳会関連の施設を見学した後、前日の議論を踏まえた上で全体で意見交換を行った。福祉文化を考える会としては十一月末、御殿場で予定されている日本福祉文化学会大会を視野に、発表の骨子などの検討を行った。

表紙

広告



福祉文化について意見を交わす参加者。御殿場市神山の富岳会の高松会。初日は同会の副代表二人が地域に根ざした福祉施設を取り組みをテーマに

こうした、貴重な学会大会開催を、単に関係者だけの学びの場だけに終わらせてはならない。この機会に、本会の福祉文化実践活動を大いに、県民に発信できる機会であり、つなぐ工夫をしていこうと、会員の熱い思いと学会大会開催地元関係者の多大なるご理解のもと、「第13回日本福祉文化学会全国大会静岡大会プレ大会」が、大会会場と同じ、裾野市民文化センターを会場に開催することになった。プレ大会開催決定から、開催当日まで、わずか4か月の期間中に、学会事務局との連絡、開催地元関係者との協議、マスコミ各社への情報提供、主には、学会大会開催地の地元市民への「福祉文化」の発信と、県内東部地区関係団体への開催協力要請と共に参加呼びかけに全力投球した。

第13回日本福祉文化学会全国大会静岡大会プレ大会開催要項 富士山麓 21世紀 福祉文化の今とこれから

○開催要旨

これからの「地域社会」は、一人ひとりが自分たちの持ち味を出し合い、主体となり、住み慣れた身近な生活エリアで、積極的に支え合ってその生活基盤を作り上げていく努力が求められています。日頃から、福祉文化活動に関心を持ち、また、自ら実践し「地域発福祉文化の創造と地域社会とのネットワーク」のあり方を確立していく「地域福祉と福祉文化の創造」をテーマとした「第13回日本福祉文化学会全国大会静岡大会」(第1回静岡県福祉文化研究セミナー・中部東海ブロック研修会・静岡県福祉職養成機関等ネットワーク研究会)を広く県民に広報啓発する目的で開催します。

○共 催 裾野市・裾野市教育委員会・裾野市社会福祉協議会・社会福祉法人富岳会
日本福祉文化学会・静岡福祉文化を考える会

○協 力 静岡県ボランティア協会

○開催日時 平成13年11月29日(木) 18時～20時30分

○開催会場 〒410-1117 裾野市石脇 586 裾野市民文化センター 多目的ホール

○参加定員 200名 ○参加費 無 料

○プログラム

17:00 受 付

18:00 開 会・*オリエンテーション

*挨拶 裾野市長 大橋俊二様 裾野市社会福祉協議会 会長 高橋とみ様

*開催趣旨説明 静岡福祉文化を考える会 代表 平田 厚

18:15 第1部 短めの公開トーク「富士山麓 いま、私たちの町は」

* 幼寿自遊館 館長 関 弘 子 様

* NPO 法人静岡パソコンサポートアクティビティ 理事長 板 垣 徹 様

* 沼津市愛鷹地区社会福祉協議会 企画委員長 鈴木敏久 様

* 司 会 静岡福祉文化を考える会 副代表 木村幸男 様

19:05 休 憩

19:10 第2部 講 演「富士山麓 21世紀 福祉文化の今日と明日」

講 師 日本福祉文化学会会長・長崎純心大学教授 一番ヶ瀬 康子 様

20:20 報 告 「第13回日本福祉文化学会全国大会静岡大会」に向けて

日本福祉文化学会 事務局長 馬 場 清 様

20:30 閉 会 *挨拶 社会福祉法人 富岳会 理事長 山内 玲子 様

この開催要項に基づき、「プレ大会」は、参加者250名に当日運営関係者50名を加えると、約300名の参加者が福祉文化を学び合った。

本会機関誌「OUR LIFE 第31号」に、この取り組みを掲載したので紹介する。

「第13回日本福祉文化学会大会INしずおか」プレイベント報告

地元各機関・団体と協力し合い、確かな手ごたえを得たプレイベント

去る11月29日、「第13回日本福祉文化学会大会INしずおか」のプレイベントが「富士山麓21世紀～福祉文化の今とこれから」をテーマに、裾野市民文化センターで開催されました。

今回は当日様子を紹介し、近づく11月30日～12月1日の本大会にむけた、協力を呼びかけとします。

地元関係者と協力し合った準備作業

当日は午後1時頃から「考える会」のメンバー20名を中心に、会場準備や資料の袋詰め作業を行った。その後、本大会実行委員長の山内令子氏（富岳会理事長）をはじめプレ大会実行委員が集結し、顔合わせや日程等細かい打合せが続いた。開幕直前には富岳会の職員の方々も多数駆けつけて、受け付けや会場内の保安等に加わり、万余の体制で準備がすすめられました。

オープニングセレモニー、そして開会へ…

定刻6時にはオープニングセレモニーが行われ、考える会会員の鷲山さんと佐藤さんが、福祉との出会いから今に至る経過、そして福祉文化への熱い思いを会場につめかけた参加者に語られた。

開会挨拶ではご多忙の中、大橋俊二氏（裾野市市長）、高橋とみ氏（裾野市社会福祉協議会会長）が挨拶をされ、プレ大会及び本大会を裾野市で快く受け入れて下さる、あたたかいお言葉を頂きました。

～第1部～

「短めの公開トーク」

「富士山麓 いまわたしたちの町で…」

公開トークでは、子供と高齢者の交流の場として自宅を開放されている関弘子さんや菘山町を中心に障害者のIT技術の活用支援を行っている板垣徹さん、沼津市愛鷹地区社協企画委員長の鈴木敏久さんらによる地域福祉活動の取り組みや課題、今後の抱負等が語られ、当会お馴染みの木村さんの軽快なコーディネートもあって、「短めのトーク」と題されながらも非常に中身の濃いものとなりました。



2001年公開 公開トークと講演

ボランティア活動と地域福祉の検証

日時 2002年3月10日(日) 10時30分～16時

会場 ワークピア鶴田 〒438-0036 裾野市鶴田2989-3 ☎054-38-8381

内容 ●基調報告「ボランティア活動実践者意識調査」から見たもの
●公開トーク「ほんもののボランティア 俺のボランティア」
●地域福祉講演「地域づくりと福祉文化」

日本福祉文化学会会長 一番ヶ瀬康子さん

主催 ●静岡福祉文化を考える会 共催 ●鶴田市社会福祉協議会
協力 ●日本福祉文化学会/静岡県ボランティア協会



大橋俊二 裾野市長挨拶



高橋とみ 裾野市社協会長挨拶

～第2部～

「富士山麓21世紀 福祉文化の今日と明日」

第2部は、一番ヶ瀬康子先生（日本福祉文化学会会長）による講演。福祉文化活動の実践例を多く語り「地方発の福祉文化活動こそがこれからの地域づくりに必要」と強調。また、先生の呼びかけで日本福祉文化学会モンゴル支援の募金も募られ、3万円ほどの善意があつまりました。

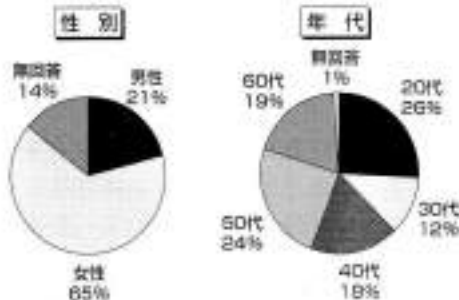


プレ大会を終え、いよいよ本大会へ

今回のプレ大会は天候が不安定だったにも関わらず、裾野市内外から220名近くの参加がありました。そして今年11月30日(土)～12月1日(日)に行われる本大会に向けて、運営面においてよいリハーサルとなりました。尚、裾野市行政の方々のお力添えによって、会場の確保等や運営面を円滑に行えましたことを厚くお礼申し上げます。



「福祉文化セミナー」参加者アンケート結果



1. 今回の「福祉文化セミナー」について/性別(%)

	男性	%	女性	%	無回答	合計	%
とてもよかった	15	69.2%	54	68.4%		69	63.9%
まあまあよかった	8	34.8%	25	31.6%		33	30.6%
あまりよくなかった	0	0.0%	0	0.0%		0	0.0%
まったくよくなかった	0	0.0%	0	0.0%		0	0.0%
合計	23	100%	79	100%	6	108	100.0%

2. 「福祉文化」という言葉を目にしたり耳にしたことがあるかについて/性別(%)

	男性	%	女性	%	合計	%
ある	9	39.1%	52	61.2%	61	56.5%
ない	14	60.9%	33	38.8%	47	43.5%
合計	23	100%	85	100%	108	100%

3. 「福祉文化」とはどのようなものか、おわかりになったか/性別(%)

	男性	%	女性	%	合計	%
だいたいわかった	19	82.6%	77	90.0%	96	88.6%
よくわからない	3	13.0%	5	5.9%	8	7.4%
無回答	1	4.3%	3	3.5%	4	3.7%
合計	23	100%	85	100%	108	100%

4. 来年開催予定で開催する「第13回日本福祉文化学会全国大会静岡」で希望するもの(複数回答可)

	希望数	%
1 地元や静岡県東部での福祉・ボランティア活動の実践報告	39	10.8%
2 静岡県内での福祉・ボランティア活動の実践報告	31	8.6%
3 全国各地での福祉・ボランティア活動の実践報告	53	14.6%
4 地元や静岡県東部の福祉・ボランティア活動者との意見交換・交流	27	7.5%
5 静岡県内の福祉・ボランティア活動者との意見交換・交流	16	4.4%
6 全国各地の福祉・ボランティア活動者との意見交換・交流	26	7.2%
7 これからの福祉のあり方に関するパネル討議	42	11.6%
8 これからのボランティア活動に関するパネル討議	25	6.9%
9 学者・専門家・有識者の講演	35	9.7%
10 経験豊かな福祉・ボランティア活動実践者の公開トーク	65	18.8%
全体回答数	362	100%

2 「協働」による福祉文化実践の場

学会大会開催実現に向けて、短期間で「プレ大会」開催実現につなげ、確実に、開催地元をはじめ、静岡県内に「福祉文化」発信の努力をすることが出来た。

学会大会実現に向けたプロセスにおいて、単に、広報啓発活動だけではなく、県内外の関係機関・団体、企業、福祉施設、高等教育領域等と、いかにつながることができるかの課題があった。

残り少ない事前段階において、「準備8割 当日2割」を念頭に、この課題にさらに取り組まなければならないことを本会委員会で確認をした。本会の活動基調から、学会大会への大切な関わりの中で、大いに活かしていきたい「キーワード」として『融合』『協働』『共創』『創造』『つなぐ』『共生』等、いろいろと思い当たる。

静岡県における学会大会の開催趣旨は、あくまでも「静岡発（地域発）福祉文化の創造」を、幅広く発信することを思うと、開催までの道程において、より多くの関係機関・団体等からの賛同をいただかなければならない。間もなく、学会大会開催実現に向けて、始動する実行委員会に対して、その思いを確実に伝えるために、会員中心に、更に、より多くの賛同がいただけるように働きかける努力を続けた。具体的には、「開催要項（案）」の「共催」「後援」「企業広告掲載」の承諾を取り付ける作業に全力投球した。「市民性と専門性の融合」や、「教育と福祉の融合」等を念頭に置きながら、なんとか、下記の関係機関・団体等から「共催」5箇所、「後援」35カ所、「広告掲載」3箇所のご理解のもと承諾をいただくことが出来た。

* 共 催（5）

裾野市 裾野市教育委員会 裾野市社会福祉協議会 社会福祉法人富岳会 静岡福祉文化を考える会

* 後 援（35）

静岡県 静岡県教育委員会 静岡県社会福祉協議会 市町村社会福祉協議会連絡協議会 静岡県民生委員児童委員協議会 静岡県共同募金会 静岡県コミュニティづくり推進協議会 静岡県保育士会 静岡県子ども会連合会 静岡県母親クラブ連絡協議会 静岡県PTA連絡協議会 NHK学園専攻科CSネットワーク 静岡県社会福祉士会 静岡県介護福祉士会 静岡県福祉教育推進ネットワーク 静岡県家庭教育学会 静岡県社会福祉経営者協議会 静岡県精神保健協会 静岡県精神保健福祉会連合会 静岡県老人保健施設協議会 静岡県民間在宅福祉サービス事業者協議会 静岡県ホームヘルパー連絡協議会 静岡県ソーシャルワーカー協会 （財）富士福祉事業団 （財）福祉推進事業団 静岡県ボランティア協会 （社）日本フィランソロピー協会 （財）日本レクリエーション協会 静岡県レクリエーション協会 静岡県レクリエーション指導者連盟 ハートフルレクリエーション ワーカーズコープ夢コープ NPOシナジーネットふじ （財）静岡健康長寿財団 （財）静岡県老人クラブ連合会

* 広告掲載 ナガハン印刷株式会社 明石書店 中央法規出版名古屋営業所

* 運営協力 クリエイターズクラブアルゴ NPO 法人静岡パソコンサポートアクティビティ(映像) 御殿場市・小山町協力者(当日駐車場係)

本会の委員会で、学会大会実現に向けて3年間、そして、44名からなる「大会実行委員会」(5回開催)の議論を重ね、多くの支援をいただき、次頁の「大会開催要項」に基づき、延べ650名の参加者により有意義な学会大会を開催することが出来た。

第13回日本福祉文化学会全国大会静岡大会/第1回静岡県福祉文化研究セミナー開催要項 — 富士山麓 いのちと暮らしによりそう 福祉文化の創造と推進 —

1. 開催趣旨（概要抜粋）

これまで、静岡県では、学会大会の要請を受けて3年間“人間らしい豊かさをめざして、今、文化としての福祉を語る”をテーマに「地域発 福祉文化を学ぶ」議論を県内各地で実施してきた。

今、新たな社会福祉システムのもとに、真の地域福祉の時代に向け、身近な地域社会で、地域住民一人一人の主体のもとに、豊かに暮らし合う福祉コミュニティづくりが求められている。

第13回日本福祉文化学会全国大会静岡大会/第1回静岡県福祉文化研究セミナーでは、これまで積み上げられてきた「福祉文化」を地域社会の中でどのように共有することが出来るか、過去の様々な社会問題や最近の国際情勢の動きにも関心を持ちながら、今日まで“築きあげられてきた福祉”から、“これからの福祉社会づくり”に学び合い、市民一人一人の豊かさの上に、創り上げていく福祉文化の研究と実践の方向性を、日本のシンボルとしての霊峰“富士山”のふもとで、じっくりと“地域発 福祉文化の創造”に向けた研究討議をする目的で開催する。

2. 主 催 日本福祉文化学会 第13回日本福祉文化学会全国大会静岡大会実行委員会

3. 共催・後援・協力 *前 述 (省略)

4. 開 催 日 時 平成14年11月30日(土) 12:20～16:50 12月1日(日) 09:30～16:10

5. 開 催 会 場 〒410-1117 静岡県裾野市石脇586 裾野市民文化センター

6. 参 加 費 一般社会人(会員・非会員)3,000円 学生2,000円

7. 定 員 300名

8. 当日のプログラム

◇第1日目(11月30日 土曜日)

10:00 絵画展示コーナー開設

11:30 受付開始

12:20 開会セレモニー アトラクション

「特別養護老人ホーム一ノ瀬荘利用者による合奏」「富岳太鼓」

開 会	主催者挨拶	日本福祉文化学会 会長	一番ヶ瀬康子
	大会実行委員長挨拶	社会福祉法人富岳会 理事長	山内令子
	裾野市長挨拶		大橋俊二 様

オリエンテーション

13:00 基調報告「地域福祉と福祉文化の創造に向けて」

大会事務局長 静岡福祉文化を考える会 代表 平田 厚

13:20 アトラクション 「富岳少年少女合唱団」保育園児100名による第九歓喜の歌

13:30 リレー講演

「復活 -花は実の一-」 御殿場市神山復生病院 外山富士雄 様

「50年・福祉の流れを思い」 聖隷福祉事業団 顧問 長谷川 力 様

「アフガニスタンの現状とカレズの会活動」

NGOカレズの会 理事長 レシャード・カレッド 様

16:20 リレー講演総括

「これからの福祉文化の課題」 日本福祉文化学会 会長 一番ヶ瀬康子

16:50 学会総会/絵画展示コーナー

*懇親会参加者及び宿泊者は、懇親会場及び宿泊会場へ順次送迎バス運行

18:30 懇親会 会場：御殿場高原ビール内 バイキングレストラン麦畑

20:30 懇親会閉会

◇第2日目(12月01日 日曜日)

- 08:30 絵画展示コーナー開設
 09:30 A 課題別分科会
 「地域福祉と福祉文化」「福祉教育と福祉文化」「自然・環境と福祉文化」
 「福祉サービスと福祉文化」
 B 自由発表（3会場）
 C ワークショップ「遊びと福祉文化」
 12:30 休憩/昼食/絵画展示コーナー
 13:10 アトラクション「やすのりバンド」（クリニックや作業所に通う仲間たちのバンド）
 13:30 総括シンポジウム「富士山麓 いのちと暮らしによりそう 福祉文化の創造と推進」
 *コーディネーター 中部学院大学 阪野 貢 様
 *シンポジスト
 「地域福祉と福祉文化」 社会福祉法人 慶和会 小野寺一雄 様
 「福祉教育と福祉文化」 静岡福祉文化を考える会 板倉 幸夫 様
 「自然・環境と福祉文化」 埼玉大学 安 藤 聡 様
 「福祉サービスと福祉文化」 関東学院大学 萩原 清子 様
 15:40 閉会セレモニー
 主催者挨拶 日本福祉文化学会 会長 一番ヶ瀬康子
 大会副実行委員長挨拶 裾野市社会福祉協議会 会長 高橋 とみ
 次期開催県代表者 埼玉県
 16:10 閉 会
 9. 参加申し込み・問い合わせ/学会大会事務局 *記載省略
 10. その他（宿泊申し込み・送迎バス）（課題別及び発表） *記載省略

「静岡発 福祉文化の創造」を発信した「第13回学会全国大会静岡大会」の記録



*雄大な富士山が参加者を迎えてくれた 社会福祉法人富岳会職員のご協力により、1,000セットの資料が準備出来た



*本会会員による最終打ち合わせのあと、当日運営にあたる多くの関係者との打ち合わせが会場入り口で行われた



*関係者の打ち合わせ後、富岳会職員及び学生ボランティアによる受付が始まる 裾野市長様も会場入りされる



*映像でオープニング

*静岡県及び全国各地から650名の参加者

*主催者挨拶 一番ヶ瀬学会会長



*基調報告

*アトラクションは、社会福祉法人富岳会の皆さんの合奏、富岳太鼓演奏



* 「富岳少年少女合唱団」 保育園児 100 名による第九歓喜の歌

* 「やすのりバンド」の演奏



*アトラクションに続き、「リレー講演」 外山富士雄様 長谷川力 様 レンジャー・カレット様



* 御殿場高原ビール内で懇親会



* 大会総括シンポジウム



* 会場からたくさんの意見をいただいた



* 2日にわたる大会終了後、学会会長より、関係者へのお礼



* 2日間の大会が無事終了し、実行委員の皆さんがそろって記念写真



*大会運営に多大なご尽力をいただいた学生を始め多くの運営スタッフの皆さんがそろって記念撮影



*当日配布資料と記録DVD

静岡 居帆 平成14年(2002年)12月1日 (日曜日)

「幸せの在り方」を討議

裾野福祉文化学会が全国大会

全国の福祉関係者、研究者が市民と共にこれからの福祉文化について考える「日本福祉文化学会大会」が1日、裾野市民文化センターで開かれ、約500人が参加した。大会は「幸せの在り方」をテーマに討議する。その模様は「福祉文化」に掲載する。また、この大会で「幸せの在り方」をテーマにしたシンポジウムも開催された。このシンポジウムは、福祉文化の発展に貢献する。また、この大会で「幸せの在り方」をテーマにしたシンポジウムも開催された。このシンポジウムは、福祉文化の発展に貢献する。また、この大会で「幸せの在り方」をテーマにしたシンポジウムも開催された。このシンポジウムは、福祉文化の発展に貢献する。

「日本福祉文化学会大会 in 静岡」で実施された活動の一つとして紹介された裾野市民文化センター

*閉会時、学会事務局長 馬場清氏より、引き続き「日本福祉文化学会」へのご理解とご支援をお願いする呼掛けをした。

静岡 居帆 平成14年(2002年)12月2日 (月曜日)

「福祉文化」を模索

裾野学会大会が閉会

「日本福祉文化学会大会」が1日、裾野市民文化センターで閉会した。この大会で「福祉文化とは何か」について意見交換したシンポジウムも開催された。このシンポジウムは、福祉文化の発展に貢献する。また、この大会で「福祉文化とは何か」について意見交換したシンポジウムも開催された。このシンポジウムは、福祉文化の発展に貢献する。

「福祉文化とは何か」について意見交換したシンポジウム＝裾野市民文化センター

3 「静岡県福祉文化研究セミナー」の誕生

結成7年目の平成14年度に、日本福祉文化学会より「第13回日本福祉文化学会全国大会」の静岡県開催を要請され、県内外の44名が実行委員会を組織して、平成14年11月30日・12月1日の2日間、裾野市、裾野市社会福祉協議会、社会福祉法人富岳会等の全面的協力のもと、裾野市民文化センターにおいて全国各地から650名余の参加者が「富士山麓 いのちとくらしによりそう福祉文化の創造と推進」をテーマに熱く議論した。

この貴重な「第13回日本福祉文化学会全国大会静岡大会」により、静岡県から発信した「福祉文化の火」を消すことなく、引き続き、県内外に発信しようと、この大会を「第1回静岡県福祉文化研究

セミナー」として、「静岡発 福祉文化の創造」を実践し続けることにした。

「豊かに暮らし合う」「地域福祉」「静岡発の福祉文化」「団塊の世代」「共生社会」「地域を繋ぐ」「支え合いの仕組み」「福祉文化の原点」「家族」「ご近所福祉は誰が創る」「安心した地域」「ほっとする居場所」「地域で子どもを育む」等、このセミナーでは、一貫して、その年度に浮き彫りになった地域課題をテーマに、参加者相互に意見を交わし合うプログラムとした。

長引くコロナ禍下で、見え隠れしている「人々のささえあい」から、大人社会を取り巻く地域環境を分析し、これから、住み慣れた地域で暮らし合う地域環境をいかに創り出すか、地域の現状をしっかりと把握しながら、大人社会の意識改革を図るための「大人の地域学習」による「共助社会の再構築」の議論を深めてきた。

外部講師によるプログラムではなく、「集める学びではなく、集まる学び」をもとに、参加者同士が議論を深め合うことを維持して、なんとか、ここまでつないできた。

改めて、これまでの「静岡県福祉文化研究セミナー」の歩みを振り返ってみると、

- *第02回 「全ての人豊かに生きるための福祉文化」 ……静岡県福祉大学 153名
- *第03回 「地域福祉と福祉文化を探る」 ……富士川町地域福祉センター 120名
- *第04回 「つながる地域に福祉文化を発信できる新たなまちづくりを語る」
……………静岡県福祉大学 110名
- *第05回 「静岡から発信する“福祉文化の創造”とはなにか」 ……静岡県福祉大学 120名
- *第06回 「これからの地域社会は一体誰が担うのか—地域と団塊の世代の役割を検証」
……………県労政会館 80名
- *第07回 「長寿者と共に暮らす共生社会の担い手は誰か？」
……………県総合社会福祉会館 100名
- *第08回 「長寿者と共に小地域をつなぐ仕組みづくり実現に向けて」
……………県総合社会福祉会館 70名
- *第09回 「地域発“福祉文化の創造”これからのご近所づくりの原点を探る」
……………県総合社会福祉会館 40名
- *第10回 「“福祉文化の創造”の原点に振り返って—世代を超えて語り合う—」
……………県総合社会福祉会館 46名
- *第11回 「福祉文化と家族—これまでの家族とこれからの家族—」
……………県総合社会福祉会館 50名
- *第12回 「地域を変える新たな支え合いのシステムを生み出す」
……………県総合社会福祉会館 50名
- *第13回 「静岡発 福祉文化の創造—人々が豊かに、安心して暮らせる地域づくり」
……………県総合社会福祉会館 40名
- *第14回 「静岡発 福祉文化の創造による豊かに暮らせる生活圏域の地域づくり」
……………県総合社会福祉会館 30名
- *第15回 「静岡発 福祉文化の創造と豊かなご近所福祉づくり」
……………県総合社会福祉会館 30名
- *第16回 「静岡発 福祉文化の創造とホッとする居場所 ……清水区「寄ってっ亭」 30名
- *第17回 「静岡発 福祉文化の創造と子どもの支援を考える」
……………清水区「寄ってっ亭」 20名
- *第18回 「静岡発 福祉文化の創造 福祉文化と子ども」 ……清水区「寄ってっ亭」 20名
- *第19回 「ホッとする、ご近所のささえあいは誰が創る？」 清水区「寄ってっ亭」 20名
- *第20回 「ご近所福祉と福祉文化」 ……県総合社会福祉会館 20名
- *第21回 「再び“ご近所福祉”を描く 福祉文化を探る」 ……清水区「寄ってっ亭」 20名
- *第22回 「教育と福祉の融合と福祉文化」 ……清水区「寄ってっ亭」 20名
- *第23回 「“ご近所福祉”こそ福祉文化 23年間の歩みを語る」
……………清水区「寄ってっ亭」 20名
- *第24回 「今、あなたの地域は何色ですか・・・」 ……清水区「寄ってっ亭」 20名

● 24年間の「福祉文化研究セミナー」のアルバム



* 第2回以降、しばらくは大学内で世代を超えた議論。



* 県内の地域実践事例を学びながら、議論を深めた



* 「ワークショップ」では、たくさんの意見が出た



* 時には、マスコミ取材もあり、盛り上がりを見せた



* 本会結成以来、福祉文化実践活動を応援していただいている「劇団ほのお」（主宰大石さき様）を時々お迎えして、高齢者を取り巻く問題を大石様（当時90歳）自ら演じ、その後、参加者と共に共助社会の議論を深めた



● 「第2回静岡県福祉文化研究セミナー」から、協働でつながった子育て支援事業

静岡県における、これまでの福祉文化実践活動を体系的に取り組もうと、裾野市で、2002年11月30日・12月1日開催した「第13回日本福祉文化学会全国大会静岡大会」を、「第1回静岡県福祉文化研究セミナー」として、本会結成8年以降、継続して取り組み、現在に至っている。

「第2回静岡県福祉文化研究セミナー」を、2004年2月29日、静岡福祉情報短期大学(現 静岡福祉大学)との共催により「静岡から発信する“福祉文化の創造”を拓く」をテーマに、日本福祉文化学会 副会長 藪田碩哉氏の多大なるご理解をいただき、右頁のプログラムで開催した。

県内各方面に広く参加を呼びかけ、福祉施設職員をはじめ、地域ボランティア、コミュニティ関係者、民生委員、行政関係者、学生等153名が参加した。

第2回静岡県福祉文化研究セミナー プログラム

- 10:00 開会セレモニー(挨拶・オリエンテーション)
10:10 基調報告「静岡に根付き、そして発信する“福祉文化の創造”とはなにか」
報告 静岡福祉文化を考える会 代表 平田 厚
11:00 分科会 第1分科会 「高齢者と福祉文化」
第2分科会 「子どもと福祉文化」
第3分科会 「精神障害者と福祉文化」
第4分科会 「福祉施設と福祉文化」
第5分科会 「レクリエーションと福祉文化」
12:30 昼食・休憩
13:10 短めのワークショップ 「福祉援助者にとってのホスピタリティとは」
14:10 講演 「これまでとこれから “福祉文化の創造”
講師 日本福祉文化学会 副会長 藺田 碩哉 氏
15:30 閉会

当日、「4つの分科会」のひとつ「子どもと福祉文化」には、40名の参加者が、子どもたちが暮らす身近な地域社会に、今日、多くの課題がある等、熱心な意見交換が行われた。

これらの議論から、課題解決に向けて、静岡福祉文化を考える会事業と焼津市子ども会世話人連合会の親子地域交流参加事業、そして、静岡福祉大学(平成16年4月改名)の学生の地域参加活動をもとに、具体的に「子育て支援事業」立ち上げの提案があった。大学側の理解のもと、セミナー後、僅か2か月間で、関係者打ち合わせ会(11回・延べ150名参加)を開催し、「日本レクリエーション協会」提唱の「あそびの日キャンペーン」に参画する形で、関係機関の支援をいただき、平成16年5月30日(日)に、静岡福祉大学内において、『わんぱくあそびフェスティバル2004』を盛大に開催することが出来た。当日は、親子700名、地域ボランティア・本会会員等80名、学生140名、関係者80名等約1,000名が、約30のあそびの広場を運営し、手作りのイベントを展開した。

本会会員は、事前準備から事後対応まで関わり、世代や領域を超えた貴重な協働実践事業により、こうした領域においても「静岡発 福祉文化の創造」を発信することが出来た。

この事業は、平成19年度まで4年間継続した。並行して、日常的な「わんぱくあそび寺子屋」(放課後子ども教室事業)も開設し、取り組むことになった。

●「わんぱくあそびフェスティバル2004」の記録より



*いよいよ、フェスティバルの開幕です！

*大学キャンパスは大賑わい

*みんなで楽しく遊んだ1日でした



30年の節目の2025年度（令和7年度）に、第24回セミナーを開催。

「福祉文化とはなにか」「静岡発 福祉文化の創造とはなにか」、そして「セミナーの原点はなにか」の議論をこの先の「セミナー」でも、「尊い学びの場」として取り組む努力が求められる。

第24回静岡県福祉文化研究セミナー「今、あなたの地域は何色ですか・・・」開催

参加者相互に、これまでの地域実践活動を振り返りながら、身近な地域で、いかに支え合いをすることが出来るか、具体的に語り合い、「共助社会の再構築」に向けて、「今、あなたの地域は何色ですか・・・」そして「どのような色にすることが出来ますか」、アイデアを出し合いながら、私にとって「ご近所福祉とは」を学び合う。本会の福祉文化実践活動のプロセスから浮き彫りになった「協働」と「融合」を参加者と共に議論。

- *開催日時 令和7年11月29日(土) 13:30~15:30
- *開催会場 静岡市清水区追分3-5-17「寄ってっ亭」(電話 054-367-2878) 2025
- *プログラム 13:30 開会セレモニー
- 13:50 基調報告 「融合と協働を探る」
- 14:50 休憩
- 15:00 円卓トーク 「私の地域を何色に変えられるか」
- 15:30 閉会セレモニー

基調報告

地域福祉の推進と福祉文化の創造を目指して
高知県から静岡県に引き継がれた第13回学会大会

報告 平田 厚

2003年1月、第13回日本福祉文化学会大会は、福祉主権と福祉文化をテーマに高知県で開催された。中山間地域の高齢者福祉を地域の実情に即し、生き圏に根ざしながら展開するのみで展開している「福祉文化活動」が、数多く紹介されたことと印象に残っている。この高知大会を受けて、昨年11月30日、12月1日に、静岡県内外から500名もの参加者により、第13回大会が開催された。この大会の運営理念について、基調報告という形で以下に報告する。

学芸大会開催地
静岡市「遠征の経緯は？」

大会開催地となった静岡市は、富士山麓の大会テーマにふさわしく、偉大な富士山のもと、自然環境に恵まれた地域である。静岡県の東部に位置し、古くから歴史もある一方で、様々な企業誘致がすすむ新旧混在の地である。福祉教育の推進にも積極的に関わり、福祉と医療の融合し合う福祉コミュニティづくりに着眼的に取り組んでいるところでもある。

静岡県では、かつて「静岡福祉文化を考へる会」が中心となって、西側、中部で大きなイベントを開催したことがあるが、このたび大会を東部にある静岡市で行うこと、東部地域における福祉文化の普及と発展

を自指すると、開催を決定した。

学会大会高知までの取り組み

昭和女子大学で開催された第10回東京大会の際に、本部事務局より、静岡での大会開催についての打診があった。ここから静岡大会までの道のりが始まった。その後、2000年に行われた京都大会の時に、正式に静岡大会の開催が決定、7年前に結成された「静岡福祉文化を考へる会」を中心に、大会開催への準備を始めることになった。

これまで「考へる会」では、学芸の基調で、「家守の園」(静岡市)、浜松市も園「浜松市」、ねむの木学園(掛川市)で、福祉文化現場セミナーを開催してきた。その成果を踏まえ、1年前に「実行委員会」を組織化し、実行委員会として関わ

り、これまで合計4回にわたる実行委員会を行い、協議を深めた。その際、開催地の社会福祉法人福祉会の福祉文化実践活動をもちに、学会大会の企画を具体化した。さらには静岡市の福祉行政をはじめ、教育委員会、社会福祉協議会の理解のもとに、前年度にフレ大会を開催。福祉文化の創造を深める様々な活動を行ってきた。

大会テーマと趣旨の決定

今回の大会のテーマは、実行委員会の話し合いをもとに、「富士山麓のちと暮らすによりそう福祉文化の創造と推進」が決定した。「真の地域福祉の時代」を想え、豊かに暮らしたい。福祉コミュニティづくりについて、専門家集団と市民集団が学び合う機会として、どのような企画



会場を埋め尽くした参加者。500名を超え、立ち見が出るほどであった。

が必要なのか? 静岡で大会を開催するにあたって、静岡ならではの特徴をどのように出していくのかなど、熱い議論をかわせた後、最終的には「リレー講演」「4つの課題別分科会」「地域福祉、福祉教育、自然・環境、福祉サービス」「自由研究発表」「アーケショップ」「総括シンポジウム」という枠組みを決定した。課題別には22の発表、そして自由研究発表には23の発表が集まった。

大会を盛り上げた「トクソン」

大会のもう一つの華、様々なワークショップは、今大会でも非常に充実しその位置づけを確かなものにした。

開会セレモニーで行われた「富士山麓」(福祉・高知中川原キーン利用者の皆さん)の発表発表は「テーマ・ワールド」(「明日があるさ」会場内の参加者は直前に合わせ、大会組となった。続いて行われた「福祉文化」は、知的障害者のセラピストとして、またリハビリや社会自立のトレーニングを通して大きな成果をあげてい

る。富士山「愛意」にまつわる神話や民間「自然をテーマに、力強い太鼓のリズムが響き渡った。福祉文化法人内の3つの保育園からは、年長の子どもたちによる「第九歌の歌」と「歌えパンパン」の大会公開。2日目休むに行われたアトラクションは作業所やクリニクに通う精神障害者の仲間たちが集まって結成した「やすのりバンド」の演奏。ピートルズナンパーを、フロアの参加者に向けて発表全体で一杯表現する姿は、甚だ佳事であった。

地域福祉の推進と福祉文化の創造に向けて

今、福祉は「地域福祉の時代」といわれている。しかし上からの福祉だけでは、どうしても画一的になりやすい。住民ひとりひとりが主体となった地域社会づくりこそが、今求められている。そうした活動の中において「福祉文化」は創造される。

最近では「地域福祉推進」の策定にあたり、その理念として「福祉文化の創造」が取り上げられるようになってきた。こうした潮流の時代だからこそ、真の意味での福祉文化の創造が求められている。静岡大会の準備を進めながら、「福祉文化」とは、人をつなぎ、地域をつなぐプロセスと実践なのだということを、強き志願した。

リリー講演報告

大会初日を飾る「リリー講演」では、外山軍平氏が、長くハルセン酒類者として生涯を送られてきた日々を語り、母合川カネが、この50年間という長期間にわたり、日本の福祉を作り上げたさまざまな歴史に連れ、そしてレナード・カレッジ氏が、勤王を信仰果した由緒を思いながら語り、その支那活動について紹介された。どれも、私たちがの心に深く響く内容であり、深い理解を授けられた。感謝した。

外山 軍平

「50年・福祉の流れを想ふ」

私が以前作った詩の中に「復活に賭けし病む日、花は実」という俳句が出てくる。この中でなぜ俳句である「賭ける」ということは有利したのか。戦後、野留軍によって強制労働された私は、「人生どこのように生きようよいか」「私」という一語の人間がなぜ社会の中で生きていけないのか「自分なりに考えていた。そんな時につくったのがこの俳句である。「復活を信ずる」ではなく「復活に賭ける」という表現になったのは、「賭ける」ということでは、「やるだけのこと」はやった、あとは

お任せ」というスリルに満ちたものにたかったからである。

世の中では「偶然」ということはと片づけられているつじつまの合わないことがいっぱいある。特に親子関係の中では、それが多い。私の体験でも、昭和10年、母親が重病にできたとき、あるいは父が危篤になったときなど、合理的には説明できない「偶然」の出来事がいくつもある。でもそれは単なる「偶然」ではなく、梅棹がちゃんと取りはからってくださったことなのである。

私がどれだけ人様のためになるのか、よくわからないが、少なくとも文芸に生かすことが、自分の人生なんだとは、考えられるようになった。だから私はそれにも対して、子ども自身が興味のあることを、どんなやらせるべきなのである。人生は「学歴」ではない。「学力」である。そして私にとっての「学力」とは、文章なのだ。さうし力を伸ばすことが福祉であり、福祉文化だと思っている。

長谷川 力

日本の社会保険制度は昭和25年から始まったといわれている。この間、50年の福祉の流れを思い起こしてみると、本当に最近の福祉が大きな変化の時代になったと実



リリー講演「50年・福祉の流れを想ふ」の影絵「30年・福祉の流れを想ふ」

感じている。その福祉に対して、自分がどのように関わってきたのかについて、述べてみたい。私は浜松生まれ、浜松育ち、昭和23年、日本社会事業専門学校に基んで、最初に教えられたことは、福祉は慈善ではないということだった。これは福祉は人間の権利を守ること、法と理念のもとに福祉をやらなくてはいけないということである。

しかし50年たつて思うことは、人間の持つ慈悲の心を、いかに制度にしていくかということの難しさである。

聖隷福祉事業団での仕事を振り返ってみると、制度のないものでも、必要があれば何でもやってきた。無茶もしてきた。たとえばベトナム戦争の難民保護もそうである。制度も法律もない。政府の支援もなかった。しかし自分たちの意志と努力で支援を続けた。またホスピスを立ち上げるときもそうだった。ホスピスとは施設ではなく、活

動、一タチイビテイである。予算や制度も大切だが、時代が必要としている新しいことにすぐ目を向けていくことの方がもっと大切なのである。そしてそういう時に常に考えていたのが、人間の尊厳とは何かということ。人間はお互いに助け合える唯一の生き物である。人間だけが生きている価値を把握することができる生き物である。福祉文化を追求し、それを地域で語ることで、人間の尊厳が守られ、永久の平和が創り出されるのではないだろうか。

レナード・カレッジ

「カレッジの会代表 アフガニスタンの現状とカレッジの会の活動」

アフガニスタンは中央アジアに位置している。文明の三叉路にあるといってもいい。インドで発達した仏教は、アフガニスタンでパーミヤンの仏像になり、日本にも伝わっていくことになる。またアフガニスタンは自然豊かな国でもあった。歴史も古く、文化も自然も豊かなことアフガニスタンは、旧ソ連やアメリカによる代理戦争によって、大きな被害を受けた。そして戦争が終わっても、その影響は50年以上にわたって民族の中に陰を落とすことになる。たと

えば今でも新しく生まれる子どもの10人に2人は、病氣や栄養失調で死んでいく。農業をやるうにも地雷のために、安心してできない。

こういう国があることを豊かな日本に住む人々にも知ってもらいたい。私もアフガニスタンから日本に帰ってくると残飯の山にどても心が痛むが、それより日本のある子どもにも「あの残飯はもったいないよね」と聞いたら、「別にいいや」と聞きます。肥料に使いますから」と答えたのはびっくりした。その心のゆがみの方が、とても心配である。

福祉とは、自分でできることを、何気なくすることが大切だと思っている。私たちのNGOカレッジの会は、アフガニスタンにある地下水路（カレッジ）のように、表に出ずに、でも心だけでも出向いていて、アフガニスタンに見合った援助をすることを目標にしている。私自身、10月までに16000人の患者を治療することができた。また復興を考える上では教育も重要である。医療と教育、この2つを中心としたアフガニスタンに合った草の根の援助を、今後も続けていきたいと思っている。

（静岡福祉文化を考へる会）

課題別分科会 地域福祉と福祉文化

小野寺 一雄

目まぐるしい時代の流れのなかで、地域コミュニティの人々は、その地域でどの様に助け合いの機能を構築しつつあるのか、自治体の町づくり、町興しとどの様に運動しつつあるのか、大きな期待と関心を持って参加した。

最初に愛鷹地区社協、鈴木敏久氏から地域福祉活動と地域づくりの実践についての発表があった。平成元年の地区社協の発足以来の社協活動の反省から、自治会単位で向こう三軒両隣の精神で子供からお年寄りまでの楽しい自治会活動として、地域コミュニティづくりを行った。その結果として成功した要因は、良いリーダーに恵まれ、その主導で推進したこと、参加メンバーの多様化と自治会との連携のため行政と積極的に関わったことなどである。

第二の発表は、立命館大学大学院、森本英章氏からの精神障害者の社会的統合についてであった。それは精神障害者に対する法整備が進んだのにも拘わらず、社会的受容が依然として困難なのは、何に起因するのか。我が国の精神病院は経営効率を優先

する傾向があり、それが独特の精神病院文化を形成しており、それが精神障害者の社会的統合を困難にしている。精神疾患の治療には文化的視点からの対応が必要とされている。そこで医療一色構造物の病院制度から市民的開放性を主体とした社会復帰施設などに変革したい。そのプロセスを含めて福祉文化的統合としたいという提言であった。

第三に、岐阜経済大学、増山道康氏から市町村合併による福祉事務所、社会福祉協議会への影響について、アンケートなどにより実証的に調査した。その結果の報告で、財政効率優先の合併推進のなかで、一歩遅れがちな福祉行政の問題点が指摘された。さらに社会福祉協議会の現状と問題点、今後のあり方について的確な発表があった。

第四の富士川社協、佐野廣氏の発表は、まさに「草の根」の地域福祉の実践であった。最初の鈴木敏久氏の報告とも共通するが、さらに小規模な集落における福祉活動として、専任の福祉委員と福祉協力委員を置いて、自主的に地域の特性を生かし、福祉を核にして「地域おこし、

まちおこし」を進めるというものであった。

第五に、静岡福祉文化を考える会の家本豊氏の発表で、市民サイドからの福祉文化活動への参加の経緯を述べ、さらに参加者の拡大を図るため、地域社会の原点である家庭に着目して、テーマを設け一般市民を対象にしたシンポジウム、セミナーなどを行い、地域に話題と行動を提供し、自発的福祉活動を促す機会を設けたというユニークな内容であった。

最後の発表は、地域における障害者のスポーツ活動について、仙台大学の富田敬子氏から、教育機関である大学が、地域福祉に参画し実践した活動の報告である。これは在宅の障害者を対象にスポーツクラブを立ち上げ、アスリート養成もすることながら、仲間と共に過二十地域社会参加活動として位置づけしたこと、その経過と課題について明瞭に論じられた。

以上六件の発表があり、三件の地域福祉活動の発表者はいずれもリタイア後、地域のリーダー、世話役として経験を生かし活躍されており、人材活用として理想の姿であろう。

三件は、地域福祉の現状を、研究者、教育者の立場から分析把握し、実践した問題について

貴重な提言であった。

大会初日の長谷川力氏の講演で「在宅福祉の実質はより小さな単位での連携協力が必要と思う。地区社協の活動の必要性が言われているが、指導者が少ないことを痛感する」と結んでいたが、この分科会での報告は、

課題別分科会 福祉教育と福祉文化

板倉 肇夫

課題別発表「福祉教育と福祉文化」には7人の発表があり、約30名の参加があった。

発表内容は大きく分けると2つの方向があったと思う。その一つは教育の場での福祉教育の課題である。現在福祉の仕事は多くの人が関心を持ち学んでいる。しかしこれから「福祉を担う人」を教育するために今様々な課題が出てきている。「福祉学生における高齢社会意識について」(菊川氏)は将来福祉を担う福祉系学生が、現在の高齢社会をどうとらえているのかを調査により明らかにし、「レクリエーションインストラクター養成講座の現状と課題」(岡本氏)はレクインストラクター教育について、障害者の冒険(ヨットレース)をサポートする実践をふまえた今後のあり方が報告された。

この問題解決の様々な方策を示している。

広範な分野の貴重な報告の聞き取りのみに追われ、質疑に時間を割かず残念だったが、この分科会で福祉文化具現への道筋を把握できるものがあったのではないかと考えている。

「静岡県福祉教育推進ネットワーク」(小園氏)から静岡県における福祉系教育機関がネットワークし教育の質向上を図る実践報告がなされた。これらの発表は今後の福祉系教育機関における問題解決の糸口となるのではないかと。

また「障害のある子どもの保育と福祉教育」(小園氏)の発表は保育所の現状と大きな課題となつている障害児保育を結びつけ、行政の課題・保護者の意識の問題を発表され、保育所における福祉教育の方向性と障害児保育のあり方が示された。

「総合的な学習」福祉の心で生きる力を「二本氏」は学校教育における総合学習の時間での福祉教育の問題点をあげ、今後のあり方の一つを提示された。これらの発表は教育現場の中でこれから福祉文化活動を進める

一つの考え方がたろう。

もう一つの「福祉教育」は地域の中での「福祉理解をすすめる」ためのものである。「富士川町社協における小地域発の福祉教育（渡辺氏）」では地域主体の福祉教育実践が報告され地域の役割と同時に、社協の関わりについて報告された。「福祉教育と総合学習（岡矢氏）」ではPTA活動と福祉教育を結びつけ、また地区公民館活動での実践が報告された。

「福祉教育と福祉文化」の分科会では「福祉の担い手育成」と「地域の福祉力向上」の2つの視点から問題提起され、意見交換された。しかしどちらも「人」を育てるという本来の目的は同じである。福祉文化を考える時一番の課題は「人」であ

**課題別分科会
自然・環境と福祉文化**

本分科会の参加者は報告者及び司会を含めて全部で11名。まことにコンパクトなセッションではあったが、中身はきわめて濃くまた深いものであった。

第一報告の岡本康哉（種ヶ谷沼を考える会）「ボランテティアとしての自然保護」は、絶滅危惧種のバフコウトンボなどのト

る。今地域の中で子どもから大人そして高齢者まで様々な問題が出てくる。しかしこれらの問題や課題に気づき考ええる人がいなければ何も解決しない。学校教育の場で、地域の中で、福祉を理解する人作りが必要である。またこれからの福祉専門職も、一人一人がより感性を高める必要がある。そのために様々な場面で適切な福祉教育が提供されなければならないだろう。

「人」が育てば福祉文化は向上し、地域はより豊かになる。そして地域の中で「それぞれがその人らしい生活」をおくることとができる。この分科会に参加し、福祉文化と福祉教育がこれからの私たちの大きな課題であると感じた。

（静岡福祉文化を考える会）

安藤 聡彦

トンボを守るために、中学生たちとトンボ池をつくり自然復元をめぐらした記録。教師として岡本氏がこの実践に取り組んだのは、校内暴力の嵐が吹き荒れ、「子どもたちに思いやりを育てたい」と考えたからだという。氏自身が種ヶ谷沼の畔で生まれ育ち、「ヒトとしての育ち」に

とつて自然との出会いやかかわりが不可欠であるということこそ肌身で感じておられたことが、その判断の基礎にあった。自然を愛おしむことが人に対する思いやりにつながり、思いやりこそが人間の共同性を支えるものとなる。岡本氏は、「自然」や「他者」から切離された子どもたちにそれらを獲得させる仕事を通して、エコロジカルでコミユナルな社会のあり方を模索している。

第二報告・小松幸子（特定非営利活動法人グラウンドワーク三島）「グローバルな出会いのガイド」は、岡本報告以上に「人と人との出会い」を意識した取り組みの報告。三島市内で報告者らによって営まれている「沢地グロウバルガーデン」では、約300坪の休耕地を借用し、9年あまりにわたって幼児から学生、高齢者、外国人、障害を有する人々など、実に多様な人々が自然観察やガイドニングに携わってきた。

「右手にスコップ、左手に缶ビール」という合い言葉は何とも魅力的ではないか。1980年代にイギリスで始まったとされるグラウンドワークの運動は、「住民アクション」「パートナーシップ」「環境創造」を活動の原因にしているというが、

このコミュニティ・ガーデンづくりはまさにそうした精神の結晶と言いうるだろう。

第三報告は、仁藤波（富士山自然の森づくりの会）「私たちが自然の森づくり」。

前おふたりの報告が日常生活空間に目を向けていたのに対し、仁藤氏らの報告はいまや60%が人工林で覆われているという富士山に100年かけて自然林を再生していこうとする壮大な取り組みに関するものであった。「富士山固有の遺伝子を守り、潜在植生を尊重し、自然種のみを植栽する」とする仁藤氏は、「富士山に芽生えた自然種を大切に、大きく育つまで、少しお手伝いする気持ちで取り組んでいます」とされる。

**課題別分科会
福祉サービスと福祉文化**

課題別分科会第4「福祉サービスと福祉文化」では、学識者、実務家、ボランテティア、大学院生など8人の報告があった。いずれも新しい福祉のあり方を模索しながらこれからの福祉を創り出そうとする意欲的な発表であった。

ここで、簡単に各発表の概要を紹介しよう。まず、第1報告

自然再生という取り組みの射程の長さとそのにおける人間の力の大きさや小ささを参加者に深く印象づける報告であった。

以上3本の報告のなかに「福祉」という言葉はほとんど出てこなかった。だが、にもかかわらず、それらは共通に自然と人間とのかかわりの幅み直しを、人と人とのかわりの幅み直しとともに進めることによって、人間の *well-being* の今日的な見定め方を問いかけていているという点で、根源において福祉文化的な問題提起であったのではないだろうか。今後とも「自然・環境と福祉文化」というテーマが学会内で継続的に検討され、豊かな福祉文化のあり方についての考察がすすめられていくことを願いたい。

（埼玉大学）

萩原 清子

「障害者の移動支援相談の方法」（長瀬晃二）では、東京・東村山市社協の10年にわたる障害者・高齢者に対する「外出・旅行相談事業」（日常外出・内外旅行・観光等）の実践が報告された。これら既存サービス外の相談事業が成立する背景には、優秀な人材の配置があるということである。第2報告「介護保

障制度を利用した住宅改修に関する事例検討」(佐々木隆夫)は、介護保険を利用して住宅改修を行う場合の事例を、3施工業者の見積書を比較検討しながら、利用者の権利を代弁できる人材育成が急務と結論づけているが、重要な指摘である。第3報告「地域発ダイサービス「ひまわりの家」(西谷祐一)は、制度化によるサービスと制度化できない、制度化しない方がよいサービスを区別し、後者の領域に対する福祉思想と福祉方法を地域の文化として具体的な形にしようとする実践活動の報告であり、学ぶべきものは多い。

シンポジウム
総括
版野 貞

各シンポジウムの報告の中で、例えば次のような言葉が印象に残っている。
小野寺報告では「住民一人ひとりの、小地域における草の根の福祉文化活動が重要である」、板倉報告では「地域に根ざした福祉教育の展開が求められる

第4報告「地域福祉権利擁護事業を通して利用者の福祉文化面の支援を考える」(渡邊豊)では、報告者が地域福祉権利擁護事業に関わって初めて、地域住民がどこに相談を持ち込んだらいいのかわからないという実態に遭遇した、という。社協マンの視点のみならず住民の視点からも社協を見直す必要を提起した報告である。第5報告「地方都市における介護保険制度の利用状況と課題」(後藤久代)は、介護は家族・縁が着るのは当たり前という風土の強い地方都市において、介護の社会化としての介護保険という異質のシステム

が、その実践において子どもたちを育てるのは、サービス利用者である。安藤報告では「福祉とは人々が暮らす上での様々な「関わり」(例えば、人と自然・環境、個人と制度など)の豊かさを表す言葉であり、その豊かさの中に福祉文化が創造される」。板倉報告では「福祉文化とは今の「思い」とあるべき「思い」を形にしていくなみの中に創られる」である。
こうした報告を受けて、私なりに福祉文化に関して以下のよう

ムが導入された場合、どのように人びとに浸透するのかわからずかにするため、大都市東京と同じアンケート調査を使って比較検討した結果の報告である。結果は、地域差、世帯の違いが現れたものとなった。第6報告「福祉サービスの向上を目的とする職場研修に関する考察」(阿部正昭)は、「組織性」と「専門性」の視点から職員階層ごとに分析した結果、福祉の専門性とは何かを具体的にイメージし、実践活動に生かす切れないない実態が浮き彫りになった。現場職員にとって大きな課題である。第7報告「福祉は

るためには、サービス利用者の「いのち」と「暮らし」と「このころ」に向き合い、寄り添うことが肝要となる。そのためにはまず、サービス提供者自身が、自分の「いのち」と「暮らし」と「このころ」に向き合うことが、必要かつ重要となる。
福祉サービスの提供に際して、利用者と提供者の主體的で共働的かつ創造的な緊張関係の中にこそ、新しい福祉文化の創造が期待されるのではないか。

(上) 総括シンポジウム
(下) 質疑応答時の様子



文化」と定義に刻む」(藤本豊久)は、全国的にも有名な「あしや喜楽苑」の実践活動を阪神・淡路大震災との関係で「つなぐ」(連携)というコンセプトによって説明し、さらに、あしや喜楽苑の理念に触れ、具体的な事業活動と運営内容をパワーポイントによって具体的に映像によって丁寧に説明された。第8報告「精神保健福祉ボランティア(平岡良江)は、精神保健福祉ボランティアを通じて見えたものは「自分が変わる」という経験だったという。その結果、一人でも多くの地域住民の理解者・協

力者の存在が精神障害者の自立と社会参加に結びつき、その橋渡し役こそボランティアに求められるのだと結論づける。
以上、舌足らずの紹介になっってしまったが、福祉文化学会の発表には他の学会では得られない「現実を変える」実践理論が豊富に含まれているため、「自分を変え」「地域を変え」「社会を変え」そして「福祉を変える」転機機が各報告に隠されていることを改めて実感した。そして、その「変化」を促すキーワードは「利用者から学ぶ」の一言である。

(関東学院大学)



2日目ワークショップ「遊びと福祉文化」

学会大会として新しい試みであるワークショップというスタイルでの分科会が、「遊びと福祉文化」をテーマに開かれた。企画、担当は、学会副会長の藤田氏と和久田が補佐させていた。学会委員の他に、地元福祉現場職員や大学生、静岡県おもちゃ図書館の集い参加者等約60名が参加した。

ワークショップ
「遊びと福祉文化」報告
「対話のなかで遊びとホスピタリティを学ぶ」

和久田佳代

カード・インタビュウ

9時30分の開始を待たずして、会場に到着した人から、「カード・インタビュウ」がはじまった。入口で一人に一枚ずつわたされたカードに基づき、近くの人にインタビュウしていく。「できるだけ多くの人と親しく挨拶をし、どこから来たのか聞き出してください」「できるだけ多くの人にあなたを歓迎しますという思いを伝え、その人が持っている特技や能力について尋ねてください」などカードの内容は様々だ。これらのインタビュウをした上で、8人程度のグループをつくり、それぞれが聞いた内容をお互いに共有していった。

遊びとは

グループでの共有ができたところで、藤田氏と和久田との対話をきっかけにして、「遊びやレクリエーションは必要か」「どのような援助がよいのか」について、グループ討論。自分の考えを述べたり、助言をもらったり、他の参加者の意見に共感したりするなかで、参加者一人ひとりがそれぞれの考えを深める時間となった。さらに、参

加者と藤田氏との対話を通して、遊びの必要性を確認し、その方法として、生活そのものを快いものにしていくことや高齢者や障害者にあわせた援助の方法を開発、蓄積していくことが必要であることが示された。

ホスピタリティ

休憩時間をはさんで、ストレッチング、握手での意思疎通、2人組・4人組でのバランスなどで、心と身体をほぐしていった。そして、新しい8〜9人程度のグループで、ローテーション対話を行った。2列に並んでイスに座り、膝をつけ合って対話をする。テーマは「自分の好きなこと」「苦手なもの」「相手をほめる」等である。テーマごとにローテーションし、相手を変えていく。この対話で、言葉なしに目や表情で相手に言いたいことが伝わるか、相手の言いつ分をきちんと受け止めることができるのかを参加者同士で確認し合い、感じていった。

対話を通して

あつという間に、3時間にもわたるワークショップの時間が過ぎていった。「遊びの原点はコミュニケーション。その中で相

手をもてなす心（ホスピタリティ）が大切」であることが実感できる楽しい時間であった。ワークショップとは、答えがあらかじめ用意されていない共に前向きに遊ぶこと。参加者一人ひとりが様々な対話の中で生まれたものを、それぞれに持ち帰ることができたのではないかと。私自身、遊びも援助も関係の間に生まれるものであることを実感し、多くの学びを得ることができた。

「静岡大会参加者の感想」

ワークショップ「遊びと福祉文化」に参加して
黒須美代子

富士山のシルエットを乗り継ぎの電車やホームから眺めながら、裾野市についていたのは30日（土）19時頃、おもしろも大会1日目の懇親会の真っ最中だろうと思いつつ、1人、ホテルで安里和子理事の帰りを待つ。そして、1日目のプログラムの内容を聞かせて貰った。翌朝は、雨の降ったり止んだりの中、第8分科会のワークシ

ョップに参加した。老若男女、地元静岡の方々を含め、ホールですぐに交流は始まった。それは、カードに設定された役割が各自に課されており対面の相手との出会いを次々と広げていくものであった。つづいてカードの形でグループ分けされ、おもちゃ図書館の方、社協の方、作業所の方々と共に討論に入り、人生にとつて、生活にとつて遊びを捉えなおすきっかけになり、私自身にとつて充実した課題を得られた時間となった。

静岡大会の収穫

山口利勝

3回目の参加ですが、今回は富士山の雄大さが適度である裾野市での開催であったということ。および中途失業者である私に初めて要約筆記をつけていただいたということ、非常に思い出に残る大会となりました。実行委員会のご厚意により、4名もの要約筆記者を手配して



(上) 大会準備作業。富田会の方々にお手伝いいただく
(下) ホールを飾った掲示の数々、絵画療法の結果

いただいたお除でリレー講演等を堪能することができ、それまでの大会にはない感覚、つまり私はいまここにおいて他の参加者とともに生きていくのだという共生感を味わうことができた(前回の高知大会の時には、私のために手話通訳が手配されていたのですが、中途失聴者で手話があまり理解できないために、せっかくなの厚意が無駄になりました。参考までに申し上げておきますと、聴覚障害者のうち手話のできる人は14%程度(欧米並みの基準で捉えると0.8%)に過ぎません)。

リレー講演では外山氏とカレット氏の講演が印象に残りました。外山氏は苦難の人生を堅忍不抜の信仰心とともに語られました。度重なる不思議な偶然の一致に関する清冽なお話は、ユング心理学の視点から理解できるように感じました。一方、カレット氏の講演は、マスメディアの偏向した報道並びに日本人が飽食と平和ボケの中にいることに対する警告のようにも受けとれました。

最後に2日目の分科会の発表に言及しておきますと、質問時間が少ないように感じました。今後は発表テーマに関心のある人が発表者と1対1で十分に討論できる、ポスター形式の発表もあればよいのではないかと思います。

(第一福祉大学)

2003.2.4 No.44

日本福祉文化学会事務局

〒171-0014 東京都豊島区
池袋3-26-13

TEL&FAX 03(5950)3308
ホームページアドレス
<http://www.fukushibunka.gr.jp/>
メールアドレス
jmukyoku@fukushibunka.gr.jp

(編集委員) 池田理恵 馬場 清
木村たき子 多田千尋 厚美 薫

福祉文化通信

昨年11月30日(土)、12月1日(日)の2日間、富士山を前に望む静岡県裾野市において、第13回日本福祉文化学会大会が行われた。今回のテーマは「富士山麓のちと暮らしによりそう福祉文化の創造と推進」であり、県内外からのべ600名もの参加者を得て、盛大のうちに会幕を閉じた。

1日目は高橋太鼓、保育歴史による歡喜の歌などのアトラクションが行われる中、本大会事務局の平田厚氏による基調報告が行われた。続いてのリレー講演では、神山復生病院の外山富士雄氏による「復活」花は実には、「聖隷福祉事業団顧問の長谷川力氏による「50年・福祉の流れを思い」N.G.Oカレッジの会理事長のレシャード・カレット氏による「アファガニスタンの現状とカレッジの会の活動」の3本の講演がなされた。

2日目は、午前中には4つの課題別分科会、自由研究発表、そしてワークショップ「遊びと福祉文化」が行われ、「やすのりバンド」のアトラクションをはじめ、午後に総括シンポジウムとして、課題別分科会の報告が、各分科会のコーディネーターによって行われた。参加人数もさることながら、内容的にも盛りだくさんの、充実した大会となった。以下にその概要を報告する。

【第4章】 静岡県委託事業

「一人でも安心して暮らせる地域づくり事業」7年間

1 全国的に大きな社会問題となっていた「高齢者の孤立・孤独」を防ぐには

「結婚ってなに?」「共働きってなに?」「地域ってなに?」・・・と、本会結成の平成8年から平成18年頃までの約10年間は、若者層中心に90名程の会員活動は、子ども・若者・大人対象の活動テーマを多く掲げ、福祉文化実践活動が展開されていた。

本会結成当時、「高齢化社会」（人口の7%を超えた社会）から、「高齢社会」（人口の14%を超えた社会）を迎えたといわれ、高齢者を取り巻く様々な課題を各方面から提起されていた。

既に、今日では「超高齢社会」（人口の21%を超えた社会）の現状にあり、「地域包括ケアシステム」により、可能な限り、住み慣れた地域で生活し、自分らしい暮らしを人生の最期まで続けることができるように、地域の包括的な支援やサービス提供体制の構築が推進されている。

これまで、高齢者を取り巻く社会問題を全国的な資料から振り返ると、平成13年に、千葉県松戸市常盤平団地で、死後3年たった独居高齢者の発見、平成18年には神奈川県横浜市市営団地で、独居高齢者宅を生活援助員が訪問して、死後5日後に発見等、都市部において、集合住宅等で、独居高齢者の孤立死・孤独死が相次いで明らかになった。

また、大規模震災後の災害復興仮設住宅における孤独死が相次いだ。

こうした、都市部を中心に、地域から孤立した単身高齢者の死亡や孤独死が多発している等、全国的に社会問題化している状況が浮き彫りになっていた。

平成19年度に、国は、特定の事業を念頭とせず、高齢者を地域から孤立させないために、様々な創意工夫をして、調査研究事業、体制整備（地域での支援体制）、普及啓発（広報活動・講演会）、活動支援（NPOや自治会活動など、地域でのコミュニティ活動への支援）等に取り組む「孤立死ゼロモデル事業」を打ち出した。

静岡県においては、「孤立死」「孤独死」の発生を防止し、高齢者等が一人でも安心して暮らしていけるよう、様々な取り組みを通じた地域づくりを図る目的で、「一人でも安心して暮らせる地域づくり事業」に取り組むことになり、既に、平成19年度において、

区 分	実 施 内 容	備 考
実務者連絡会	関係機関相互の情報交換・実態把握 普及啓発	学識経験者 民児協 県社協 関係機関(5箇所)
先進地視察	県外 千葉県流山市(一戸建団地) 千葉県松戸市(集合住宅) 県内 静岡県富士川町	学識経験者 民児協 県社協 関係機関
講演会	事例発表 千葉県松戸市常盤平団地自治会長様 講演 明治学院大学 川合克義 様	市町職員 民生委員 施設職員 地域包括支援センター職員 市町社協職員 163名

以上の事業を静岡県域で取り組むとともに、平成20年度に、各市町や各種団体に対して「モデル事業」の具体的な取り組みを働きかけていた。

静岡県より、本会にも「モデル事業」の取り組みについての打診があった。

本会の委員会において、慎重に協議を重ね、本会の活動目的に沿って、3つの活動基調と3つの柱立ての福祉文化実践活動を前提として、県当局に「モデル事業」を受託する旨を連絡し、その後、県当局から、きめ細かな指導をしていただき「単年度委託事業」として取り組むことになった。

これまで、本会の活動は、特に、高齢者を特化した活動に取り組んでいなかったため、このたびの「モデル事業」の取り組みにより、様々な領域から、「高齢者と福祉文化」を検証できる活動になるとともに、県内各方面に「静岡発 福祉文化の創造」をさらに発信できると認識した。

本会が打ち出した「モデル事業：一人でも安心して暮らせる地域づくり事業」（県委託事業）は、下記のように、大きく、6つの活動項目をもとに「事業計画」を作成し静岡県に提出した。

- (1) 県民とともに「長寿者」を学習テーマにした「公開型研修会」を2回開催する。
- (2) 調査研究活動として
 - ① 「高齢社会と福祉情報に関する意識調査」
 - ② 「長寿者の生きがいその意識と実態調査」
 - ③ 地域住民対象の懇談会からの意見集約
- (3) 小地域福祉活動の実践的取り組み(概ね、県内4実践市町指定)
- (4) 事業実施報告会の開催
- (5) 関係者連絡会の開催
- (6) 事業報告書の作成

2 「静岡県委託事業」は、福祉文化実践をもとに展開

平成20年度に入り、県当局との3か月にわたる協議を重ね、7月下旬に、正式に委託事業の決定をいただき、ようやく下記の「事業計画」に基づき事業を展開することになった。

実質、9か月間の委託事業の展開は、関係機関・団体、地域実践者等とは、走りながらの取り組みであり、本会の定例委員会以外に、協議の場を再三持ち、なんとか、事業成果につながるように、日常的な連絡調整を重ねながら取り組んだ。

本会では、この委託事業においては、これまで、長年にわたり身近な地域社会において、地域づくりに貢献されてこられた「高齢者」を「長寿者」と表現することにした。

平成20年度 静岡県委託事業「一人でも安心して暮らせる地域づくり事業」実施計画 (長寿者等の孤立死・孤独死ゼロ対策モデル事業)

1. 事業目的

今日、地域社会の福祉ニーズは、複雑かつ多様化しつつある。とりわけ長寿者を取り巻く地域環境は一変し、深刻さを増す状況にある。

長寿者は、健康であっても、家庭や家族との人間関係が複雑化し、地域社会における生活

も、近隣の人たちとのつながりが希薄になりつつある。

「改正介護保険制度」導入とともに、身近な地域社会からの意見や、「後期高齢者」を取り巻く医療制度にあっては、更なる不安を感じるようにも伺える。

本会では、こうした地域環境で生活されている長寿者を取り巻く様々な課題を「長寿者と福祉文化」の視点から、県民対象に「長寿者の生きがいその意識と実態/長寿者と福祉情報」の各調査研究や、長寿者から、直接意見を聞きながら、世代間をつなぐ地域づくりについて意見交換をし、学び合う「公開型研修会」の開催、そして、小地域福祉活動における、長寿者と共に、安心して暮らす地域づくりに取り組む「地域住民の実践活動を学ぶワークショップ」等の事業に取り組み、「一人でも安心して暮らせる地域づくり」(長寿者等の孤立死孤独死ゼロ対策)を検証する。

2. 主な活動内容

(1) 県民と共に、「長寿者」を学習テーマに「公開型研修会」の開催(2回)

*第1回 「ホッとするたまり場、ここが一番居心地がいい！」

- ・平成20年11月22日(日) 静岡市清水区追分「寄ってっ亭」
- ・「現場小セミナー」として、「介護ホーム」を会場に、利用者と援助者、そして地域の支え合いにより、ホッとする居場所づくりの取り組みを学ぶ。

*第2回 「ご近所福祉 2008IN 沼津」

- ・平成21年1月24日(日) 沼津市日の出町「サンウェルぬまづ」
 - ・長寿者と共に、住民相互に、生きる喜び、創る喜び、共生する喜びを、住み慣れた地域社会で実践してこそ、「真の地域コミュニティ」。
- 今日的な社会問題を世代を超えて学び合う。

(2) 調査研究活動

①「高齢社会と福祉情報に関する意識調査」の実施

- ・長寿者が、地域で孤立することなく生活するためには、どのような福祉情報が必要かを県内の地域を指定して調査を実施し、その結果を今後の地域づくりに役立てる目的に実施する。

②「長寿者の生きがいその意識と実態調査」の実施

- ・10代以上の県民対象に、長寿者を取り巻く社会環境について調査を実施する。

③地域住民対象の「懇談会」の意見集約

(3) 小地域福祉活動における実践活動

*県内の4地区の市町からモデル実践活動の把握

①富士川町(全町)の取り組み

平成3年度以降、町内に地域福祉推進のための8支部の組織化を図り、福祉委員や地区の諸団体中心に地域福祉活動に取り組んでいる。「小地域福祉セミナー」「地域福祉を考えたつどい」「地域福祉実践セミナー」と発展した取り組みをしている。この11月には、富士市と合併するこの時期に、「誰もが安心して暮らせる地域づくり事業」に取り組み、身近な地域の長寿者世帯の事例をもとに、どのようにして福祉課題を解決できるか、住民相互に

グループワークで議論し、それぞれの小地域の特性を活かして解決策を探る。

②沼津市大平地区の取り組み

当地区は、「地区センター」を拠点として、「コミュニティ推進組織」「自治会組織」「民協活動組織」の三層が有機的に機能し、地域組織化が図られている。

今年度は、「小地域福祉活動見守りネットワーク事業」を重点に取り組んでいる。

現在の活動との関連性を深め、孤立しがちな長寿者の支え合いについて、日常活動をとおして検証する。

③掛川市西山口地区の取り組み

平成 19 年度に「西山口地区福祉協議会」を結成した。

今年度の重点活動として「見守りネットワーク」を掲げている。

本事業を通じて、市部における、小地域福祉活動の取り組みの過程を検証し、今後の事業に役立てる。

④袋井市浅羽地区の取り組み

袋井市社会福祉協議会の「地域福祉活動計画」の策定をもとに、当地区では「地域福祉推進委員会」の組織化に取り組んでいる。住民自らの動きと共に、積極的な地域福祉の推進に本事業の見守り活動の重要性を取り上げ、地域活動につなげる。

(4) 事業実施報告会の開催

- ・平成 21 年 2 月 21 日（土） 13:00 ～ 16:30 静岡県総合社会福祉会館
- ・定員 100 名 参加費 無料

(5) 事業実施報告書の作成 A 4 119 頁 400 部

(6) 県委託事業関係者連絡会の開催 (2 回)

この実施計画を具体化するに当たり、本会では、次のような視点をもって取り組むことにした。

1. 「長寿者」が、いかにして、身近な地域で生活を維持できるか考える。

住み慣れた地域で、ずっと生活していくことを誰もが望み、努力をしている。

本事業に取り組むに当たり、問題解決を直接「地域社会」に向けることなく、長寿者自身がいかにして、地域社会の中で生活を維持することができるか、自ら、地域資源を把握できるようにする地域環境を整えることを働きかけていく。

「ホッとするサロンの開拓」や「ご近所のつきあい」、「世代を超えたふれあい交流」等、身近なことを、地域住民全体で取り組むことを提案する。

2. 本事業を「小地域福祉活動」として位置づけていく。

長寿者の多くは、加齢化とともに、身近な生活圏域で信頼関係を築き、安心した地域の暮らしが出来るように努力をしている。長寿者自身の自助努力の上に立って、生活圏域としての小地域福祉活動をどのように展開していくかの基盤を考える。

3. 福祉の数値をしっかりと読み取る。

平成の大合併により、静岡県は、74 市町から 35 市町と大きく変化する。

これまで、高齢化率40%の町が、合併により20%と隠れてしまう状況が生じる。

地域住民は、取り巻く社会の大きな変化に気づき、積極的に、数字では読めない新たな地域の福祉ニーズを共有し、いかに支え合う地域づくりが必要かを考える機会をもつ。

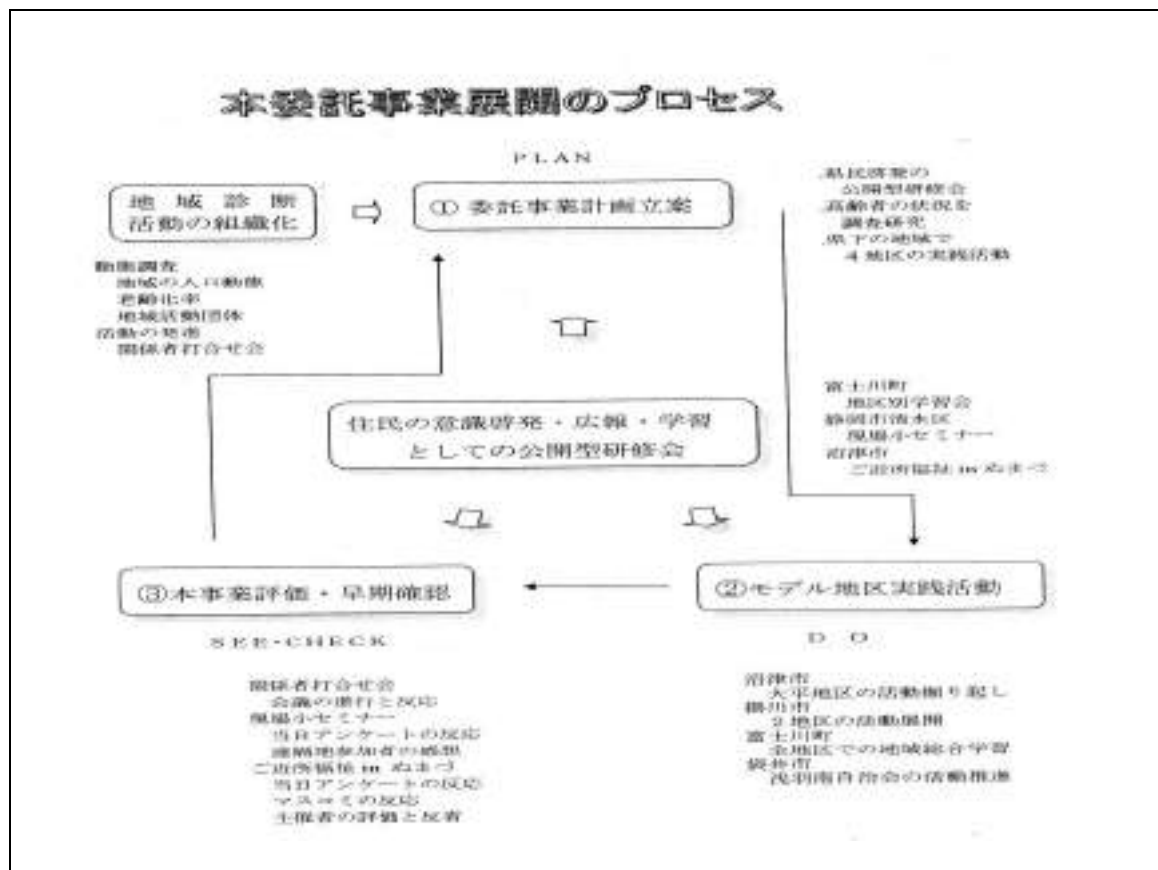
4. 「高齢者福祉」のイメージをどのように塗り替えられるかを地域ぐるみで考える。

これまで、長寿者が、地域社会や家族・家庭の中で果たしてきた役割は、時代と共に、多様化した福祉ニーズと共に、不透明になっていることも事実である。

この事業に取り組むにあたり、長寿者を家族・家庭、地域から孤立させない「共生社会の構築」を課題とする位置づけとした。

5. 本事業の展開を「PDCA」に置き換えると、「地域診断・地域ニーズ」、「地域組織化」のもと、さまざまな活動を「計画化」(plan)し、市民へは、「啓発活動」「地域総合型学習」を通じて「実践活動」(DO)につなげる。

- (1) 「啓発活動」「地域総合型学習」として、県民と共に「長寿者」を学習テーマにした「公開型研修会」(2回)を開催する。
- (2) 「地域診断」「地域ニーズの把握」として、「高齢社会と福祉情報に関する意識調査」「長寿社会の生きがいその意識と実態調査」「住民懇談会から、長寿者を学び合う意見集約」の実施。
- (3) 「計画化」については、「本事業計画」及び「各種活動計画」を確実に立案をする。
- (4) 「実践活動」については、「小地域福祉活動モデル指定事業」として、県内市町の各地区実践活動を検証する。
- (5) 「課題整理」については、「これからの長寿社会に向けた課題・提言」を行う。



本事業に取り組むにあたり、事業開始時（7月）と事業終了時（2月）に、静岡県当局をはじめ。県社会福祉協議会職員、実践モデル地区代表者及び市町行政または社会福祉協議会職員の出席のもと、「関係者連絡会」を開催し、事業の方向性を共有するとともに、実践活動の成果をもとに研究協議をし、その内容を広く県民に発信する努力をした。

また、静岡県主催「一人でも安心して暮らせる地域づくり事業講演会」（平成21年3月18日・静岡県看護協会研修会場 県内市町行政・社協・民生委員・福祉施設職員等100名参加）において、事業報告をした。



*事業実施期間中2回開催した「関係者連絡会」



*静岡県主催「事業関連講演会」で事業報告

長寿者を取り巻く、今日的な大きな課題をもとに取り組んだ「静岡県委託事業：一人でも安心して暮らせる地域づくり事業」であったが、県当局の指導の下、多くの関係機関・団体、地域実践者等のご支援をいただき、当初の事業計画に基づき、「単年度委託事業」を無事終ることができた。

当時の「平成20年度（県委託事業初年度）事業実施報告書」の「第5章 一人でも安心して暮らせる地域づくりの課題はなにか」に、次のように「課題・提言」としてまとめている。

***課題 1 長寿者自身の自助努力を期待する。**

各地区で「長寿者の自立」について大きく議論された。

地域社会が、長寿者をどのように支援できるかの前に、長寿者自身の生活から、より積極的に社会参加し、近隣社会との接点を維持することが大切である。こうした、長寿者の自助努力の上に立って、今日、複雑多様化した地域社会環境にあって、本人だけでは解決できないことを、地域社会が理解していくことが必要である。

***課題 2 それぞれの地域の特性を活かした地域環境の整備の取り組み。**

地域によっては、人々が寄り合う場所があり、自由に、気兼ねなくコミュニケーションが広がり、人々がふれあい交流できる環境をもっている。

地域住民が、話し合える、語り合える地域環境をどのように創り上げていくかの課題がある。「介護予防」の視点から、地域住民の生活圏域において、「ふれあいサロン」「居場所」等、地域住民が集まれるアイデアを出し合う。

***課題 3 長寿者を中心とした共生社会の仕組みを考える。**

これまでは、関係者による、または、専門領域だけで問題を解決する傾向があったが、これからは、地域住民すべての領域において、世代を超えて、長寿者問題に取り組む地

域環境により、地域をつなぐ意識改革が求められている。

それぞれの家庭・家族から、地域とのつながりをもつ環境づくりを心掛ける。

***課題 4** 地域の社会資源を有効に活用する。

本事業に「協働」「共創」をキーワードに取り上げている。

地域社会にある、さまざまな機関・団体・地域住民等が、それぞれ持ちうる機能や力を発揮し、長寿者を取り巻く地域課題に取り組む環境を創る。

***課題 5** 福祉情報の選択的情報提供できる仕組みを考える。

今や、情報が氾濫の時代を迎えている。IT化した時代においては、長寿者を取り巻く環境では、情報弱者となり、必要な情報が届かなくなっている。世代を超えて、地域情報を共有できる仕組みを考える。改めて、回覧板の持つ意味を考える。

***課題 6** 世代を超えた、地域総合型学習を考える。

単なる、一過性の学びでは、問題解決にはつながりにくい。住民主体で、地域を学び合う取り組みにより、長寿者の問題は、住民一人一人の課題でもあることを認識していく。地域が抱えている課題を浮き彫りにするために、地域ニーズ調査等を実施して、地域を知ること心掛ける。

***課題 7** 地域リーダーの存在と住民の協力体制を整える。

地域を取りまとめる「地域リーダー」の存在は大きい。こうした立場の人の負担を軽減していくためにも分担をしながら、住民の協力体制は欠かせない。

***課題 8** 住民主体とした、地域総合ケアシステムづくりをする。

***課題 9** 地域組織化と小地域福祉活動計画の策定努力。

各地域における活動は、単年度ごとに計画し実施されていることが多い。

福祉問題等単発な事業（活動）による問題解決は、役員が交代すると事業（活動）が見えなくなる。継続的事业（活動）計画の見える化で、地域住民と共に取り組む。

***課題 10** 個人情報保護の確立。

こうした活動で、地域住民一人一人が心掛けていかなければならないのは、「個人情報」をどこまで共有できるかを明確にしなければならない。

お答えします 高齢者賞問箱

平成21年(2009年)1月14日(水曜日) 表紙 頁55

隣人や友人とのネットワーク強化 独居老人の孤立死防ぐには

Q 県外の出来事でしたが、数年前に孤独死した男性が、昨年末になって発見されたという悲しい新聞記事がありました。都市部の集合住宅等における独居高齢者の孤立死がしばしば報道されますが、どのような状況にあるのでしょうか。

A 核家族化や高齢化の進行により今後、単身高齢者や高齢者夫婦のみの世帯の増加が予想されています。県内でも65歳以上の高齢者人口が84万人を超える中、ひとり暮らし高齢者約12万人に、高齢者夫婦のみ約22万人と高齢者のみで暮らしている人口を加えると35万人を超え、高齢者人口の約42%を占めています。

孤立死が増加している背景には、家族構成・人口、居住形態などの社会環境の変化や結婚観の変化による専断の増加などのほか、支援を望まない高齢単身者の増加などによる孤立した高齢者が増加していることなどが考えられます。

このように高齢者の孤立した生活が一般化する中、悲惨な孤立死を防止するためには、暮らしぶりをよく知っている隣人や友人とのネットワーク強化が有

効になります。

高齢者を含めた地域を構成するすべての人がさまざまなネットワークを通じてコミュニティを活性化していくことが重要であることから、県では、モデル地区での実践的な取り組みや高齢者の意識調査、普及啓発活動等の「1人でも安心して暮らせる地域づくり事業」を実施するなど、「孤立死ゼロ」に向けた取り組みを進めています。

(県長寿政策室)

3 「調査研究事業」「実践地区検証事業」「啓発事業」の3つの柱立てによる検証

平成20年度、単年度委託事業として取り組んだ「一人でも安心して暮らせる地域づくり事業」(長寿者等の孤立死・孤独死ゼロ対策モデル事業)は、その後、県当局から、引き続き「単年度事業」として継続の要請を受け事業に取り組んだ。本事業に関わっていただいた県内の市町実践モデル地区関係者(行政・社会福祉協議会・実践地区代表者)、県社会福祉協議会職員、県当局職員等の出席をいただき、毎年度各2回「関係者連絡会」を開催し、事業の円滑な取り組み及び状況報告と課題協議を深めた。結局、本事業は、通算7年間取り組むことになった。

そして、毎年度、県に事業成果を「実施報告書」(A4 100頁 200部発行)作成し、事業を報告するとともに、広く県民に、本事業から浮き彫りになった課題(考察)を発信した。

また、毎年度末に開催した「県主催・事業講演会」では、事業報告を通じて課題提起をした。

平成22年(2010年)4月20日(火曜日) 齊争 居京

高齢者支援の活動紹介

県「地域づくり事業」報告会



地域福祉の課題などを発表した「一人でも安心して暮らせる地域づくり事業」の報告会—静岡市駿河区の県庁議事堂

県は15日、高齢者の「孤立死ゼロ」を目的に2007年度から展開している「一人でも安心して暮らせる地域づくり事業」の報告会を静岡市駿河区の県庁議事堂で開いた。

10年度の活動テーマは「(1)近所の一人一人が助け合える地域づくり」。同事業を委託する「静岡福祉文化を考える会」の平田厚代表が「生活圏域における支え合いとは何か」と題して活動を紹介した。平田代表は「住

同市が地域社会や福祉文化について話し合う「啓発学習」「高齢者との交流や支え合いを把握するためのアンケート調査」「地域特性を生かしたモデル事業の展開」などの取り組みを発表した。

「(2)近所の再構築」をテーマに、出席者による意見交換も行われた。福祉施設職員や地域ボランティア、民生委員、老人クラブ会員らがそれぞれの立場から地域福祉の課題などを述べた。

平成23年(2011年)2月16日(水曜日)

齊争 居京

静岡福祉文化を考える会が全体会

「生活圏密着の活動を」

齊 居

「静岡福祉文化を考える会」の活動を「近所」と発信に努める方針を示した。平田厚代表は「この身近な生活圏に密着して、2010年度の全体的な福祉活動に発展させたい」と述べた。

18日、2010年度の全体的な福祉活動に発展させたい」と述べた。

「これまでも、これからは、生活圏密着の活動を」と題して公開型研修会を開催した。研修会には、会員でない人も参加して、それぞれが生活する地域の福祉課題などについて意見を交わした。



本年度の活動方針などを示した「静岡福祉文化を考える会」の全体会と公開型研修会—静岡市駿河区の県総合社会福祉会館

「高齢者の孤立地域で解決を」

静岡市連絡会

「静岡福祉文化を考える会」(平田厚代表)は16日、県委託事業「ひとりでも安心して暮らせる地域づくり事業」の第3回関係者連絡会を静岡市駿河区の県総合社会福祉会館で開いた。高齢者の孤立・孤独解消をテーマにした4市町のモデル地区の取り組みなど本年度の活動を振り返った。

連絡会にはモデル地区福祉関係者らが参加した。モデル地区の一つ、西伊豆町内の2地区では、近隣住民同士が支え合い、「近所福祉」を目標とした「うち子地区」は、老人クラブなど既存の組織にとらわれない支援の形を構築するために、福祉関係者として県民が意見交換を重ねた事例を紹介した。

平田代表は「生活圏を中心とした小さな地域の中で高齢者の課題を解決していくことが大切。住民の意見交換が大切」と



代表は「本年度は福祉コミュニティの再構築を掲げ、若者が高齢者と同じ合の地域づくりを目標とした」と述べた。

研修会では、東日本大震災の被災地に支援に赴いた参加者が体験談を披露した。約30人の参加者は、その体験談を踏まえて「高齢者が安心して暮らせる地域」について意見を交わした。

静岡 平成23年(2011年)5月9日(月曜)

高齢者と向き合う「地域づくり」目指す 市区
市民団体が研修会
地域が抱える社会福祉問題について考えてもらおうと、市民団体「静岡福祉文化を考える会(平田厚代表)」は8日、全体会と公開型研修会を静岡市葵区の県総合社会福祉会館で開いた。

全体会では、2010年度に県の委託を受けた「(高齢者が)一人でも安心して暮らせる地域づくり事業」で、県内4地



「高齢者が安心して暮らせる地域づくり」について説明する平田代表(左端)＝静岡市葵区の県総合社会福祉会館

区で研修会やシンポジウムを開き、高齢者の生活状況や意識を調査したことを説明した。

静岡 平成22年(2010年)8月3日(火曜日)



独り暮らしの高齢者をご近所で見守るかについて議論するワークショップ参加者
＝静岡市葵区の県総合社会福祉会館

独り暮らし高齢者への福祉活動 「ご近所」の力大切

「静岡福祉文化を考える会」(平田厚代表)は、総会を開き、県内の独り暮らしの高齢者に対する福祉活動の実態を探るため、県内4市町の住民や福祉関係者らが地域ごと

この後行われた、第1回公開型研修会「これからの「ご近所」の支え合いはどうか」には、4市町以外の合計15市町の住民ら約40人が出席。4班に分かれたワークショップでは「まずはあいさつなどさりげない見守りが大事」「住民一人一人が担い手である」と意識が醸成された。

今後は、関係者連絡会と公開型研修会などを随時開いて議論を深め、年度末に報告書にまとめる予定だ。

「静岡福祉文化を考える会」年度の「第1回関係者連絡会」(平田厚代表)は、総会を開き、県内の独り暮らしの高齢者に対する福祉活動の実態を探るため、県内4市町の住民や福祉関係者らが地域ごと

この後行われた、第1回公開型研修会「これからの「ご近所」の支え合いはどうか」には、4市町以外の合計15市町の住民ら約40人が出席。4班に分かれたワークショップでは「まずはあいさつなどさりげない見守りが大事」「住民一人一人が担い手である」と意識が醸成された。

今後は、関係者連絡会と公開型研修会などを随時開いて議論を深め、年度末に報告書にまとめる予定だ。

**「ご近所福祉など
取り組みを確認
静岡で連絡会**

「静岡福祉文化を考へる会(平田厚代表)はこのほど、高齢者の孤立・孤独解消を目的に2007年度から開始する県委託事業「一人でも安心して暮らせる地域づくり事業」の第1回関係者連絡会を静岡市葵区の県総合社会福祉会館で開いた。

県からモデル地区に指定された西伊豆町、富士



地域福祉の課題などを確認し合う参加者
—静岡市葵区の県総合社会福祉会館

静岡で連絡会
「静岡福祉文化を考へる会(平田厚代表)はこのほど、高齢者の孤立・孤独解消を目的に2007年度から開始する県委託事業「一人でも安心して暮らせる地域づくり事業」の第1回関係者連絡会を静岡市葵区の県総合社会福祉会館で開いた。

県からモデル地区に指定された西伊豆町、富士

平田代表が本年度のテーマ「生活圏域における住民一人一人に真の居場所」について話し合う啓発学習会「地域特性を生かしたモデル事業の展開」「地域交流の実態を把握する調査活動」などの取り組みを確認した。

平田代表は「福祉の課題を地域で解決するには、年代や性別を超えた『隠れる環境』をつくるのが必要」と訴えた。

●平成20年度から平成26年度までの7年間、毎年度2回開催した「一人でも安心して暮らせる地域づくり事業関係者連絡会」において、実践モデル地区の活動報告を共有し、熱心な議論をして、長寿者の地域からの孤立・孤独防止策の課題解決に向けた研究協議を重ね、各方面に課題提起をした。



*マスコミ各社の取材の中で開催した連絡会



*連絡会出席者に、午後の公開型研修会で実践事例を紹介



*この日は、広く県民に呼びかけ、公開型連絡会を開催



*関係機関の出席をいただき開催した連絡会

この7年間の本会活動は、本会結成以来の活動目的に沿って、3つの活動基調と3つの柱立ての活動内容を維持しながら、県からの委託事業の趣旨をしっかりと受け入れることを基本に展開をした。

県委託事業「一人でも安心して暮らせる地域づくり事業」は、国の「国庫補助事業：孤立死ゼロ・モデル事業実施要綱(平成19年8月7日厚生労働省老健局長通知)」と、平成20年度～平成25年度

までは、「セーフティネット支援対策等事業費補助金」の「地域福祉等推進特別事業」の対象事業として組み立てられている。ここで、明記されている「孤独」とは、地域コミュニティにおいて、要支援者として地域との関わりを有している環境の中で、見守り環境に至らない状況と置き換えられている。「孤立」とは、自ら地域コミュニティから離れている環境にある状況を捉えている。

この7年間は、静岡県委託事業と本会の年間活動を「融合」させて、「静岡発 福祉文化の創造」を県内各地に発信できるように努力してきた。

7年間の「事業報告書」から、項目ごとに抜粋し、各活動の概要を下記にまとめた。

(1) 年度別活動(事業)テーマ

- ・平成 20 年度 「協働と融合による、長寿者が自立できる地域づくりを拓く」
- ・平成 21 年度 「長寿社会と地域づくりに向けた福祉文化の実践」
- ・平成 22 年度 「生活圏域で、一人一人の居場所を考える」
- ・平成 23 年度 「家族とは何か？ 私の居場所があるかを検証する」
- ・平成 24 年度 「ここが一番、ホッとする私たちのご近所の居場所づくりを探る」
- ・平成 25 年度 「人々が豊かに暮らし合い、安心して暮らせる地域づくりを検証する」
- ・平成 26 年度 「静岡発 福祉文化の創造による

豊かに暮らせる生活圏域の地域づくりをめざす」

*7年間の活動テーマから考察すると、まずは「長寿者」自身が家族や地域に依存することなく生活できることが原点と捉えた。次に、地域の現状を把握しながら、身近な地域社会における支え合いこそ大切であることを発信した。長寿者の自立と地域環境を整えたうえで、お互いに歩み寄れる地域の居場所の重要性を提言した。

そして、福祉の原点は、家族・家庭であることを認識しながら、家庭機能の弱体化と共に、小地域における家庭化機能について考えた。そして、改めて、人々が豊かに、そして、安心して暮らせる地域づくりを静岡発 福祉文化の創造により創り上げていくことを提言した。

(2) 「関係者連絡会」の開催

- ・委託事業実施の7年間、本会会員代表、静岡県担当者・静岡県社会福祉協議会職員、モデル実践地区行政・社協職員・実践者代表等に出席いただき、毎年度各2回開催した。事業の円滑な実施と共に、長寿者を取り巻く地域社会について、県内各地の実践活動を通じて意見を共有した。



*「講演会」終了後、登壇者と主催者がそろって

(3) 静岡県主催「事業講演会」に出席し事業を報告

- ・毎年度開催された県主催「事業講演会」に、本会に協力していただいた、県内各市町の地域実践者をはじめ、市町行政社会福祉協議会・社会教育領域関係者、若者活動実践者の皆さんと共に出席し、年度ごとに掲げた「事業テーマ」に基づき取り組んだ委託事業の経過報告と共に、本事業のモデル実践地区代表者等にも協

力をいただき、地域の実情を併せて実践報告をしていただくとともに、事業から浮き彫りになった課題等をまとめ「一人でも安心して暮らせる地域づくり」の提言をした。

(4) 事業最終年度（平成 26 年度）に「共創社会実現研究会」を設置し、7 年間の事業を総括

- ・これまで、本事業に関わっていただいたモデル実践地区代表、行政・社協領域、NPO 法人企業領域、コミュニティ領域、民生委員領域、さわやかクラブ領域、福祉施設領域、地域包括支援センター領域、市民活動領域、社会教育領域、青年層（大学生）領域等から 25 名を委員として委嘱をし、8 月・10 月・12 月・2 月の計 4 回開催した。



*各委員の協力で精力的に開催

- ・この研究会では、特に「社会教育と社会福祉の融合」と「若者の社会参加」を研究協議に加え、福祉関係者による地域課題解決から、いかにして、他領域との協働・融合による課題解決出来るか協議を深めた。また、世代を超え地域全体で「一人でも安心して暮らせる地域づくり」に取り組むために、若者層の地域参加をいかに働きかけるかの議論も深めた。
- ・研究協議から、まとめられた 20 の提言（要約）は、下記の通りである。
 - ① “老いの準備学”として、誰もが学ぶ領域を認識する。「住民の意識改革」
 - ②それぞれの地域性を認識し、決してまねごとではなく、また、遅いか早いかではないない、地域住民がしっかりと地域を理解するとともに、家庭・家族機能とつながる地域力の向上に努める。
 - ③地域の活動拠点の掘り起しと共に、地域の人材発掘に努める。
 - ④地域の実情に合った、地区住民（役員）・民生委員・行政等が日常的につながる、協働の仕組みづくりを心掛ける。
 - ⑤地域活動を継続的に発展させる「地区活動計画」策定に取り組む。
コミュニティ組織運営における役員交代（任期）と活動継続性の問題が生じる現状の中で、3 年、5 年先を見通し地域の状況を踏まえ、役員 OB も加わった活動計画策定努力と、任期付の役員以外に、公募制や自主的に地域活動参加の枠を設ける。
 - ⑥生活圏域の「福祉ニーズ」を常に共有し、総合的専門機関との連携の努力をする。
 - ⑦近隣自治会等との相互連携に努める。
 - ⑧地域活動の財源確保の努力をする。
常に地域課題を解決するために、積極的に、県市町及び企業等の各種助成事業等の情報収集に努める。
 - ⑨地域で子どもたちを育むために、学校教育・社会教育、関係機関・団体等との日常的な連携維持に努める。
 - ⑩依存的な地域活動から脱皮して、世代を超えた「地域力の再構築」に努める。
 - ⑪なぜ、福祉活動を生活圏域で考え学び合う地域環境づくりに努める。
血縁から地縁、地縁から社縁、志縁と、地域の課題解決を身近な地域で支え合う仕組みを考える。
 - ⑫専門性と市民性の融合に努める。
地域完結による問題解決から、専門機関・団体等を生活圏に呼び込み、総合的に解決する努力をする。

- ⑬集団間調整機能を常に、地域から専門領域に働きかけていく。
縦型社会から、横型社会によるつながる社会の仕組みを常に働きかけていく。
行政各部署間調整機能を市民にはっきりと示すように呼びかけていく。
- ⑭地域をトータルにコーディネートする機能を明確にしていく。
地域の意見をしっかりとまとめ、問題解決のプロセスを明確にしていく。
- ⑮人材育成掘り起しを常に努力していく。
地域活動の担い手は、地域住民一人一人であることを認識し、それぞれの領域に関わる役割分担を明確にしておく。
- ⑯楽しい地域環境づくりに努める。
常に、生活圏域における、地域問題解決に向けて、楽しいふれあい交流で仲間づくりに心掛けて、小さな縁を創る努力をする。そして、つながるご近所福祉をめざす。
- ⑰大人社会が、若者の地域参加の機会を積極的に呼びかけ、世代間意識格差が生じないように努力をする。社会教育と社会福祉との融合により、地域環境の醸成に努める。
- ⑱情報化時代を迎え、全ての年代にあった、地域の情報を共有できる仕組みを創る。
- ⑲地区全体の動きが全世代にわかるように、長期的な展望を示す努力をする。
- ⑳地域の福祉課題を、常に「見える化」「わかる化」していく。

(5)7年間の「調査研究事業」の取り組み

*委託事業の趣旨に基づき「長寿者」を取り巻く状況把握に努めた。

調査から浮き彫りになった課題・考察を各年度に開催した「公開型研修会」等で公表すると共に、「調査報告書」にまとめ、県内外の各方面に情報発信をした。

- ・平成20年度
 - ①「長寿者の生きがいその意識と実態調査」
 - *県内在住 18歳以上対象
 - *回収/配布状況(回収率) 1,274/2,028 (62.8%)
 - ②「長寿者の日常生活と福祉情報に関する調査」
 - *県内2地区指定(掛川市・旧富士川町) さわやかクラブ会員等
 - *回収/配布状況(回収率)

・掛川市西山口地区	623/803	(77.6%)
・旧富士川町	1,276/1,661	(76.8%)
・全体	1,899/2,464	(77.1%)
- ・平成21年度 「長寿社会に関する県民意識と実態調査」
 - *県内在住 18歳以上対象
 - *回収/配布状況(回収率) 1,341/2,000 (67.1%)
- ・平成22年度 「生活圏域における支え合いとは何か本音に迫る調査」
 - *県内在住 18歳以上対象
 - *回収/配布状況(回収率) 1,345/2,256 (59.6%)
- ・平成23年度 「地域と私の居場所その意識と実態調査」
 - *県内在住 10代以上対象

- *回収/配布状況(回収率) 1,440/1,347 (107%)
- ・平成24年度 「家族ってなに その意識と実態調査」
 - *県内在住10代以上対象
 - *回収/配布状況(回収率) 1,583/1,700 (93.1%)
- ・平成25年度 「長寿者とつながる ホットするご近所づくりその意識と実態調査」
 - *県内在住10代以上対象
 - *回収/配布状況(回収率) 1,671/2,020 (82.7%)
- ・平成26年度 「豊かに暮らせる地域づくり その意識と実態調査」
 - *県内在住10代以上対象
 - *回収/配布状況(回収率) 1,522/1,945 (78.3%)

以上、7年間の調査研究実績から、まず、1年目は「長寿者の自立」をもとに長寿者の生きがいを問い質した。そして、2年目は、「長寿者と共に暮らし合う、共生社会の実現」を検証する長寿社会への課題を問い質した。

3年目は、生活圏域という、身近な地域における長寿者を取り巻く課題として「生活圏域における支え合い」を問い質した。

4年目は、引き続き生活圏域における、住民一人一人の居場所を検証する調査に取り組んだ。ここから、浮き彫りになったのは、真の居場所は家庭・家族であるとの認識から、長寿者も住民一人一人も、真の居場所である家族・家庭機能をどのように受け止めているかを問い質した。5年目は、家族・家庭機能、6年目はご近所の支え合いを検証した。

そして、7年目の調査研究事業では、地域社会全体を問い質した。

長寿者に関する調査については、県民の関心は高く、本会結成以来取り組んできた「調査」では、いずれも回収率が高い。

(6)長寿者を取り巻く課題をもとに取り組んだ啓発学習「公開型研修会」の実績

- ・平成20年度(4回開催)
 - 第1回公開型研修会「地域で豊かに暮らし合うための条件 ―長寿者と福祉文化―」
 - 第2回公開型研修会「ホットする居場所 ここが一番居心地がいい」
 - 第3回公開型研修会「第1回ご近所福祉INぬまづ」
 - 第7回静岡県福祉文化研究セミナー
 - 「長寿者とともに暮らす 共生社会づくりに担い手は一体誰か？」
- ・平成21年度(6回開催)
 - 第1回公開型研修会「共生社会と福祉文化」
 - 第2回公開型研修会「私にとって、心安らぐ居場所って何処？」
 - 第3回公開型研修会「協働による福祉社会再構築と福祉文化を大いに語ろう」
 - 第4回公開型研修会「ご近所福祉INこがわ」(焼津市小川地区)
 - 第5回公開型研修会「第2回ご近所福祉INぬまづ」
 - 第8回静岡県福祉文化研究セミナー

「長寿者と共に、小地域をつなぐ仕組みづくりの実現に向けて」

・平成 22 年度（11 回開催）

第 1 回公開型研修会「一人でも安心して暮らせる地域づくりの条件」

第 2 回公開型研修会「これからの近所の支え合いはどうなるの？」[井戸端会議方式]

第 3 回公開型研修会「サロンはなにをめざすのか」

第 4 回公開型研修会

「これまでとこれから 一生活圏域の支え合いの仕組みづくりの提案—」

第 5 回公開型研修会「第 3 回近所福祉 I Nぬまづ」

第 9 回静岡県福祉文化研究セミナー

「これからの近所福祉の原点を探る」（オープン式 K J 法に挑戦）

福祉コミュニティ講座（障害者福祉施設と共催開催・5 回シリーズ）

「ホッとする、私が主役の福祉のまちづくりにチャレンジ」

・平成 23 年度（9 回開催）

第 1 回公開型研修会「これまでとこれから 一静岡発 福祉文化の創造—」

第 2 回公開型研修会「福祉文化の創造の原点に立って 一世代を超えて語り合う—」

第 3 回公開型研修会「第 4 回近所福祉 I Nぬまづ」

第 4 回公開型研修会「共生社会実現への道程」

第 10 回静岡県福祉文化研究セミナー

「世代を超えて、近所の支え合いを語り合う」

福祉コミュニティ講座（障害者福祉施設と共催開催・4 回シリーズ）

「住民主役の福祉のまちづくりを学ぶ」

・平成 24 年度（8 回開催）

第 1 回公開型研修会「近所とつながる家族機能を考える」

第 2 回公開型研修会「誰が担う？つながる地域 支え合う地域」

第 3 回公開型研修会「協働による地域実践活動に学ぶ」

第 4 回公開型研修会「地域と家庭・家族のつながり」

第 5 回公開型研修会「第 5 回近所福祉 I Nぬまづ」

第 6 回公開型研修会「共創社会に向けて」

第 11 回静岡県福祉文化研究セミナー

「福祉文化と家族 一これまでの家族、これからの家族—」

福祉コミュニティ講座（障害者福祉施設と共催開催） 「ホットな出会い 楽しい遊び」

・平成 25 年度（6 回開催）

第 1 回公開型研修会「つながる近所の再構築の決め手は？」

第 2 回公開型研修会

「住民主体で近所を診断 一長寿者が輝くこれからの近所を創る—」

第 3 回公開型研修会「実践事例から検証 一近所の支え合いの取り組みを学ぶ—」

第 4 回公開型研修会「第 6 回近所福祉 I Nぬまづ」

第5回公開型研修会「長寿者宅訪問研修 ―長寿者に学ぶご近所福祉―」

第12回静岡県福祉文化研究セミナー

「誰がご近所を福祉を創るか ―これが一番。ホッとする支え合い―」

・平成26年度（15回開催）

第1回公開型研修会「福祉文化ってなに① 豊かに暮らし合える地域を大いに語ろう」

第2回公開型研修会「福祉文化ってなに② 地域の豊かさとは何か」

第3回公開型研修会「鈴木君なぜ地域参加するの？山田君なぜ地域参加しないの？」

第4回公開型研修会「地域の豊かさとは ―静岡発 福祉文化の創造からの検証―」

長寿者訪問型研修会開催（10回開催）「長寿者を取り巻く地域問題解決の提言」

第13回静岡県福祉文化研究セミナー

「静岡発 福祉文化の創造 人々が豊かに、安心して暮らせる地域づくりを語る」

* 県委託事業の「啓発学習」は、7年間で計59回開催した。

最終年度（平成26年度）は、精力的に15回開催している。この委託事業でも、県内各地で開催する「現場セミナー」方式の取り組みを重視した。

特に、沼津市社会福祉協議会の全面的協力をいただき、「ご近所福祉INぬまづ」を継続して6年間取り組むことができた。

* 「施設の社会化」が叫ばれている中、障害者福祉施設において「福祉コミュニティ講座」を年間4～5回シリーズで3年間継続して取り組み、福祉施設こそ地域福祉の拠点として、市民と共に共創社会実現に向けた取り組みをしていただいた。

* 一貫して、外部講師を迎えた「啓発学習プログラム」ではなく、市民主体で参加型プログラムによる取り組みをした。

研修に参加した市民は、それぞれの地域性を踏まえ、学び合ったものを地域で活かそうと研修の継続的受講により、認識を深められていた。

* いかにして、若者の地域参加を働きかけるか、今日的な課題がある。また地域の担い手としての認識を高めるために、高等教育機関において、若者（大学生）の自由な選択により、要請のある多くの地域参加プログラムを積極的に提供し、地域社会における実体験の機会をもつ機会が出来た。地域の課題を浮き彫りにする中で、地域コミュニティの理解と共に、取り分け、長寿者理解を深めることが出来た。

このことは、地域課題をもとに、若者としての支援のあり方を議論することの必要性と共に地域課題を「見える化」「わかる化」する、「地域福祉教育教材」の開発にもつながっている。

* 「福祉と教育の融合」とりわけ、「地域福祉と社会教育の融合」は、地域住民に向けた教育においては、重要な課題である。

このたびの事業展開については、社会教育領域をも念頭に、啓発学習プログラムを検討し、大人社会と若者層との学び合いや、地域課題解決と社会教育、コミュニティとの関連性をもたせて展開することに心掛けた。

(7) 県内全域における「モデル実践地区」の取り組み

*本事業が単なる机上論で終ることなく、それぞれの地域性をもとに、検証することを事業計画に位置付け、県内の各市町に「モデル実践地区」をお願いした。

しかし、単年度事業として取り組んでいたため、事前に早めに依頼・打診することが出来ず、大きな課題ではあったが、県内市町の行政をはじめ、社会福祉協議会に、本事業の趣旨をしっかりと伝え、ご理解のもと各年度別に、地域領域（東部・中部・西部）を均等に判断しながら取り組んでいただくことが出来た。継続的取り組みが可能な地区については、引き続きお願いした。年度別モデル実践地区は次の通り。

- ・平成 20 年度 「沼津市」「旧富士川町」「掛川市」「袋井市」 3 市 1 町
- ・平成 21 年度 「小山町」「伊豆の国市」「焼津市小川第 1 1 自治会」「菊川市」 3 市 1 町
- ・平成 22 年度 「藤枝市」「磐田市」「富士宮市」「沼津市」(2 回目)「西伊豆町」 4 市 1 町
- ・平成 23 年度 「富士宮市」(2 回目)「西伊豆町」(2 回目)
「川根本町」「袋井市」(2 回目) 2 市 2 町
- ・平成 24 年度 「熱海市」「牧之原市」「掛川市」(2 回目)「西伊豆町」(3 回目)
「富士宮市」(3 回目)「沼津市」(3 回目) 5 市 1 町
- ・平成 25 年度 「長泉町」「熱海市」(2 回目)「牧之原市」(2 回目)「沼津市」(4 回目)
「島田市」「御前崎市」「森町」 5 市 2 町
- ・平成 26 年度 この年度は、これまでの実践地区を総合的に検証

* 6 年間に「モデル実践地区」として、取り組んでいただいた市町は、継続回数を除き、2 政令市を除くと、33 市町 (21 市 12 町) のうち、14 市 (全体の 67%) 5 町 (42%)、19 市町 (58%) に及ぶ。

この「モデル実践地区事業」の実績考察では、「静岡発 福祉文化の創造」のもとに「長寿者の孤立・孤独防止策」については、ある程度県内への啓発課題提起は出来たと感じた。

* なかでも、「熱海市」(2 回目)「牧之原市」(2 回目)「掛川市」(2 回目)「袋井市」(2 回目)「富士宮市」(3 回目)「西伊豆町」(3 回目)「沼津市」(4 回目)は、単年度事業を継続して取り組み、地域性を鑑みながら、広く住民に問題提起をしていただいた。

* 「沼津市」「焼津市」「西伊豆町」においては、事業内容を「見える化」「わかる化」する「ご近所福祉啓発事業」に取り組みされた。「西伊豆町」は、近隣市町との連携による、広域的な展開で事業を共有した。

* 「モデル実践地区」の取り組みを通じて、浮き彫りになったことは、

- ① 地域課題を地域住民に常に明らかにし、他人事ではない、地域住民一人一人がどのように関わることが必要かを呼び掛けること。
- ② 地域をどれほど知っているか、役員または専門領域の関係者だけが知っていればよいではなく、常に、地域住民が知っておくべき情報提供のあり方、「地域診断（地域ニーズの把握）」に心掛けていくこと。
- ③ よく使われている「協働」「融合」「共創」は、いかに他領域とつながるかである。そして、つながるためには、地域を総合的に調整できる人材の掘り起しに努めること。

- ④「知らない」「関わらない」私ではなく、この地域のこの活動はどのようにして、現在取り組まれているのか、その原点をしっかりと認識していく、「プロセス重視」が大切であること。
- ⑤専門家集団と市民集団による地域課題解決への努力を継続していくこと。
- ⑥まずは、「足元福祉」から「ご近所福祉」「地域福祉」へとつなげていくこと。
- ⑦地域の活動状況を常に情報発信していくことに努めること。

(8) 本事業を県内外に広く情報発信

- * 7年間、単年度ごとに、「静岡県委託事業 一人でも安心して暮らせる地域づくり事業報告書」(右写真)を発行(A4版約130P 400部)し、県内外関係機関・団体、市町行政・社協はじめ、地域実践者に送付した。
- * 本会機関誌「OUR LIFE」は、事業実施年度においては発行回数・部数を増やして、啓発に努めた。



4 「若者発 居場所あり方研究会」立ち上げ

静岡県委託事業には、当初から、多くの若者(大学生)の参加により活動が展開された。その都度、若者一人一人は、大人社会と向き合う中で、積極的に自分なりの意見や考え方を主張し、大人社会からは高い評価をいただき、これからの地域づくりの担い手に大きな期待をかけられていた。しかし、学生相互の主体的な地域活動までには至らなかった一面が感じていた。

新たに、平成25年度・平成26年度において、若者(大学生)対象に「長寿者に学ぶご近所福祉」を設定して、「長寿者を囲み本音で語る“ご近所福祉”のこれから」を研修テーマに、参加者を募った。

当時、自宅を開放して、日常的に地域住民との交流を積極的にされている、98歳の今を元気に過ごされている長寿者のご理解をいただき、具体的な展開となった。

2年間で、24回、延べ243名の若者(大学生)が、長寿者から、直接、ご近所との関わりの中でご苦労されているお話を真剣に聞きながら、若者(大学生)自身の生活を振り返る貴重な学びをした。

この学びからの意見(課題整理)を考察していく活動を、若者(大学生)たちが取り組もうと提案された有志で、地域を学ぶ活動として、「若者発 居場所あり方研究会」を立ち上げるに至った。その後は、本会からの要請による活動ではない、自主的な活動として本会活動と連携を図りながら活動に取り組んだ。

当面は、「若者発 居場所あり方研究会」をキャンパス内で、定期的に定例会を開催し「研究会通信」を発行し、他の若者にも啓発活動をしながら、身近な地域の福祉課題を共有し、本会の活動計画を把握し、活動参加を広げていった。更に、大学関係者と協議をし、キャンパス内の同好会として発展させた。



*本会委員会に出席し意見を交わす研究会メンバー